

和水町文化財調査報告 第11集

かみ お じょう あと
神 尾 城 跡

2021年

熊本県玉名郡和水町教育委員会

和水町文化財調査報告 第11集

かみ お じょう あと
神 尾 城 跡

2021年

熊本県玉名郡和水町教育委員会

序 文

和水町では、合併前の平成10年より町内に残る中世城跡の調査を実施しております。これまでに15城跡の調査を終えて8冊の報告書を刊行しましたが、今回は、平成29年5月から令和2年3月まで調査を実施した「神尾城跡」の調査報告書を作成いたしました。

神尾城跡は、本町北部を流れる十町川と和仁川の合流地点の上部高台に位置し、南関の大津山氏の居城で、戦国時代末期に肥前国竜造寺勢に攻められました。北西方向約4.6kmに隣接する国指定史跡「田中城跡」と同時代に存在した中世城跡の一つであります。

城跡は遺構の残りもよく、築造当時の様子を伺い知る事が出来ます。これまでも地元から大切に守られてきたことがわかります。

巻末には、阿蘇品保夫先生の玉稿を掲載しています。

最後になりましたが、調査にあたって終始、御指導と御助言をいただいた大田幸博先生、多大な御協力と御理解をいただきました地権者・関係各位の皆様に厚く御礼申し上げます。本報告書によって、郷土に対するさらなる理解が深まりますことを祈念いたします。

令和3年11月1日

和水町教育長 岡 本 貞 三

例 言

1. 本書は、熊本県玉名郡和水町大字大田黒字東川に所在する神尾城跡（中世城跡）の調査報告書である。
2. 神尾城跡は、和水町教育委員会が、平成29年5月から令和2年3月に測量調査を実施し、令和2年4月～令和3年5月に調査報告書を作成した。
3. 付論は、阿蘇品保夫氏（元八代市立博物館長）に玉稿をいただいた。
4. 本書の執筆は、益永浩仁（和水町社会教育課長補佐兼文化係長）と大田幸博氏（元菊水町史編纂委員会副委員長）が行った。資料整理は、石工みゆき氏と溝口真由美氏（人吉・遺跡調査事務所）で行った。
5. 本書の編集は、和水町教育委員会で行った。

本文目次

第Ⅰ章 調査の概要

第1節 調査の組織 1

第2節 調査の取り組み 1

第3節 町の概要 1

第4節 調査の経過 2

第5節 和水町の中世城跡 4

第6節 神尾城跡について 17

第Ⅱ章 調査の成果

第1節 細部の縄張り

1. A区 18

2. B区 22

3. C区 24

4. F区 28

5. G区 32

6. H区 38

7. I区 40

8. J区 44

9. K区 46

10. D区 48

11. E区 51

12. 大田黒熊野座神社 52

第2節 城跡の石造物調査

1. B区〔高城〕 53

2. 神尾山墓地 54

3. C区（C-1）・大田黒熊野座神社 59

4. B区（B-19）古川墓地 62

5. K区（K-5）墓地跡 65

6. 高畑地区 67

第Ⅲ章 まとめ

1. 『古城考』に見る神尾城跡の縄張り 68

2. 城跡の構造 70

3. 城跡の石造物について 71

4. 神尾城跡と麓集落について 71

5. 阿蘇品保夫氏の文献調査と現地との兼ね合い 72

〔参考〕大津山城跡 74

〔付論〕神尾城 阿蘇品保夫 76

歴史調査の楽しみ方「神尾城跡16」 大田幸博（広報なごみ 令和2年2月号） 77

写真図版 79

図 版 目 次

第1図	和水町位置図（熊本県）	第47図	G区 西尾根筋地形断面図（南下削平地－北）
第2図	江栗城跡 縄張り図	第48図	H区全体測量図
第3図	志口永城跡 縄張り図	第49図	堀切5断面図①（西－東）
第4図	焼米城跡 縄張り図	第50図	堀切5断面図②（南－北）
第5図	内田宮山城跡 縄張り図	第51図	堀切5測量図
第6図	内田今城跡 縄張り図	第52図	I区全体測量図
第7図	和仁石山城跡 縄張り図	第53図	I区地形断面図（西－東）
第8図	立石城跡 縄張り図	第54図	I区 東側測量図
第9図	江田城跡 縄張り図	第55図	I区 窪地実測図・地形断面図
第10図	鶯原城跡 縄張り図	第56図	I区 西側測量図
第11図	乙城跡・小乙城跡 縄張り図	第57図	J区測量図
第12図	牧野城跡 縄張り図	第58図	J区地形断面図（西－東）
第13図	川木城跡 縄張り図	第59図	K区全体測量図
第14図	萩原城跡 縄張り図	第60図	K区地形断面図（西－東）
第15図	日平城跡 縄張り図	第61図	D区 南側測量図
第16図	田中城跡 縄張り図	第62図	D区地形断面図（南西－北東）
第17図	神尾城跡 縄張り図	第63図	D区地形断面図（北西－南東）
第18図	和水町所在の中世城跡	第64図	D区 北側鞍部測量図
第19図	神尾城跡周辺地形図	第65図	E区全体測量図
第20図	神尾城跡全体縄張り図	第66図	大田黒熊野座神社境内測量図
第21図	A区全体測量図①	第67図	B区〔高城〕石祠位置図
第22図	A区上面域測量図	第68図	B区〔高城〕石祠実測図
第23図	A区全体測量図②	第69図	神尾山墓地 石塔位置図
第24図	A区地形断面図①（南－北）	第70図	神尾山墓地 石塔実測図①
第25図	A区地形断面図②（西－東）	第71図	神尾山墓地 石塔実測図②
第26図	A区地形断面図③（堀切1－東）	第72図	神尾山墓地 石塔実測図③
第27図	B区全体測量図	第73図	神尾山墓地 石塔実測図④
第28図	B区地形断面図（北東－南西）	第74図	C-1・大田黒熊野座神社 石造物位置図
第29図	C区～F区全体測量図	第75図	C-1 石祠実測図
第30図	C区～F区地形断面図（東－西）	第76図	神社境内 石碑実測図
第31図	B区〔高城〕～C区地形断面図（北東－南西）	第77図	神社参道北壁 石燈籠実測図
第32図	堀切2・堀切3測量図	第78図	神社参道石段 石燈籠実測図
第33図	堀切3南壁実測図	第79図	B-19（古川墓地）墓碑位置図
第34図	F区全体測量図	第80図	B-19墓碑実測図①
第35図	F区地形断面図（南－北）	第81図	B-19墓碑実測図②
第36図	堀切4（堀4-1）断面図（西－東）	第82図	K-5墓碑位置図
第37図	堀切4測量図	第83図	K-5墓碑実測図①
第38図	堀切4断面図（南－北）	第84図	K-5墓碑実測図②
第39図	堀切4（堀4-8）断面図（西－東）	第85図	高畑地区石塔位置図
第40図	G区・H区全体測量図	第86図	高畑六地藏 石塔実測図
第41図	G区・H区地形断面図（西－東）	第87図	高畑六地藏 宝篋印塔（五輪塔）実測図
第42図	G区 山頂～空堀・土塁～北斜面測量図	第88図	高畑地区 墓碑実測図（和仁川沿岸）
第43図	G区 山頂～空堀・土塁～北斜面地形断面図（南－北）	第89図	神尾城跡 縄張り計測図
第44図	G区 南斜面測量図	第90図	文献調査関連地形図
第45図	G区 西尾根筋測量図	第91図	大津山城跡縄張り図
第46図	G区 西尾根筋地形断面図（西－東）	第92図	神尾城跡・F区周辺図

第93図 大津山城跡・堀切1周辺図
第94図 萩原城跡縄張り図

第95図 萩原城跡・Ⅲ郭周辺図
第96図 吉弘氏略系図（案）

写真目次

写真(1)	A区上面 (A-1c)	写真(24)	G区西尾根筋南斜面 (G-43)
写真(2)	堀切1 (A-16より)	写真(25)	G区南下削平地 (G-57)
写真(3)	東斜面段状地形の第1・2崖線	写真(26)	G区尾根筋北斜面 (G-66)
写真(4)	北西側段状地形と第4崖線	写真(27)	H区西端部 (H-1)
写真(5)	B-21と第3崖線⑥	写真(28)	堀切5 (南→北)
写真(6)	〔高城〕北東斜面と第6崖線	写真(29)	I区・窪地 (東→西)
写真(7)	B-9と第7崖線 (東側)	写真(30)	小溝 (I-24)
写真(8)	B-30と第10崖線	写真(31)	小溝 (I-28)
写真(9)	C-12と第13崖線	写真(32)	I-29 (東→西)
写真(10)	主軸尾根東直下 (C-16)	写真(33)	I-36 (東→西)
写真(11)	C-19と第14崖線	写真(34)	J-1 (I-33より)
写真(12)	C-26と第16崖線	写真(35)	J-1 (南→北)
写真(13)	北斜面段状地形 (C-32)	写真(36)	崖面・通路跡
写真(14)	堀切2 (堀2-2→堀2-1)	写真(37)	K-1と崖面 (南→北)
写真(15)	堀切3南壁 (大田黒熊野座神社境内)	写真(38)	K-4 (西→東)
写真(16)	F-1 (西→東)	写真(39)	神尾山墓地 (D-8)
写真(17)	G-3→堀切4→F-6	写真(40)	D-11と第17崖線
写真(18)	堀切4 (南→北)	写真(41)	D-13と崖面
写真(19)	堀切4北側 (堀4-8)	写真(42)	D-42 (西→東)
写真(20)	堀4-8と西肩部の土塁13	写真(43)	E-2 (登城道)
写真(21)	底部19 (西肩部土塁西下の凹地)	写真(44)	大田黒熊野座神社
写真(22)	空堀 (G-5) と土塁 (G-6)	写真(45)	古川墓地
写真(23)	G区北斜面 (G-16)	写真(46)	日の神様「岩本さん」

表目次

第1表	調査経過表①	第18表	C区崖線計測表
第2表	調査経過表②	第19表	C区遺構計測表③
第3表	A区遺構計測表①	第20表	C区遺構計測表④
第4表	A区遺構計測表②	第21表	C区遺構計測表⑤
第5表	A区遺構計測表③	第22表	C区遺構計測表⑥
第6表	A区遺構計測表④	第23表	C区遺構計測表⑦
第7表	A区遺構計測表⑤	第24表	堀切2計測表
第8表	A区遺構計測表⑥	第25表	F区遺構計測表①
第9表	A区遺構計測表⑦	第26表	F区遺構計測表②
第10表	A区崖線計測表	第27表	堀切4計測表①
第11表	B区遺構計測表①	第28表	堀切4計測表②
第12表	B区崖線計測表	第29表	堀切4計測表③
第13表	B区遺構計測表②	第30表	土塁計測表
第14表	B区遺構計測表③	第31表	底部計測表
第15表	B区遺構計測表④	第32表	G区遺構計測表①
第16表	C区遺構計測表①	第33表	G区遺構計測表②
第17表	C区遺構計測表②	第34表	G区遺構計測表③

第35表	G区遺構計測表④	第54表	J区遺構計測表③
第36表	G区遺構計測表⑤	第55表	K区遺構計測表①
第37表	G区遺構計測表⑥	第56表	K区遺構計測表②
第38表	G区遺構計測表⑦	第57表	D区遺構計測表①
第39表	G区遺構計測表⑧	第58表	D区崖線計測表
第40表	G区遺構計測表⑨	第59表	D区遺構計測表②
第41表	H区遺構計測表①	第60表	D区遺構計測表③
第42表	堀切5・土橋計測表	第61表	D区遺構計測表④
第43表	堀切5・土塁計測表	第62表	D区遺構計測表⑤
第44表	I区遺構計測表①	第63表	D区遺構計測表⑥
第45表	I区遺構計測表②	第64表	E区遺構計測表
第46表	I区遺構計測表③	第65表	神尾山墓地 石塔一覧表
第47表	I区遺構計測表④	第66表	石燈籠 年代表
第48表	I区遺構計測表⑤	第67表	古川墓地 墓碑年代表
第49表	I区遺構計測表⑥	第68表	K区 墓碑年代表
第50表	I区遺構計測表⑦	第69表	縄張り換算表①
第51表	I区遺構計測表⑧	第70表	縄張り換算表②
第52表	J区遺構計測表①	第71表	城跡概要
第53表	J区遺構計測表②		

写真図版

写真1	A区上面（A-1c→南側）	写真27	堀切5（南→北）
写真2	堀切1と第3崖線④	写真28	I区頂上（I-1）東→西
写真3	A-1c→堀切1→B-4	写真29	I-24（小溝）南→北
写真4	〔高城〕（B-1a）→B-9→堀切2	写真30	窪地（I-19）と土塁（I-20）
写真5	B-9→〔高城〕（B-1a）の第7崖線	写真31	J区・J-1とI-33の西壁
写真6	B-21と第3崖線⑥	写真32	J区・J-1の西壁
写真7	C-11→堀2-1→B-9	写真33	J-7と南側崖面
写真8	C-26→堀2-3	写真34	K-1（東→西）
写真9	堀2-1→C-12	写真35	K-2（西→東）
写真10	C区頂上（C-1）南→北	写真36	墓地跡（K-5）南→北
写真11	C区主軸尾根筋（C-9～C11）南西→北東	写真37	D-2→D-1
写真12	東門地斜面段状地形（C-19）南→北	写真38	D-11と第17崖線（北→南）
写真13	堀切3（F-2→C-15）	写真39	D区北鞍部（D-1→D-32）
写真14	堀切3南壁（大田黒神社）断面	写真40	E区・登城道（E-2）南→北
写真15	C-26→堀切3	写真41	E-3 南→北
写真16	堀切4（南→北）	写真42	E区・带状削平地（E-9）南→北
写真17	堀切4（北→南）	写真43	B-1a〔高城〕石祠②・③
写真18	F-6→堀切4→G-3	写真44	神尾山墓地（D-8）
写真19	G区 空堀（G-5）と土塁（G-6）東→西	写真45	神尾山墓地（D-9）
写真20	G区 空堀（G-5）と土塁（G-6）（屈曲部）	写真46	大田黒熊野座神社
写真21	G区北斜面 東→西	写真47	高畑の六地藏
写真22	H区主軸尾根筋平坦部（H-1）東→西	写真48	高畑地区の墓碑（和仁川沿岸の畑地）
写真23	I-6a→堀切5→H-1	写真49	小次郎丸地区
写真24	H区南斜面（H-7）東→西	写真50	笠の手の攻め口（推定）城跡西端部（白坂地区）
写真25	堀切5・土橋	写真51	水原（谷部）への入り口
写真26	堀切5・東側土壁 北→南	写真52	神尾城跡 遠景（南東側より）

第Ⅰ章 調査の概要

第1節 調査の組織

調 査 : 平成29年度～令和元年度 資料整理・報告書作成: 令和2年度～令和3年5月

調 査 主 体 和水町教育委員会

調査責任者 小出正泰 (教育長: 平成29年度～30年度)

岡本貞三 (教育長: 令和元年度～)

調 査 者 益永浩仁 (社会教育課長補佐兼文化係長) 西山真美 (文化係参事)

大田幸博 (元菊水町史編纂委員会副委員長・日本考古学協会員)

調査補助・資料整理 石工みゆき・溝口真由美 (人吉・遺跡調査事務所)

事 務 局 荒木和富 (社会教育課長: 平成29年度)

前渕康彦 (社会教育課長: 平成30年度～)

調 査 協 力 小山 暁 (吉地里づくり推進協議会長)

現 場 伐 採 荒木傳二 山本登志夫

第2節 調査の取り組み

〔1〕旧菊水町と旧三加和町は、平成18年3月1日に合併して、新たに和水町が誕生した。一年後に、和水町は『菊水町史』を刊行。「通史編」で、15箇所の中世城跡を掲載したが、4城跡(内田今城跡・日平城跡・志口永城跡・江栗城跡)は、本格的な調査に至っておらず、概略報告に留まった。そこで、和水町教育委員会では、平成19年度から、菊水地区の残り4城跡の調査に取り組み、平成29年5月末に最終の江栗城跡調査を終了した(平成28年4月に発生した熊本大地震では、城跡の道路際で大石の落石があり、現場を2ヶ月間休んだ)。引き続き、平成29年5月から三加和地区の神尾城跡調査に移り、令和元年度末まで実施した。

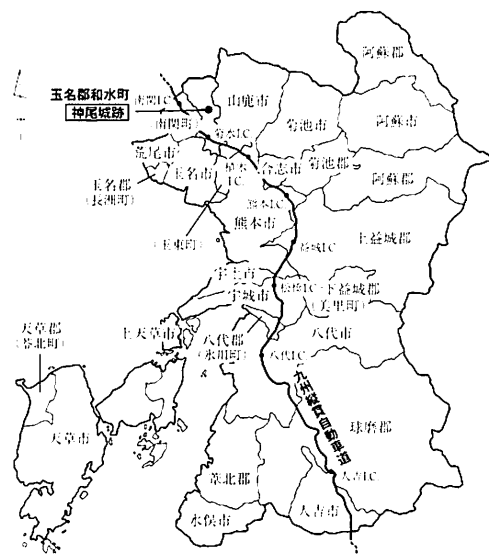
調査報告書は、平成24年度に『日平城跡』、平成28年度に『志口永城跡』を刊行した。令和2年度には『神尾城跡』を作成して、今年度に発刊した。

〔2〕神尾城跡内には、神尾山墓地をはじめ、3箇所に江戸期の墓地と大田黒熊野座神社がある。これらについても、三加和地区の歴史掘り起こしの観点から、石造物の詳細な調査を実施した。

第3節 町の概要

和水町は、熊本県北西部、福岡県との県境に位置し、南北約19km、東西9km、面積は約98平方km。九州縦貫自動車・菊水ICを有して、福岡都市圏まで、60分という交通の便に恵まれ、都市へのアクセス条件の良い地域である。また、菊池川などの自然と、江田船山古墳、田中城跡や豊前街道など、数多くの歴史的資源に恵まれている。平成31年度には、NHK大河ドラマ『いだてん～東京オリムピック噺』の放送があり、町は全国的な注目を集めた。ドラマの主人公・金栗四三の生家が、新たな観光名所に加わった。

産業面では、米や野菜・果実等の農畜産物の生産が盛んで、電器・精密機械などの企業を誘致して、農業併進による発展を遂げて来た。



第1図 和水町位置図(熊本県)

第4節 調査の経過

年	月	調査内容	写真撮影
平成29年 (2017年)	5月	江栗城跡近くの平野橋にある基準点から、神尾城跡のB区-1（高城）まで、高さを移動。	_____
	6月	〔測量〕 ※縮尺は200分1 B-1a・1b（高城）・9・10 E区の谷部を巡り大田黒神社へ至る城内道	_____
	7月	〔測量〕 A-1～7・16 堀切1 B-4・22	同月測量区域
	8月	〔測量〕 A-4～6 堀切2の東 B-5～8・12～15・19・20	同月測量区域
	9月	〔測量〕 B-22 堀切2の中央 堀切3 C-1～3・7・9～17・23～25 F-1～7 大田黒熊野座神社境内	_____
	10月	〔測量〕 C-26 堀切2の西 F-10 堀切4-1～11 土塁12～17 G-1～4・33～38	9月測量区域
	11月	〔測量〕 G-39～56 H-1・7 堀切5-1 土橋 土塁1～3	G～Hの尾根筋 堀切5
	12月	〔測量〕 G-5～7・57～59 堀切5-2 土塁3～5	同月測量区域 堀切4南端部
平成30年 (2018年)	1月	〔測量〕 G-60～66 H-3～7 D-1～4・11・32・38・40・42	_____
	2月	〔測量〕 B-2・3・11・16～18・21 C-4～6・8・18～22 D-5～7・33・35・36	G-60～66・7・56～58
	3月	〔測量〕 B-14 D-8・9・11・12・37・39・41 E区の最上位（北～西） 大田黒神社参道	B区・C区・D区
	4月	〔測量〕 F-1～8	F-1～8
	5月	〔測量〕 D-13～31	D-13～31
	6月	〔測量〕 B-25～27 C-27～29 F-9～12	B-25・26 C-27～29 F-10～12
	7月	〔測量〕 A-8・11～13・17・18 B-23～25	同月測量区域
	8月	〔測量〕 A-9・10・14・15 F-13～16	A区・主軸尾根の末端部 A-8～10・13～15・21
	9月	〔測量〕 A-19～22 B-28～36 C-30・31 F-15・16 堀切4の土塁12～17	A-19～22 B-31～36 C-30・31 F-15・16 堀切4-10・11
	10月	〔測量〕 G-8～32 南最上位（G-6の直下） 北最下位（G-29・G-17） 東端（堀切4の西肩部） 西端（G30～G23～G32）	同月測量区域

第1表 調査経過表①

年	月	調査内容	写真撮影
平成30年 (2018年)	11月	〔断面図〕 F区の丘頂区域・堀切4	_____
	12月	〔断面図〕 堀切4～F区西～F区 F区～堀切3～C区西 C区～C区南 C区北～堀切3 C区東～堀切2～B区（高城）	堀切4－8・1・2 堀切4－F区～堀切4－1 F区東斜面～堀切3 C11・24～堀切2 崖線（A－16・B－21）
平成31年 (2019年)	1月	〔断面図〕 堀切5～H区～G区～堀切3～堀切4（西～東） G区（南～北）（北西 空堀～土塁） H区（南～北） D区（北～南）（西～東） B区～D区（北～南）	_____
	2月	〔測量〕 A－6 〔断面図〕 A区（南～北）（東～西） 堀切1 B区（高城）の東崖面 B－21の崖線 G区（東尾根筋・北下の空堀と土塁・西尾根筋）	_____
	3月	〔測量〕 E区（谷部） 〔断面図〕 堀切5（東～西・南～北）	E区の全域
	4月	〔測量〕 I区の平地及び縁部（I－1～35）	I－1～35
令和元年 (2019年)	5月	〔測量〕 I区の南斜面（I－36～40） J区の南斜面（J－7～11）	_____
	7月	〔測量〕 J区の中心区域（J－1・2） 北斜面（J－3～6） K区の中心区域（K－1～5） 〔断面図〕 同月測量区域	J区・K区
	9月	〔測量〕 K区の北斜面（K－7） 南斜面（K－6） 神尾山墓地（1/100の地形測量）	_____
	10月	〔石造物調査〕 神尾山墓地 石塔拓本 広報掲載の原稿作成	神尾山墓地
	11月	〔石造物調査〕 大田黒神社 石燈籠拓本・石碑拓本 K区墓碑拓本 古川墓地 江戸期墓碑拓本 〔実測〕 堀切3断面	大田黒神社 石燈籠 古川墓地
	12月	〔石造物調査〕 古川墓地 江戸期墓碑拓本 K区墓碑拓本 高畑六地藏拓本 高城・石祠（3基）拓本 〔実測〕 高畑 宝篋印塔写真实測 C区頂上 石祠写真实測 〔精査〕 堀切2 〔聞き取り調査〕 古川 巧氏	堀切3断面全景 城跡地遠景（国道沿い・緑彩館） 高畑六地藏 C区石祠
令和2年 (2020年)	1月	〔測量〕 大田黒神社・参道 〔石造物調査〕 大田黒神社参道階段 石燈籠拓本 〔精査〕 D区	大田黒神社 階段 石燈籠
	2月	〔石造物調査〕 和仁川沿岸畑地・墓碑（3基）拓本 古川墓地 江戸期墓碑拓本	和仁川沿岸畑地 墓碑
	3月	〔精査〕 G区・H区・F区・C区・E区	_____
令和3年 (2021年)	4・5月	〔聞き取り調査〕 小山 暁氏	白坂～小次郎丸地区

第2表 調査経過表②

第5節 和水町の中世城跡

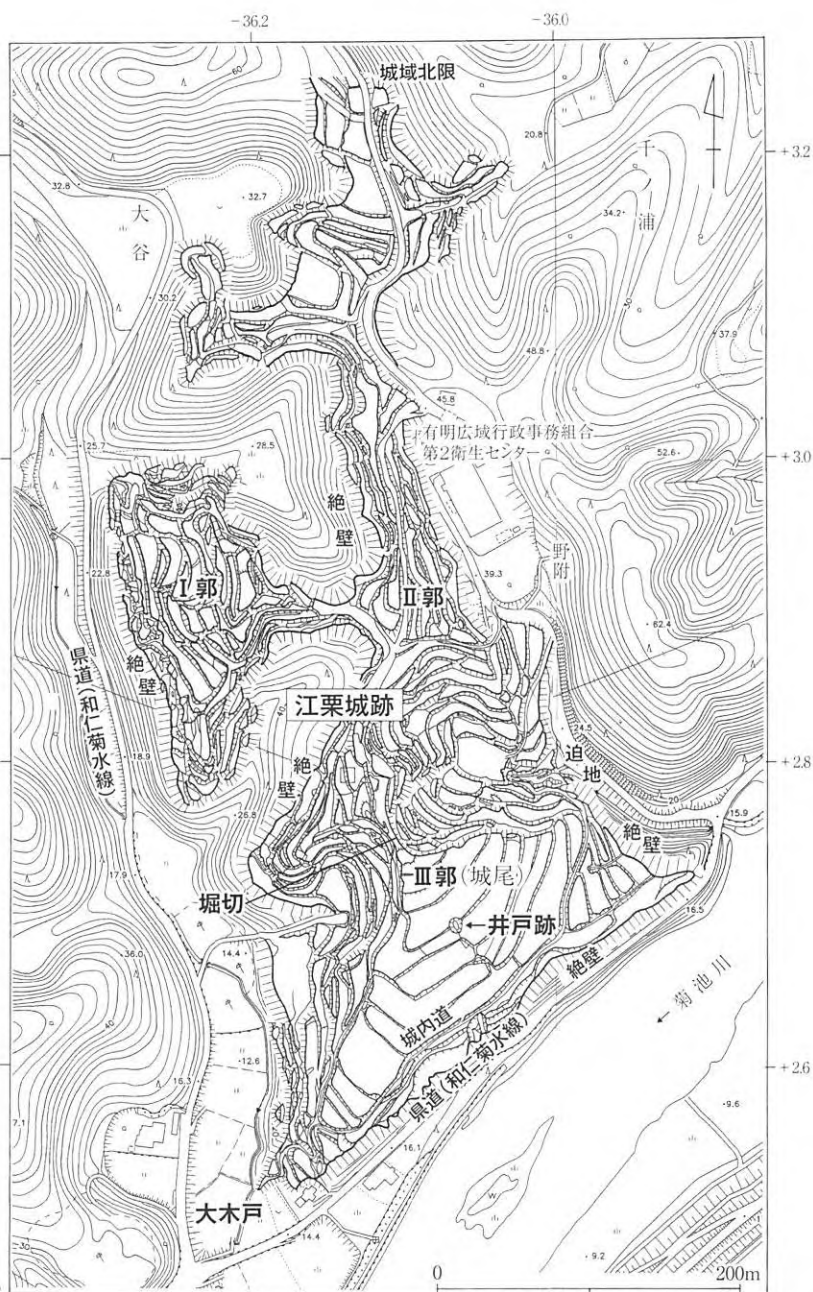
1. 江栗城跡

- ①所在地：大字江栗・字城尾
- ②麓とⅢ郭との高低差 38.6m
- ③文献未記載
- ④城跡の様子
 - ・「城尾」の字名。
 - ・測量調査済み。
 - ・菊池川の右岸に位置する。丘陵地の南域に築かれた大規模城跡。
 - ・Ⅲ郭の城尾地区は、中心区域で広い面積を有する。井戸跡と伝わる大穴がある。計測したが、伝承通りと思われる。
 - ・北西の鞍部・尾根筋は、極端に括れて堀切状をなす。
 - ・Ⅰ郭とⅡ郭は堀切の北にある。
 - ・Ⅰ郭は、丘頂ラインから西へ張り出す小山で、詰め城。ライン上のⅡ郭は、繋ぎの場所。
 - ・麓集落は、菊池川右岸に展開する江栗地区（城跡の南西側）。

【注】各縄張り図は、縮尺5000分の1で掲載した。ただし、城跡面積の関係から内田宮山城跡は1250分の1、日平城跡は1万分の1とした。

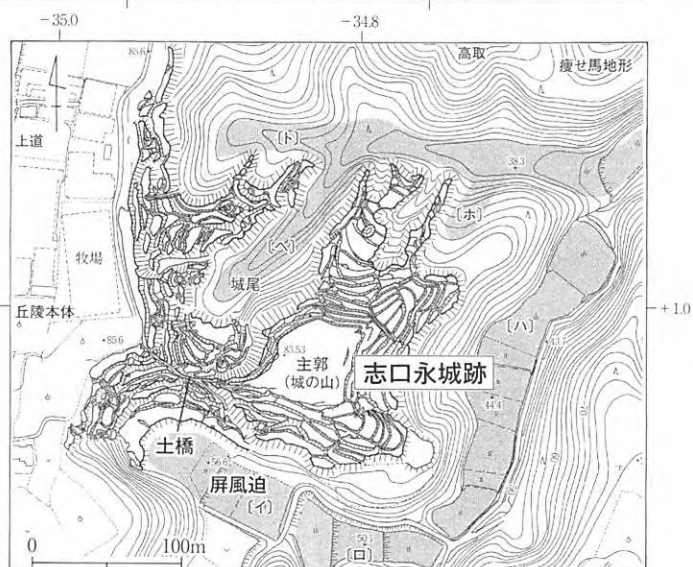
第2図 江栗城跡 縄張り図

※広報掲載図(2017年8月号)を再トレースした。



2. 志口永城跡

- ①所在地：大字高野・字城尾
- ②麓との高低差 -3.17m
- ③文献未記載
- ④城跡の様子
 - ・「城尾」の字名。「城の山」の小名。
 - ・城跡は、集落を含む丘陵からの張り出し部分。小山の丘頂域は、広い方形の緩傾斜地（主郭）。
 - ・丘陵本体と城跡は、長い痩せ馬地形の土橋で繋がる。
 - ・集落と主郭の高低差は、-3.17m。城跡が低く、極めて異例の立地条件。
 - ・麓集落は、城跡北西側の北屋敷。



第3図 志口永城跡 縄張り図

3. 焼米城跡

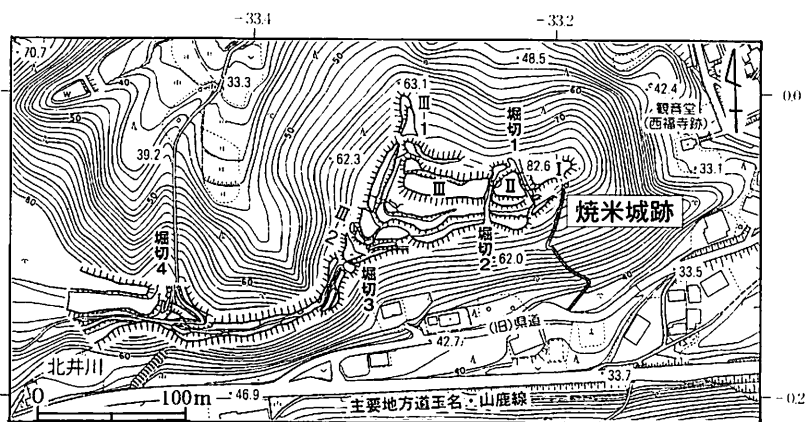
①所在地：大字焼米・字飛松

②麓との高低差 58m

③文献未記載

④城跡の様子

- ・「城山」の小名。
- ・地元に城主名の伝承。
- ・城主の焼米五郎は、鎌倉時代の人物とされるが、時期尚早の感。
- ・東西主尾根筋に、Ⅰ～Ⅲ郭と堀切1～2。南西下の鞍部にⅢ郭-2と堀切3。西南西へ延びる主軸尾根筋は痩せ馬地形で、端部に堀切4。
- ・麓集落の焼米地区は、江戸時代早期から山鹿坂田との行政境。東側の坂田川を挟み、焼米城跡と坂田城跡が近距離で対峙する。



第4図 焼米城跡 縄張り図

4. 内田宮山城跡

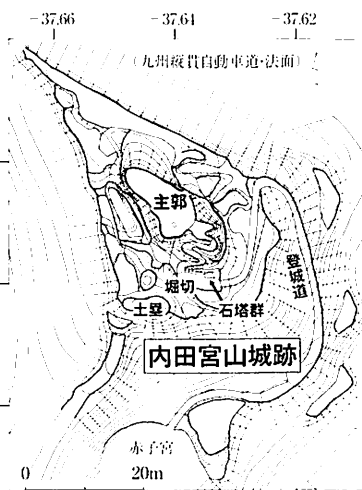
①所在地：大字内田・字宮脇

②麓との高低差 34.5m

③文献未記載

④城跡の様子

- ・地元に城跡の伝承。
- ・丘頂北側～北斜面～谷部が、九州縦貫自動車道工事の際に削除された。その際、谷部から大五輪塔や板碑が城跡の小段2に移された。
- ・大五輪塔は大永2年銘（1522）。五輪塔は永正10年銘（1513）。板碑は天文8年銘（1539）。
- ・小段2の下に堀切がある。
- ・城跡の南裾に神社の赤子宮。石製の手洗い鉢は、慶応二年（1866）に奉納。
- ・麓集落は内田地区。



※内田宮山城跡の縮尺は1250分の1
第5図 内田宮山城跡 縄張り図

5. 内田今城跡

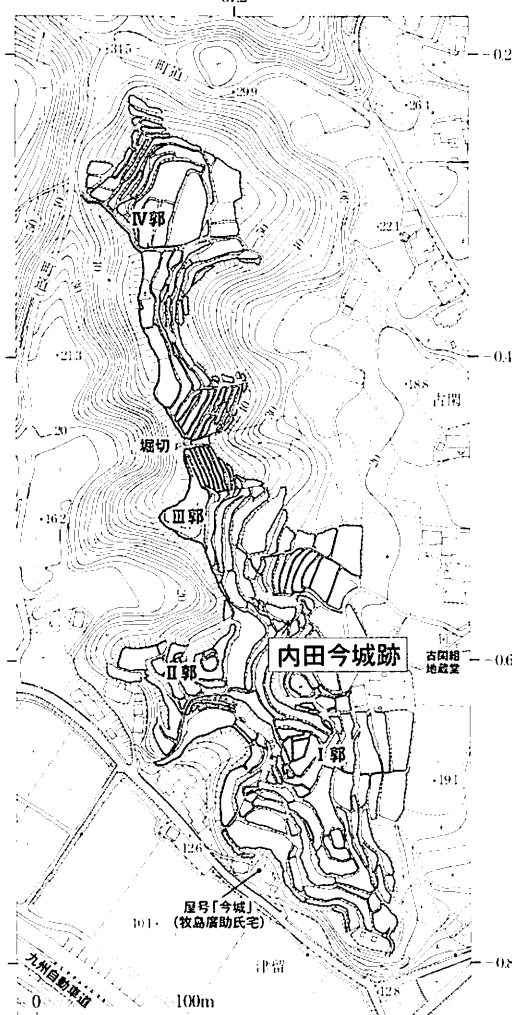
①所在地：大字内田・字今城

②麓との高低差 27m

③文献未記載

④城跡の様子

- ・「今城」の字名。
- ・丘陵の南端部（Ⅰ郭）を「今城」と称する。同名の屋号を残す民家がある。
- ・带状丘陵地にⅠ郭～Ⅳ郭。Ⅲ郭の北端に堀切。Ⅳ郭の北下に堀切を転用したと思われる町道がある。
- ・麓の墓地に「内田源兵衛君以 寛文五年（1665）十二月二十二日没 源兵衛君内田古城主胤也（以下略）」と刻む墓石。慶応元年（1865）の建立。
- ・近距離に内田宮山城跡と和仁石山城跡があり、内田地区に3城跡が存在する。



第6図 内田今城跡 縄張り図

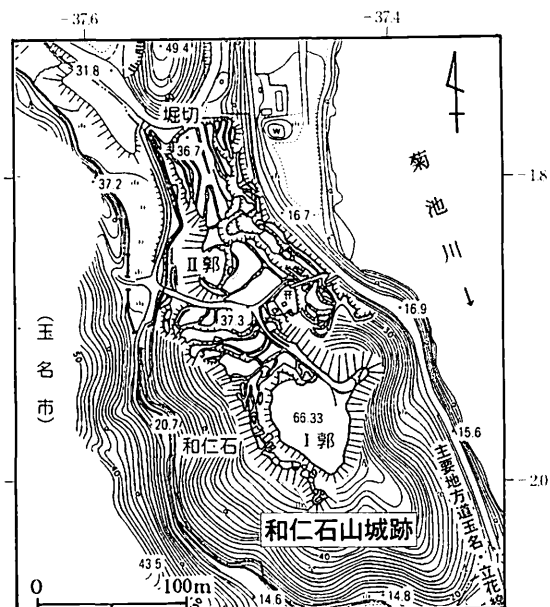
6. 和仁石山城跡

①所在地：大字内田・字和仁石

②麓との高低差 48.8m ③文献未記載

④城跡の様子

- ・地元に城跡の伝承。
- ・菊池川右岸の丘陵にあり、玉名市との行政境。
丘頂は緩傾斜地。丘頂の北々西下に小段群。尾根筋に堀切。
- ・北裾部に和仁石神社。田中城の和仁御前（和仁親範の妻）を祀る。※親範は、城主・親實の弟。
- ・麓集落は内田本村で、城跡から1km離れている。



第7図 和仁石山城跡 縄張り図

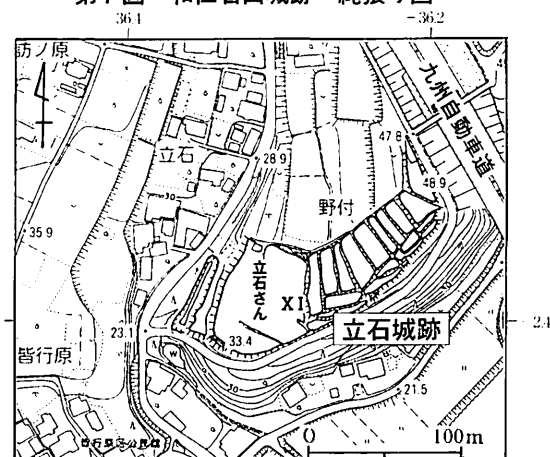
7. 立石城跡

①所在地：大字原口・字野付

②麓との高低差 20m ③文献未記載

④城跡の様子

- ・XI区に「立石城主の家来の墓」「立石さん」と称される石碑。
- ・7.2km離れた下津原東区の墓地に「石原家祖先は立石城主」と刻む石碑。
- ・丘頂域が、九州縦貫自動車道工事で削り取られた。残地の南西緩斜面に带状削平地が連なる。
- ・麓集落は立石地区。



第8図 立石城跡 縄張り図

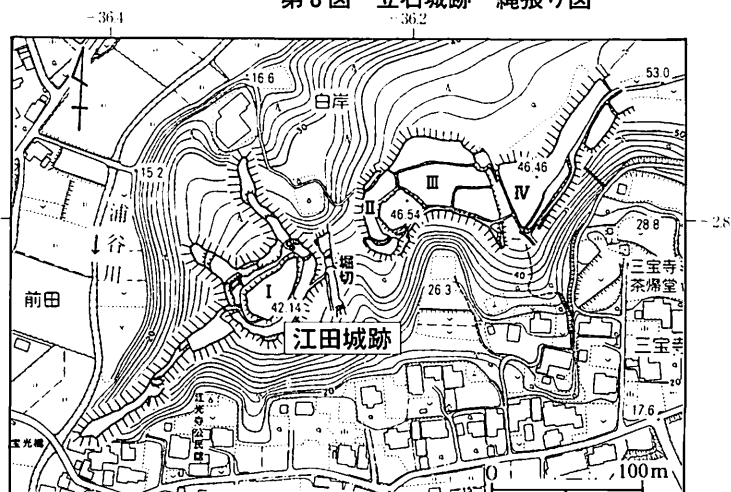
8. 江田城跡

①所在地：大字江田・字江光寺

②麓との高低差 26.7m ③文献未記載

④城跡の様子

- ・地元に城跡の伝承。
- ・城主は江田氏と伝わる。『蒙古襲来絵詞』に描かれた「糸たの又太郎ひてい糸」の人物とされる。
- ・带状丘陵地に連郭式の縄張り（I～IV郭）。
I郭は小山で、残りの郭は平地。
I郭とII郭の間に、鞍部の小谷を利用した堀切。III郭とIV郭の間に堀切。
- ・隣接の乙城跡との関連が伺われる。



第9図 江田城跡 縄張り図

【既刊報告書】

菊水町文化財調査報告書 第14集『焼米城跡・萩原城跡・用木城跡』1999年 第15集『牧野城跡・小乙城跡』2001年 第16集『乙城跡・江田城跡』2003年	和水町文化財調査報告書 第1集『立石城跡・内田宮山城跡』2006年 第3集『和仁石山城跡』2007年 第5集『内田今城跡』2009年 第8集『日平城跡』2013年 第10集『志口永城跡』2017年
三加和町文化財調査報告書 第1・2・14～17・19集『田中城跡I～XⅦ』	

※『菊水町史－通史編－』より転載：第4・7・8・9・10・11・12・13・14図
 和水町文化財調査報告書より転載：第3・5・6・15図

9. 鶯原城跡

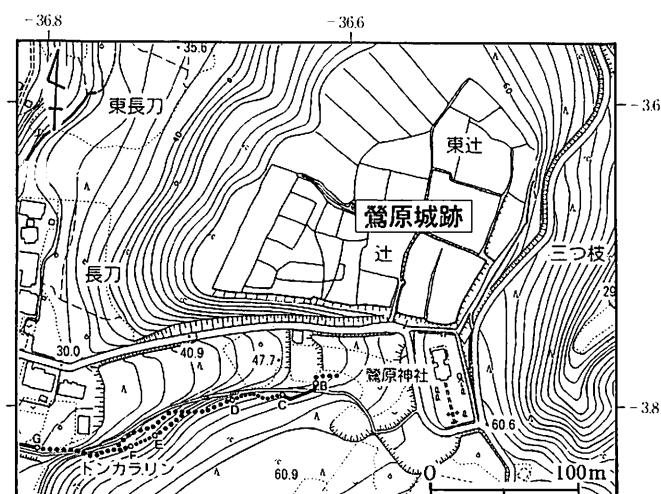
①所在地：大字瀬川・字鶯原

②麓との高低差 38.6m

③文献：『古城考』

④城跡の様子

- ・『古城考』に「請村にあり、城主年代未考」。
- ・鶯原神社一帯を城跡と推定。丘陵地の末端地で、平地の面積は広い。南の鞍部が極端に括れる。
- ・丘頂ラインを断ち切る凹道もある。
- ・竹林地に、空堀が残る。



第10図 鶯原城跡 縄張り図

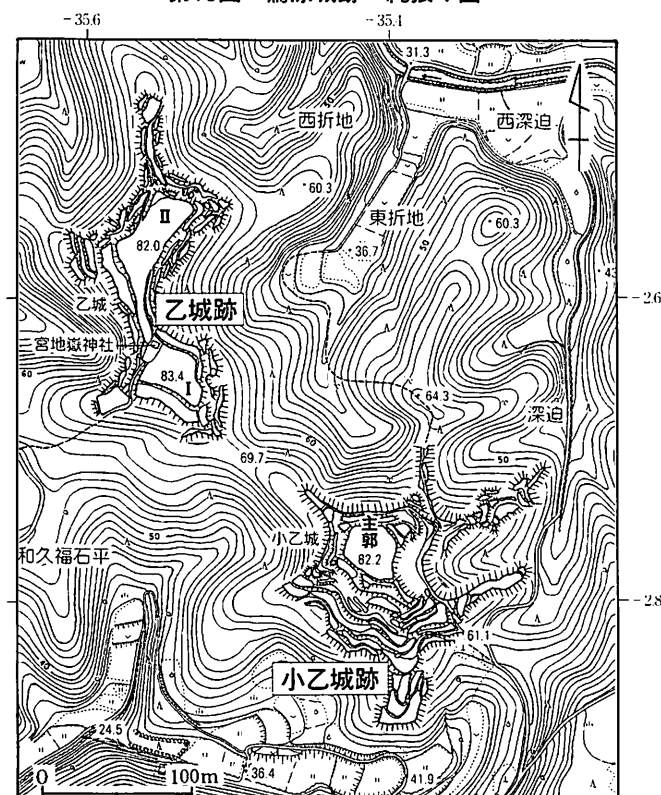
10. 乙城跡

①所在地：大字江田・字乙城

②麓との高低差 63.6m ③文献未記載

④城跡の様子

- ・「乙城」の字名。小乙城跡と隣り合わせの山城。
- ・带状地形の丘陵地で、括れ部（堀切り無し）で、地形が二分される（Ⅰ・Ⅱ郭）。
- Ⅰ郭に宮地嶽神社。Ⅱ郭は、広い平地。
- ・崖面の削り出しと、小段が目立つ。
- ・堀切・空堀・土塁が無い。小乙城跡に似た縄張り。
- ・麓集落は、三宝寺地区。



第11図 乙城跡・小乙城跡 縄張り図

11. 小乙城跡

①所在地：大字江田・字小乙城

②麓との高低差 64.8m ③文献未記載

④城跡の様子

- ・「小乙城」の字名。
- ・単郭形式の縄張り、歪な台形の平地を有する。
- ・斜面に小段群とヒトデの様な小張り出しが6箇所にある。
- ・麓集落は、寺山集落。

12. 牧野城跡

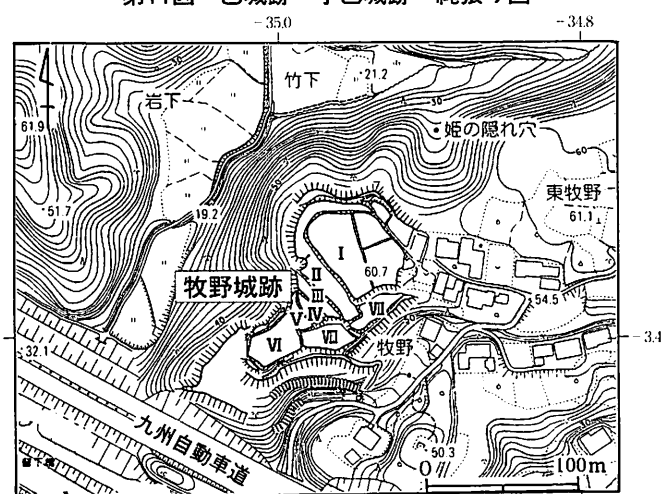
①所在地：大字江田・字牧野

②麓との高低差 6.2m

③文献：『古城考』『肥後国誌』

④城跡の様子

- ・丘頂ラインに展開する城跡地と、民家の敷地が近距離で一体化している。
- ・総構えの城そのものである。
- ・文献に落城伝承が記載されている。文中の「姫の隠れ穴」と呼ばれる岩穴がある。



第12図 牧野城跡 縄張り図

13. 用木城跡

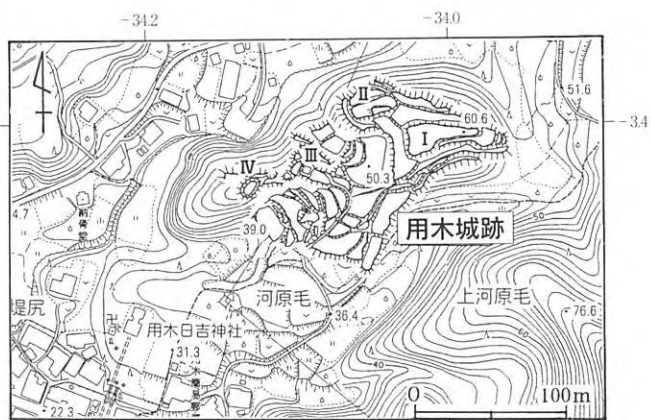
①所在地：大字用木・字上河原毛

②麓との高低差 37m

③文献：『国郡一統志』

④城跡の様子

- ・低丘陵が卓越する所で、馬蹄形状の入り込み地形に城跡がある。
- ・Ⅰ郭～Ⅳ郭。高台のⅠ郭に削り出し、北西下に堀切1。南下に犬走り。麓集落は、用木地区。



第13図 用木城跡 縄張り図

14. 萩原城跡

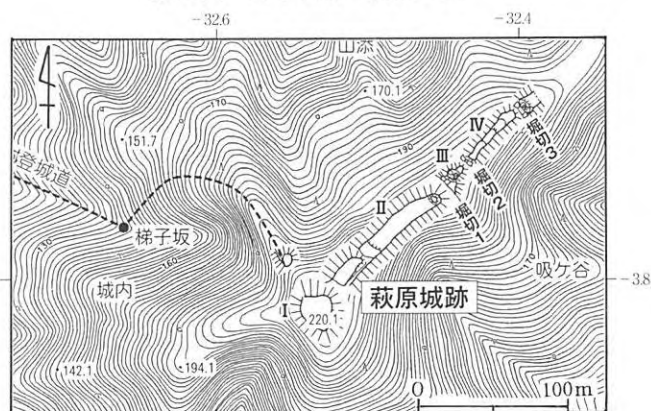
①所在地：大字萩原・字城内

②麓との高低差 178.6m

③文献：『古城考』『肥後国誌』『肥後地誌略』

④城跡の様子

- ・『古城考』に縄張りの記載がある。
- ・大規模山城。山頂（Ⅰ郭）から北東主軸尾根筋は、3本の堀切で3区画（Ⅱ～Ⅳ郭）に区分される。
- ・Ⅰ郭に平場、北東縁は地形の変化点で、崖面下にⅡ郭。
- ・Ⅱ郭の端部に堀切1。岩盤断ち切りの大工事。縁に土塁を積む。
- ・Ⅲ郭は、堀切1と堀切2に挟まれている。二重堀の箇所でもある。
- ・Ⅳ郭には、自然地形が残る。
- ・堀切3の対岸尾根（全くの自然地形）土塁が積まれている。
- ・麓集落は萩原地区。「お花畑」箇所は、城主の居館跡と推定。



第14図 萩原城跡 縄張り図

15. 日平城跡

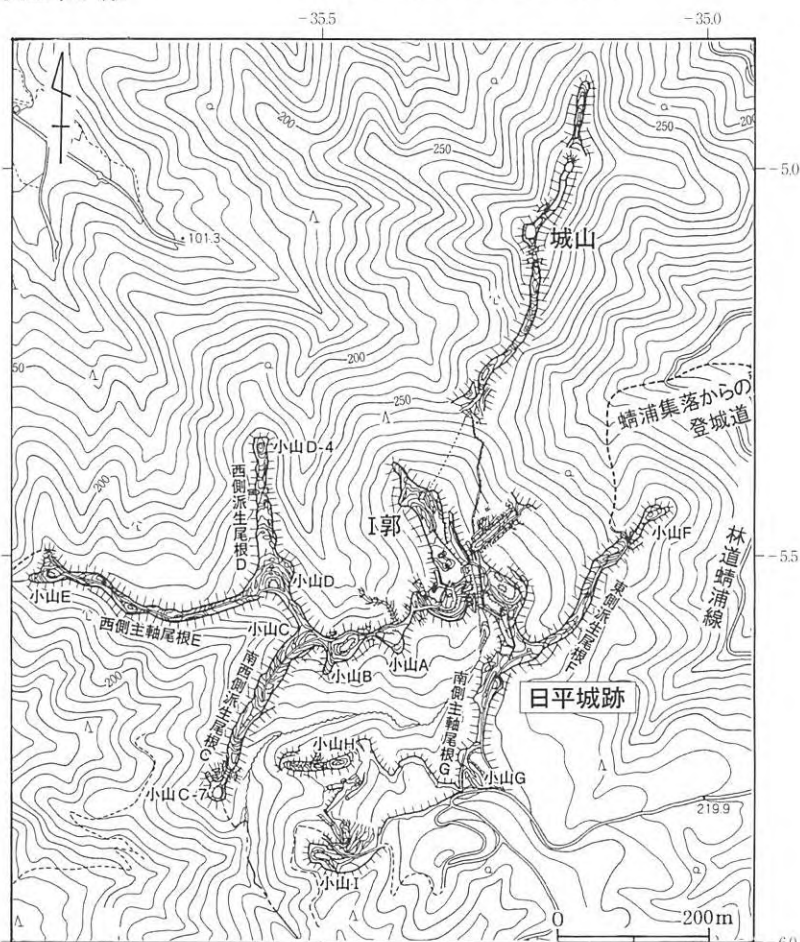
①所在地：大字日平・字花群

②麓との高低差 284.7m

③文献：『上井覚兼日記』

④城跡の様子

- ・大規模山城で、北東下に蜻浦集落、北西下に日平集落がある。
- ・Ⅰ郭は、花牟礼山の山頂。狭い尾根が南東に下り、堀切1を跨ぎⅡ郭に至る。
- ・Ⅱ郭は、小山を造成した高台、毘沙門天を納めた大型石祠がある。
- ・Ⅲ郭は、城内で最大の平場。



第15図 日平城跡 縄張り図

※日平城跡の縮尺は1万分の1

- ・Ⅳ郭は、堀切2の西にある。段下のⅢ郭－1は井戸曲輪。南下に空堀2。
- ・空堀4は、Ⅱ郭とⅢ郭の東斜面にある。
- ・堀切6は、Ⅰ～Ⅲ郭とⅤ郭～南側主軸尾根の間を断ち切る。北端は、竪堀2に変化して東斜面を下る。
- ・Ⅴ郭は、堀切6を挟み、Ⅲ郭とⅡ郭に対峙する。
- ・張り出し尾根の小山・「城山」には、谷からの上がり尾根に2本の堀切。物見の場と考えられる。
- ・『上井覚兼日記』の天正十二年（1584）十二月九日、十二～十四日、十六日、十八日に、島津勢による日平城攻めの記述がある。

16. 田中城跡

①所在地：大字和仁・字古城

②麓との高低差 60m ③文献：『小代文書』

④城跡の様子

- ・国指定史跡（2002年3月）
- ・天正十五年（1587）の「肥後の国衆一揆」では、城主の和仁氏が田中城に立て籠もった。
- ・城跡は、字名「古城」の独立丘陵地。高低差60m、東西350m・南北250m。
- ・丘頂域の外郭線は楕円形状で、東西100m・南北120m。標高104m。
- ・最高所は、同じく楕円形状の区画。52×40m・高さ1.0～1.5m。法面に削り出し。裾部は、急傾斜地の西を除き、三方に同心円状の曲輪が巡る。幅は10～50m。高さもバラつき、上面も数十cmの段差で、5区画に区分される。後世の耕作によるものであろう。
- ・曲輪の崖面に削り出し。高さ4～5m。直下に、※「田中城跡Ⅺ～Ⅻ」の掲載図を一部抜粋し、再トレースした。幅15mの同心円状の曲輪。
- ・曲輪は、北東・南・西の3箇所、堀切の形態を有する。丘陵の張り出し箇所を断ち切る。空堀の埋没が考えられ、後年の発掘調査で、存在が確認された。
- ・丘陵の鞍部は、物見櫓的な高台となる。城跡の周辺は、北を除き、水田地帯。



第16図 田中城跡 縄張り図

17. 簾置城跡

①所在地：大字西吉地・字簾置 ③文献：『古城考』

④城跡の様子 文献に「上ノ平」に所在すると記述されているが、城跡地を確認出来ない。「上ノ平」付近で、田中城の武士が戦死したとの伝承がある。

18. 今古閑城跡

①所在地：大字西吉地・字竹本 ③文献：『古城考』

④城跡の様子 未調査。

19. 浦部陣跡

①所在地：大字上板楠・字浦部 ②田中城との高低差 178m ③文献未記載

④城跡の様子 東山開拓団の山林。山頂に大土塁と堀切が残る。田中城の北東上にあたり、城攻めの時の陣跡（佐々成政）とも伝わる。

20. 岡原城跡^{おかはる}

- ①所在地：大字上板楠・字岡ノ原 ③文献：板楠景虎在城（天文年間）
④城跡の様子 「岡ノ原」の字名が残る丘陵地。丘頂域は広い平坦地。麓の集落に「陣内」「門出」の地名。

21. 神尾城跡^{かみお}

- ①所在地：大字大田黒・字東川
②麓との高低差 43m
③文献：『古城考』『肥後国誌』
④城跡の様子

・独立の山に築かれており、十町川と和仁川の合流点内に位置する。両川は、水濠の役目を果たす。

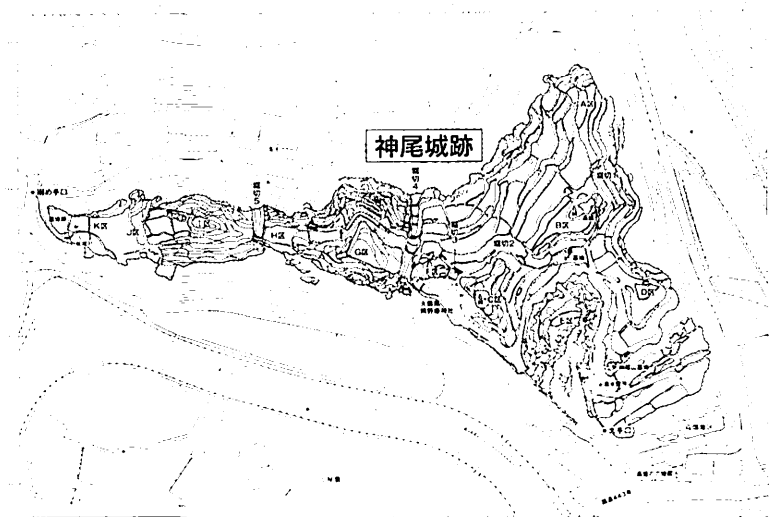
・鋭角三角形の山城で、尾根筋に5本の堀切。堀切4は尾根筋を大規模に切断する。堀切5は豎堀に変化する。

・縄張りは、A～K区で構成。

・中心区画は、B区の「高城」。

・J区は、大規模工事によって、尾根筋の斜面を急峻に削り出している。

・城内に、複数の大規模な崖線がある。麓集落は、南下の小屋敷地区。



第17図 神尾城跡 縄張り図

22. 年ノ神城跡^{とし かみ}

- ①所在地：大字平野・字年ノ神 ③文献未記載
④城跡の様子 地元で城跡地の伝承。年ノ神集落に「城ノ原」と称される円形状の低丘陵地。

23. 石坂城跡^{いしがき}

- ①所在地：大字大田黒・字石坂 ②麓との標高差 46.5m ③文献：『玉名郡村誌』
④城跡の様子 石坂集落の西側丘陵地に位置する。城跡は、上ノ原台地の南端部に当たる。城跡は、南北に主軸を持つ鐮矢形の平地。帯状形で、北端が二股に分かれる。北寄りに堀切。

24. 前城跡^{せん}

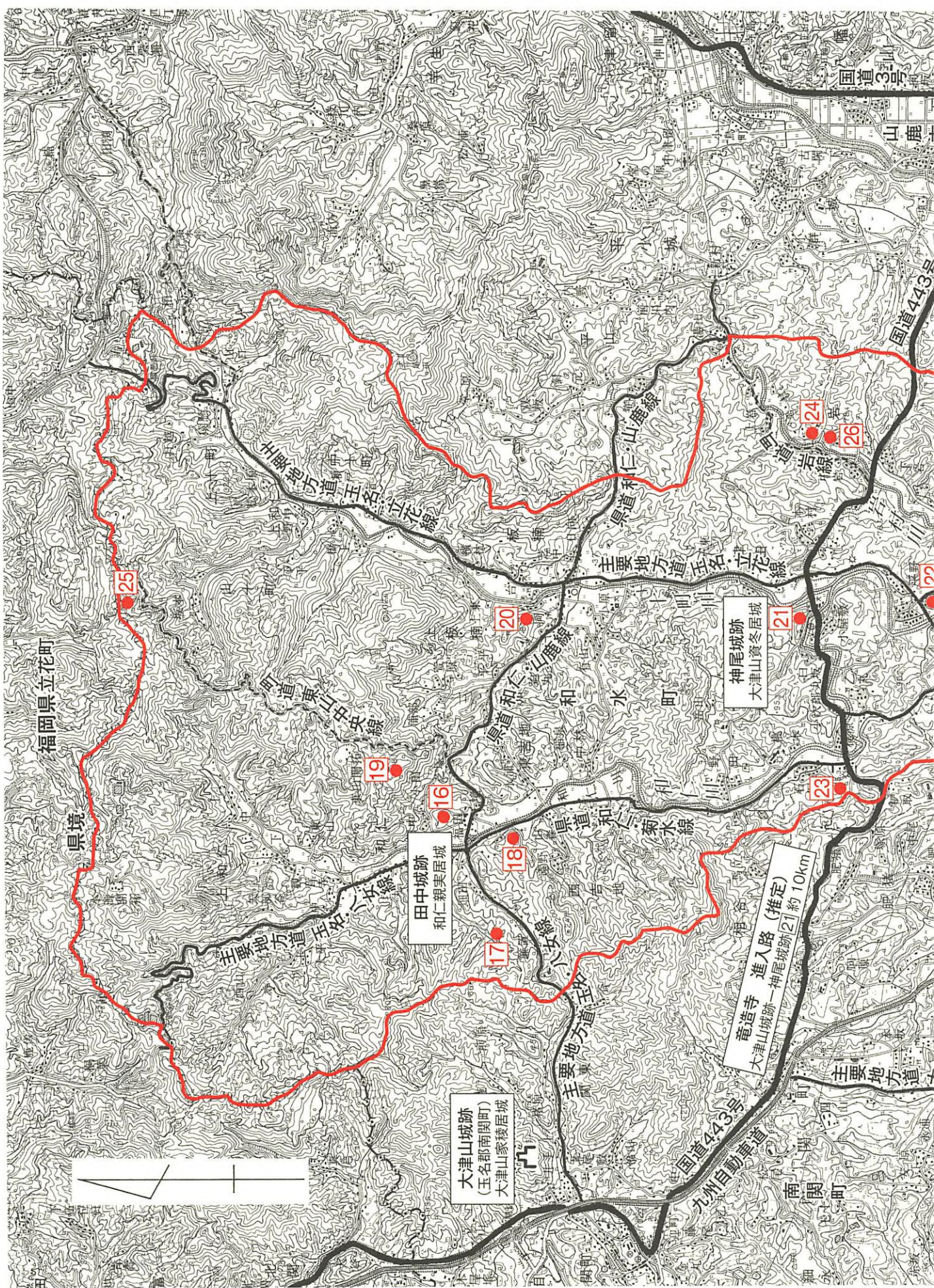
- ①所在地：大字岩・字立山 ②麓との標高差 70m ③文献未記載
④城跡の様子 迫ノ前地区の南側の山に「前城」の呼称。帯状の尾根筋は、東から西へ下る。

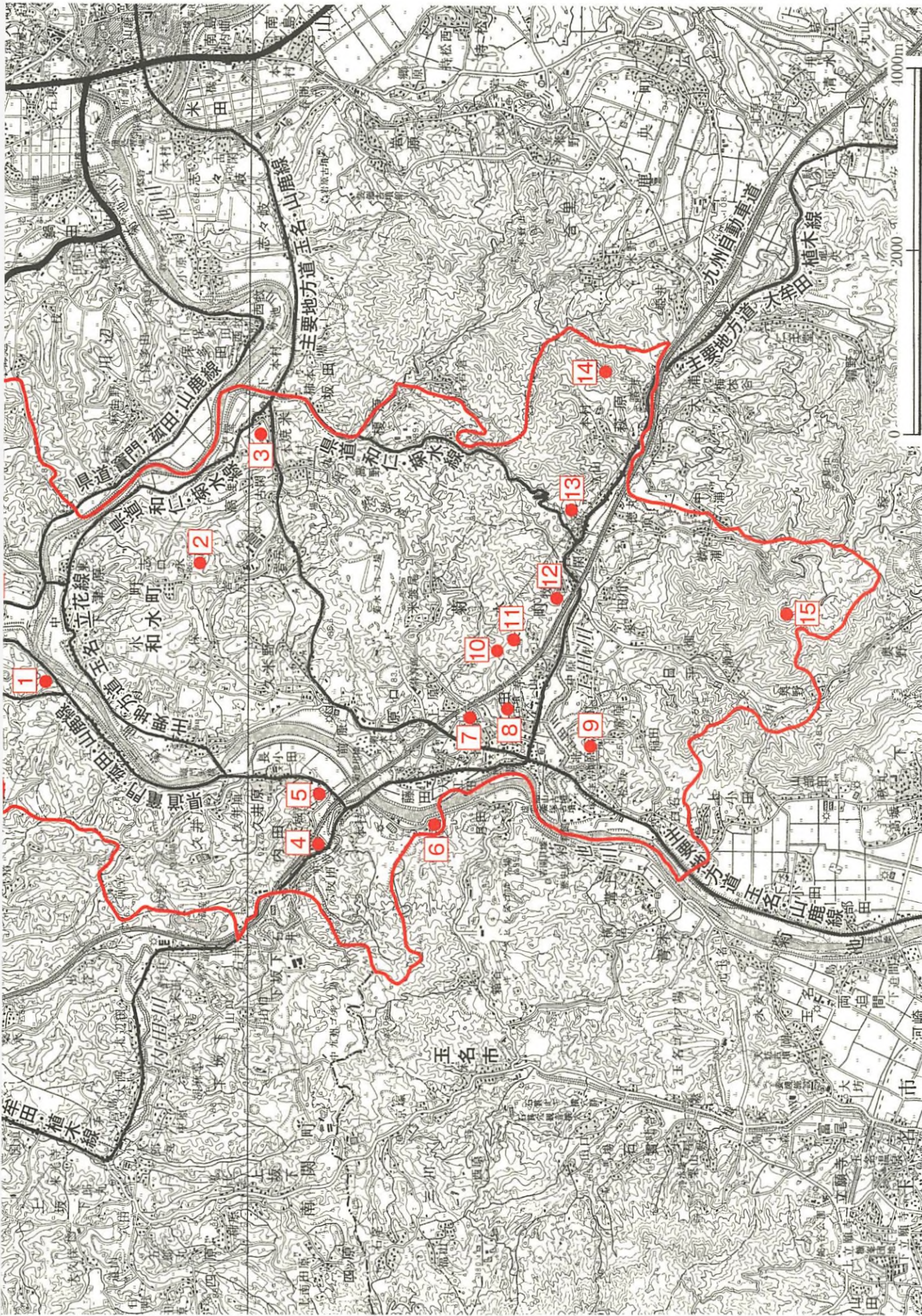
25. 坂本城跡^{さかもと}

- ①所在地：大字山十町・字坂本 ②麓との標高差 190m ③文献：『古城考』辺春親貞居城
④城跡の様子 城跡は福岡県との県境山中にあり、地元で「城山」と呼ぶ。標高280m。大部分がミカン畑になっている。城跡は帯状形の尾根筋で、山頂には、小規模な楕円形区画があり、野面積み石垣が巡る。西下に土塁が積まれた空堀がある。一見すれば、古墳のようである。

26. 岩村城跡^{いわむら}

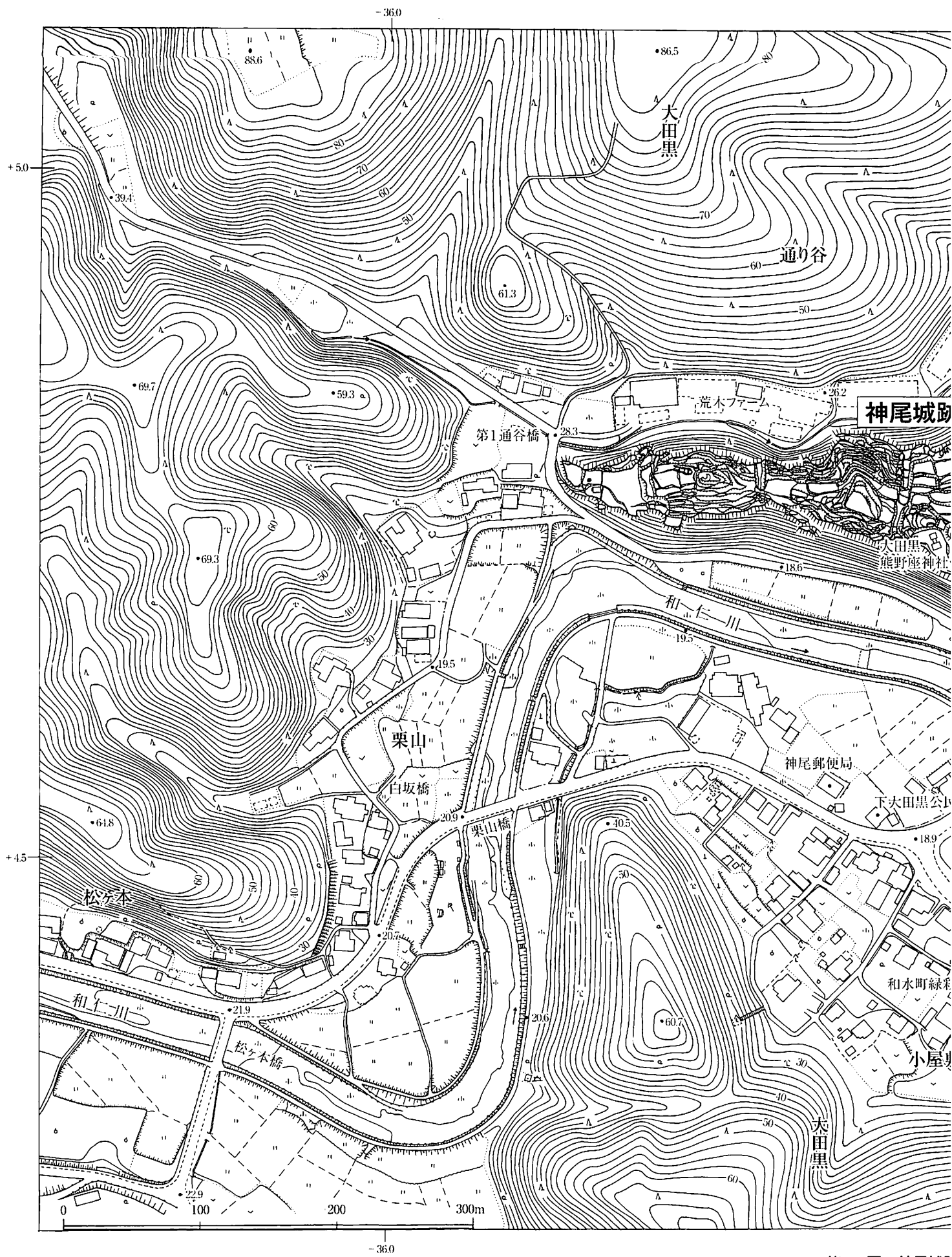
- ①所在地：大字岩・字上岩 ③文献未記載
④城跡の様子 前城とセットをなす城であろう。



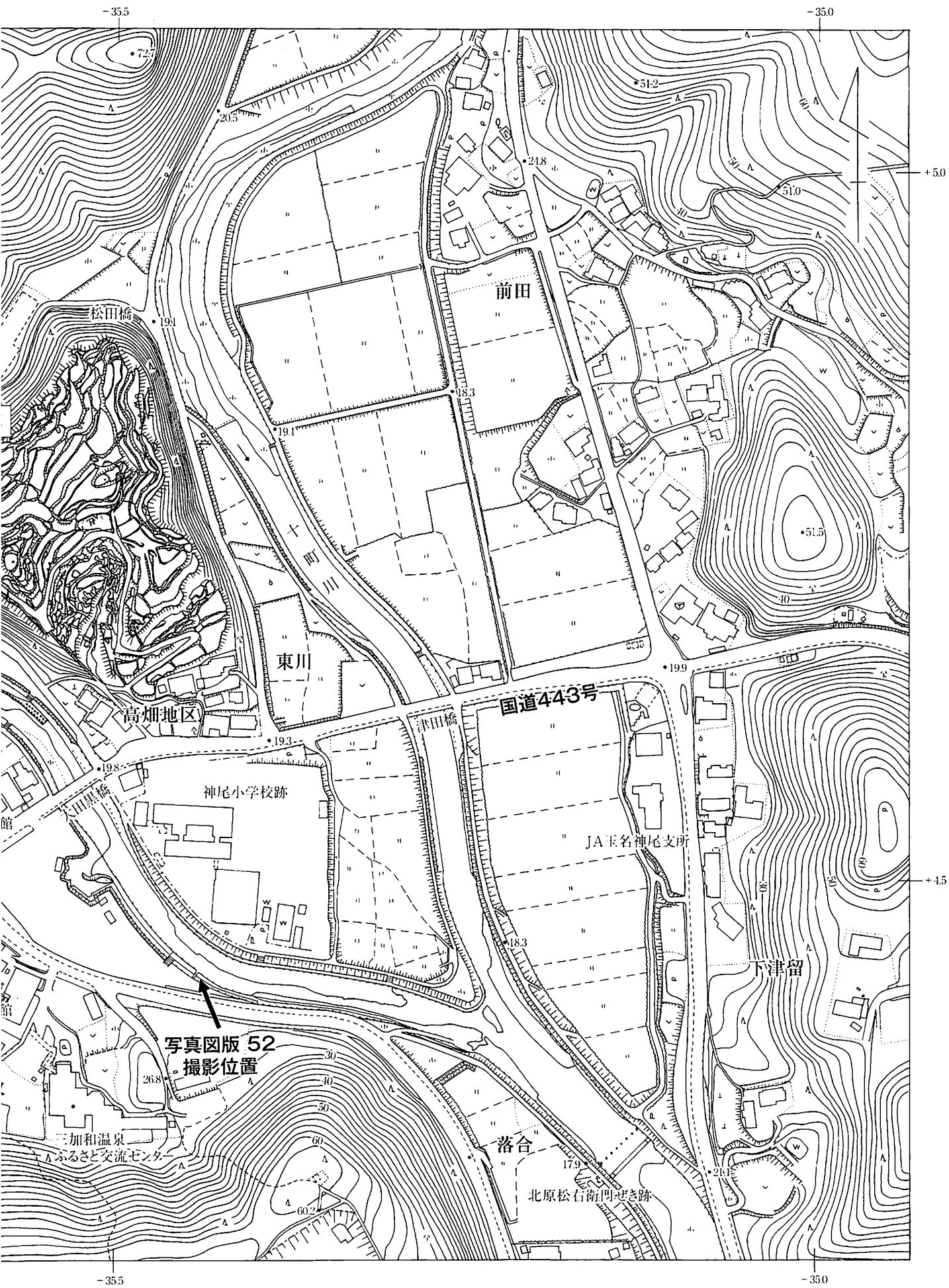


※国土地理院 1:50000 地形図「玉名」・「山鹿」の一部を使用し、90%縮小した。
 ※1～26は、4～10頁の城跡番号と一致する。
 ※赤線は、和水町界を表す。

第18図 和水町所在の中世城跡



第19図 神尾城跡



周辺地形図

第6節 神尾城跡について

〔城名について〕

城が機能していた中世末期では、「神野尾ノ城^{かみのおのじょう}」と呼ばれていたと推測される。これが江戸時代の文献では、「神尾城」「神尾ノ城」の表現になっている（参照：付論「神尾城」阿蘇品保夫氏 →76頁）。

〔城跡の概要〕

熊本県玉名郡和水町大字大田黒字東川に所在する山城である。低山群の中にあり、独立した山に築かれている。裾部には、東に十町川（支流^{じゅうちょう}）、南下に、和仁川（本流^{わに}）が流れており、城跡の南東約300m先で合流する。縄張りの的には、両川が水濠の役割を果たす事になる。

城跡の山は、「城平（小名^{じょうのひら}）」と呼ばれる。地形図を見ると、鋭角三角形をしている。主軸尾根の走行は、次の通りである。A区（北南）、B区（南西）、C区（北西）、F区～H区（西）、I～K区（西）。一方、主軸尾根Bの変化点からは、段落ちの派生尾根（D区）が南東へ延びている。さらに、D区とC区の間には、大手口にあたるE区の小谷が南に開口している。搦め手口^{からてくち}は、K区の西端である。規模は、東西で全長418m。南北幅は、東端で最大230m、西端で極端に15mまで窄まる。

B区の頂（標高62.86m）は、「高城^{たかじょう}」の小名が付いており、地元で城跡の中心区画と見なされている。この地と南下の国道との高低差は43m。

高畑地区^{たかはたが}は、城跡の南東隅に開けた小集落である。東西の長さは、北縁が130m、南縁が120m。南北幅55m、家屋列の上位は、城跡の斜面にかかり、国道の北縁を下位とする。城跡の麓集落に見えるが、「川の向こうから（十町川の事であろう）、この地に移ってきた」との言い伝えが地元にある（古川巧氏の言）。道路沿いの地蔵群に、文政三年（1820）に建立された高畑六地蔵と称される石塔（「奉寄進六地蔵」の銘）がある。真の麓集落は、後述する様に、南麓に広がる「小屋敷^{こやしき}」地区と推定される。

〔城跡の四方について〕

①北下 城跡の主軸尾根に沿って、東西方向に長さ450m、幅25～50mの谷が入っている。「通り谷」と呼ばれ、対岸は、標高86.5mの山である。谷との高低差は、60m。今日、谷部は、牛舎に利用されている。谷は、東端よりで、最大幅80mに開いて、十町川の沿岸に接する。一方、西端も、幅40mまで開く。防禦的には、谷の両端に、何らかの仕切り柵が必要となる。

②西下 長さ75m先に、別の山の末端部が仕切りになっている。後述するが、城跡の尾根筋は、西端が極端に低く、防禦の上で、最大の弱点である。しかし、地形図を見ると、城跡地の西域は、和仁川の蛇行箇所（凸部分）と低山域に挟まれており、広域的に見ると、その弱点は、解決されそうである。

③南東下 高畑地区の南に、国道を挟んで三角形の区域がある。先述の両川に挟まれており、長さは、北縁220m、南北幅150m。近年に廃校になった神尾小学校の校舎が、そのまま残っており、東隣は水田である。地形的にも独立しており、城跡に関連した区域と推定される。

④南直下 今日、道路が通り、長さ310m、最大幅30mの残地の下には、和仁川が流れている。城時代も、川沿いに踏み分け道程度のものが通っていた可能性が高い。

⑤東下 道路が通り、鋭角三角形の区画（長さ230m・南縁幅90m）を挟んで、十町川が流れる。ここは、水田になっている。

〔麓集落について〕

和仁川と南の低山群（標高73.6～58.8m）に囲まれた区域に、字名「小屋敷」地区があり、神尾城跡の麓集落と思われる。長軸590m、短軸の最大幅250m、長軸の向きは、北から南東にある。集落は、和仁川を挟んで、神尾城跡の南に位置している。

第Ⅱ章 調査の成果

第1節 細部の縄張り

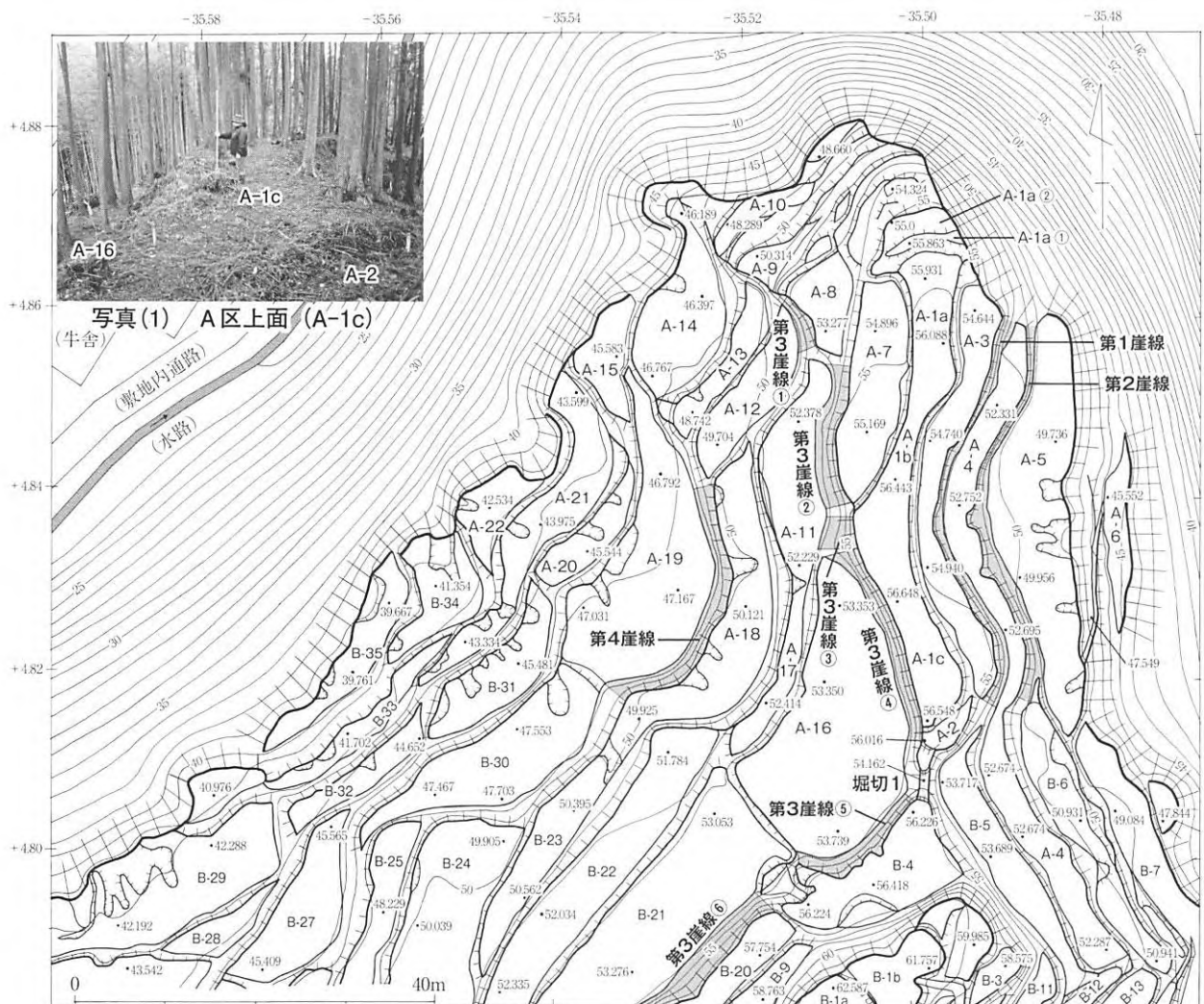
神尾城跡は、独立した山に築かれており、山腹を凝灰岩の崖線に囲われている。大手口はE区の谷部、搦め手口はK区・西端と推定される。城跡と麓集落の高低差は、B区の「高城」で43m、K区で最も低く8.38m。前述のように、山腹は崖線で囲まれており、低山であるが、この点で要害地に築かれた山城といえよう。城内には、大小5本の堀切があり、連郭式の縄張りになっている。縄張りの説明にあたり、A～K区に区分して、平地に番号をつけた。

1. A区

崖線が形成する複数の土塁線が、特色である。A-1は主軸尾根に手を入れたもので、上面を平地にして、東斜面を帯状の段状地形に仕上げている。西斜面も同じ段状地形であるが、尾根筋の先端で急傾斜地をなすために、形状にまとまりは無い。

〔上面域〕

「く」の字形をした痩せ馬尾根の北端である。全長57.5m、幅は7.4～2.0m。尾根の主軸は、南北方向にある。東西両斜面を、さらに削り出して、最上段を、より一層、土塁状地形に仕上げている。上面は平地で、北への緩傾斜地である。北端から長さ19.2mの所に、幅2.0mの括れがあり、そこから、長さ10mの箇所、幅6.0mに復活して端部に至る。この箇所をA-1a・A-1b・A-1cに細分した。



第21図 A区全体測量図①

A-1aは、北端が膨らんだ長方形の区画で、長さ21m、幅7.4～2.0m。北下に土塁の残部（A-1a①）と舌状の緩傾斜地（A-1a②）があり、ここから下位は、急傾斜地に一変する。真下の牛舎とは、高低差が36mもあり、見下ろすと足がすくむ。

区	長さ	幅	高低差	比較区
A-1a	21.0	7.4～2.0	0.56	A-1c
A-1a①	9.0	1.0	0.07	A-1a
A-1a②	8.5	3.0	0.86	A-1a①

第3表 A区遺構計測表①（単位：m）

A-1bは、長さ12.5m、幅6.0～2.0m。北端で上面が2m幅に狭まる。西下のA-7と東下のA-3が、尾根筋に食い込むためである。尾根筋の先端部近くで、堀切の埋没地点との見方も出来る。しかし、段差面に痕跡は見当たらない。

区	長さ	幅	高低差	比較区
A-1b	12.5	6.0～2.0	0.20	A-1c

第4表 A区遺構計測表②（単位：m）

A-1cは、長さ24m、幅6.5～4.0m、南縁下に三角形の小段（A-2）がある。裾部の堀切1に関連した区画と考えられる（後述）。A-1a・b・cは、上面の幅もあり、人の往来は十分に出来る。北東区域における「詰めの区画」と思われる。

〔堀切1〕

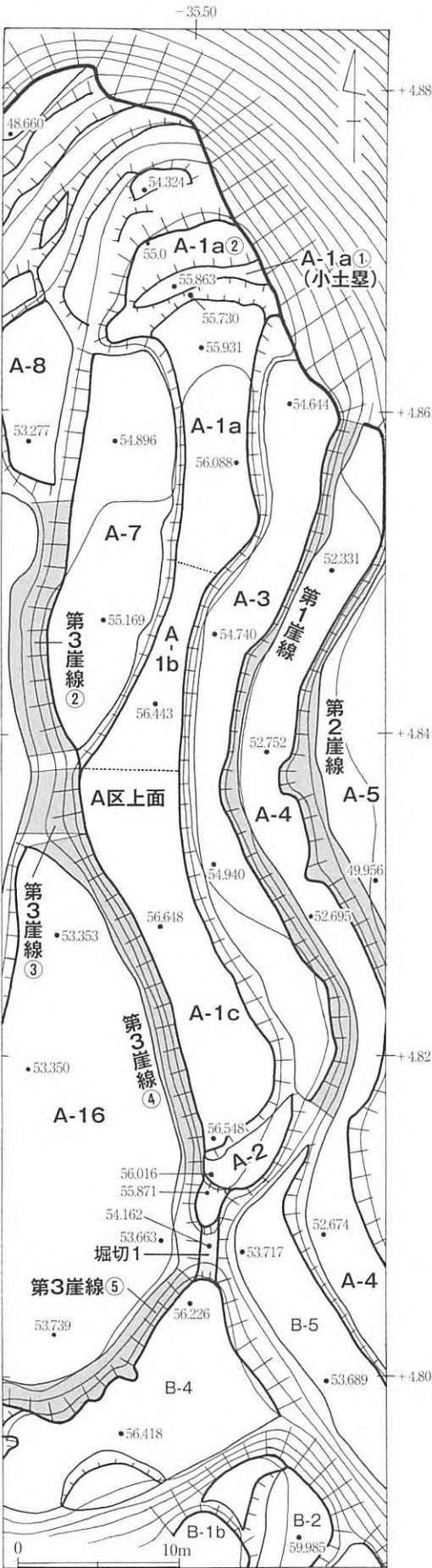
痩せ馬地形の尾根筋が、極端に括れて、南へ高さを減じる所である。堀切の場所としては、理にかなっている。しかし現況は、堀幅（下場）1.5m、A-2からの深さ1.85m、上場幅5.8mで、余りに小規模である。これでは、防禦施設として不十分である。結果として、A-1cの南端を肩部とする（A-2を取り込む）段堀ではないかとの考えに至った。そうすると、上場幅は8.0mまで拡大して、深さも2.39mとなる。後世に、人の手加わり、A区への上がり道になった事で、堀底も大方埋まり、堀切が変形したのであろう。

区	長さ	幅	高低差	上段
A-1c	24.0	6.5～4.0	—	—
A-2	3.0	7.5	0.53	A-1c
堀切1	1.0	1.5(下場)	1.85	A-2
		5.8(上場)		
		8.0(上場)	2.39	A-1c

第5表 A区遺構計測表③（単位：m）



写真(2) 堀切1 (A-16より)



第22図 A区上面域測量図

〔東斜面〕

A-1cの南端から眺めると、3段の段状地形（A-3～5）が、凝灰岩の絶壁へ下っている。段差面の高さは、A-4の肩部（A-3）が2.25m、A-5の肩部（A-4）が2.74m。縁の長さは、A-3が50.0m、A-4が44.5m。上下で、第1・2の崖線（崖線は削り出されたもの。以下同じ）を形成している。大規模造りのA-5は、地形の変化点にあつて、縁下から凝灰岩の絶壁になる。この区画の守りは、完璧である。2本の崖線は、D区とB区からの攻撃に備えたものであろう。A-6は、崩壊地の可能性が大きい。A-4の肩部は、2.25mの高さに止まるが、削り出しが極めて顕著である。

区	長さ	幅	高低差	上段
A-3	50.0	5.0～2.0	1.71	A-1c
A-4	44.5	3.5～1.5	2.25	A-3
A-5	47.0	9.0～2.0	2.74	A-4
A-6	23.0	2.0～1.0	4.18	A-5

第6表 A区遺構計測表④（単位：m）



写真(3) 東斜面段状地形の第1・2崖線

〔西斜面〕

東斜面と同様、数多くの段状地形が造成されている。東斜面が帯状地形であるのに対して、形状にまとまりが無い。やや緩傾斜地で、城の裏側にあたる。

〔北々西の尾根斜面〕

狭い範囲に4段の小段（A-7～10）が連なっている。この中で、A-12の肩部（A-8）にあたる高さ3.28m、長さ6m分は、第3崖線①になる。

区	長さ	幅	高低差	上段
A-7	24.5	6.0～1.0	1.27	A-1b
A-8	10.0	7.5～1.0	1.62	A-7
A-9	9.0	4.5～1.0	2.96	A-8
A-10	13.0	2.5～1.5	2.02	A-9

第7表 A区遺構計測表⑤（単位：m）

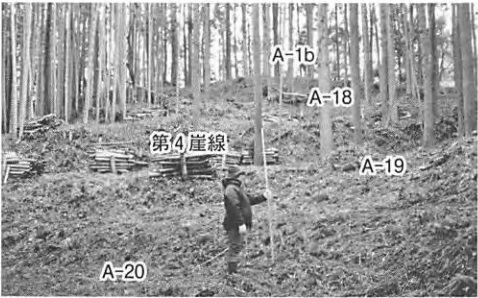
〔凹地形の東肩部〕

5段の段状地形（A-11～15）が連なっている。この中で、A-11の肩部（A-7）は、高さ2.79m、長さ16m分が、第3崖線②になる。さらに、肩部（A-1c）の残りの高さ4.1m、長さ5m分も、第3崖線③になる。そして、この崖線は、さらに規模を拡大して、南のA-16の肩部（A-1c）に延びている。この分は、高さ3.30m、長さ22mの第3崖線④になる。その結果、ここまで、高さ2.79～4.1m、全長43mの大規模な第3崖線（①～④）が連なる事になる。この崖線は、堀切1を挟んで、さらに南西へ延びていく。

ここまでの第3崖線（①～④）は、A-1の西直下を際立させており、少し距離をおいた西側からの眺めは、非常に迫力がある。西域からの攻撃に備えた、大規模な防禦施設である。

区	長さ	幅	高低差	上段
A-11	25.0	6.0～1.5	2.79	A-7
A-12	20.5	4.5～1.0	2.67	A-11
A-13	19.0	3.5～2.0	0.96	A-12
A-14	22.0	8.5～1.5	1.98	A-13
A-15	14.5	5.0～1.5	1.18	A-14

第8表 A区遺構計測表⑥（単位：m）



写真(4) 北西側段状地形と第4崖線

〔北西側の段状地形〕

堀切1から北西側へ下る凹地には、7段の段状地形（A-16～22）がある。A-16の残り肩部を再度、取り上げる。堀切1を挟んだ南側部分で、A-16の肩部（B-4）は、高さ2.68m、長さ17mが第3崖線⑤になっている。さらに、B-21肩部へ延びて、最終的に堀切2に到達する。この高さ4.41m、長さ43m分が、第3崖線⑥になる。結果として、第3崖線は、高さ4.41～2.68m、全長116mの大崖線をなす事が分かる。第3崖線⑥はB区内であるが、A区内で取り扱った。

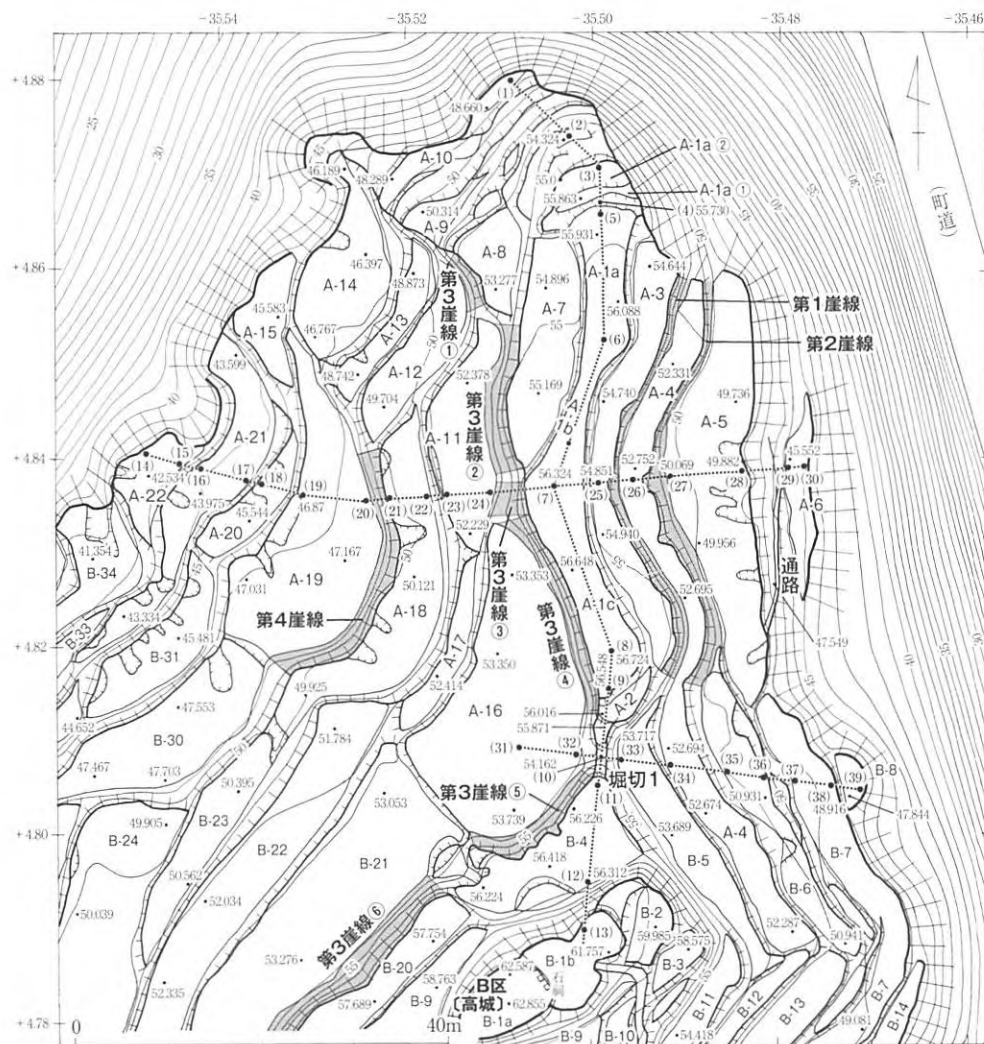
第3崖線の下位に、第4崖線がある。A-19の肩部（A-18）にあたる高さ2.84m、長さ29m分である。

区	長さ	幅	高低差	上段
A-16	33.5	29.0~3.0	3.30	A-1c
			2.68	B-4
A-17	20.5	3.0~1.0	0.94	A-16
A-18	42.5	7.0~2.5	2.29	A-17
A-19	36.0	12.5~1.5	2.95	A-18
A-20	16.5	4.0~1.0	1.49	A-19
A-21	26.5	5.0~1.5	1.57	A-20
A-22	12.0	5.5~1.0	1.44	A-21

第9表 A区遺構計測表⑦ (単位:m)

崖線	区	長さ	高低差	肩部
第1	A-4	44.5	2.25	A-3
第2	A-5	47.0	2.74	A-4
第3①	A-12	6.0	3.28	A-8
第3②	A-11	16.0	2.79	A-7
第3③	A-11	5.0	4.10	A-1c
第3④	A-16	22.0	3.3	A-1c
第3⑤	A-16	17.0	2.68	B-4
第3⑥	A-21	43	4.41	B-20
第4	A-19	29	2.84	A-18

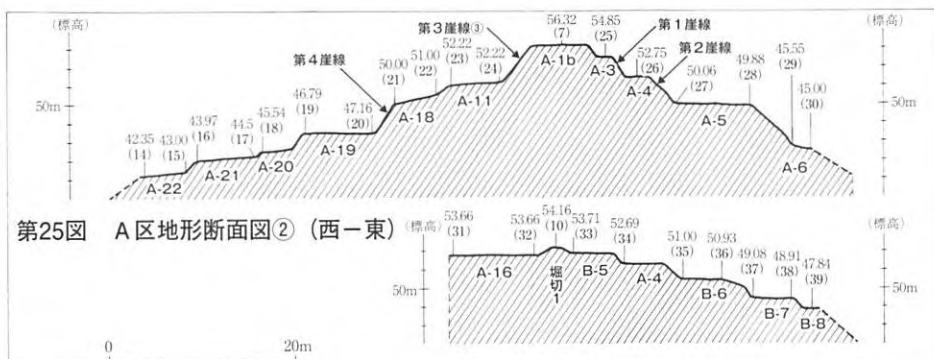
第10表 A区崖線計測表 (単位:m)



第23図 A区全体測量図②



第24図 A区地形断面図① (南-北)



第25図 A区地形断面図② (西-東)

第26図 A区地形断面図③ (堀切1-東)

2. B区
〔高城区画〕

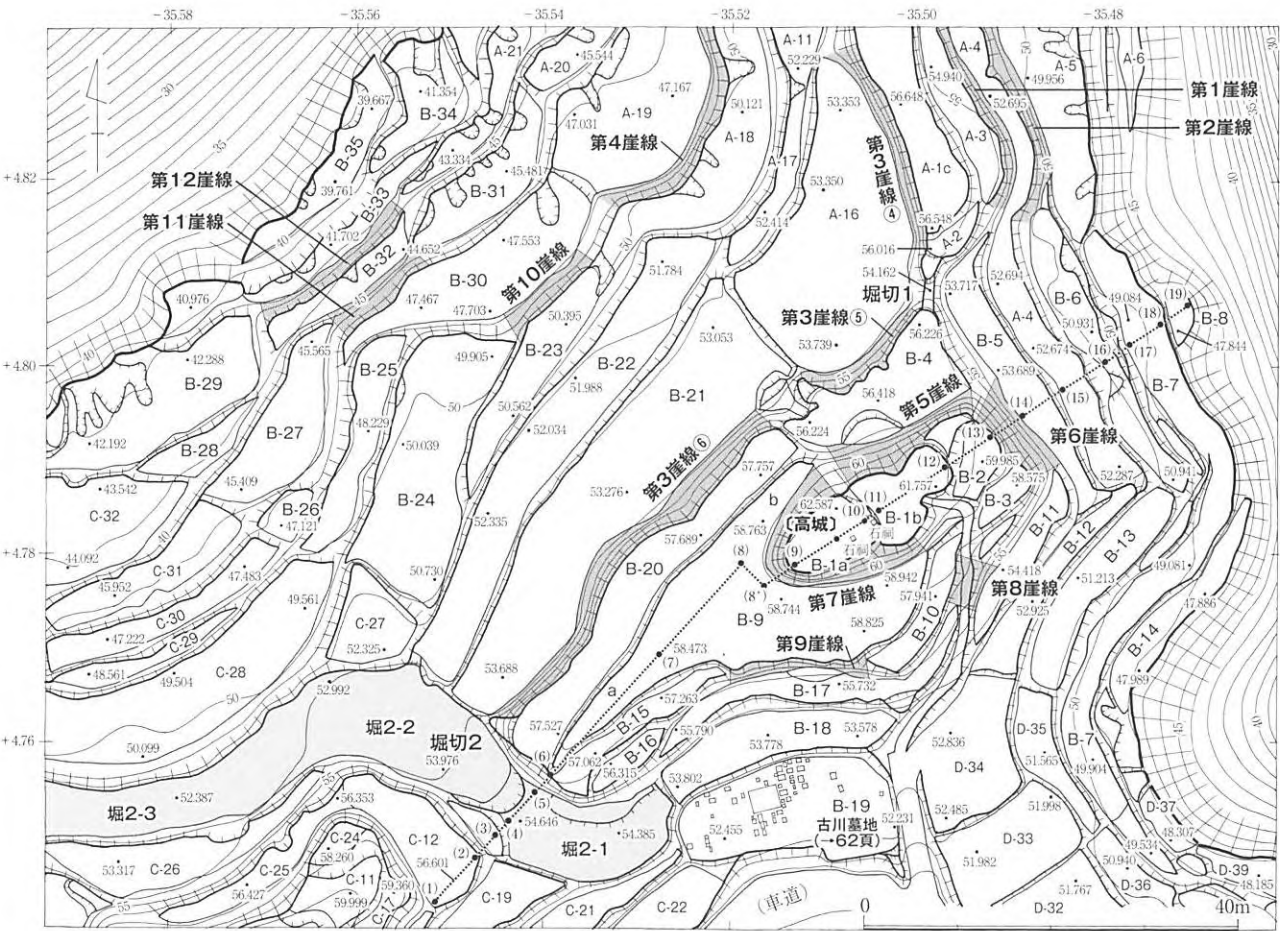
主軸尾根は、堀切1から南側が段上がりで、B-4を挟んで、山頂に至る。ここは、特に「高城」と呼ばれている。最上位は、3段から成る小規模な区画で、城跡の中心部と見なされる。聖域的な区域であろうか。

造成時には、尾根の狭い頂きを段状に削り出して、上面を平地に整形している。4区画で構成されており、最上段のB-1aは、標高62.86m。麓（国道443号沿い）とは43mの高低差があり、これが神尾城跡の基準の高さとなる。上段の2段には、御神体を奉納した石祠等が祀られていたのであろう。その名残りと思われる明治時代半ばに建立された3基の石祠がある。段の境目には、同時代の割り石の石塁がある。

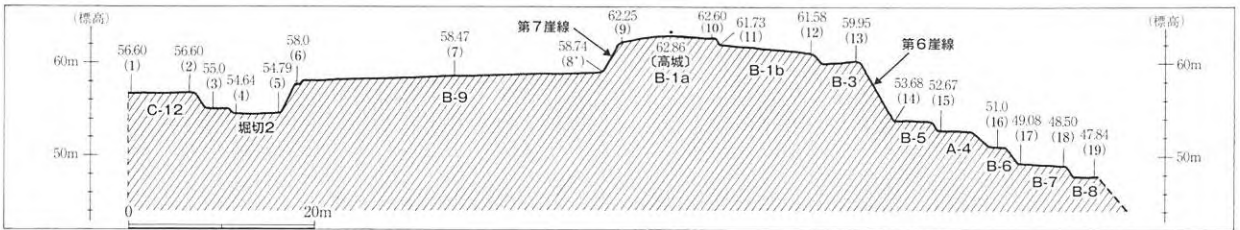
B-4は、B区の北東下にあり、真下のA区南西端に堀切1がある。B-1の北崖面は、急峻に削り出されている。A区南端から眺めると、高城区画がそそり立っている様子が良く分かる。第5崖線で、長さ16.5m分、山頂との高低差6.36m。

区	長さ	幅	高低差	上段
B-1a	10.5	7.0～3.0	—	—
B-1b	10.0	8.0～4.0	0.87	B-1a
B-2	8.5	4.0～3.0	1.77	B-1b
B-3	7.5	3.0～1.0	1.41	B-2
B-4	19.5	10～1.0	6.36	B-1a

第11表 B区遺構計測表① (単位：m)



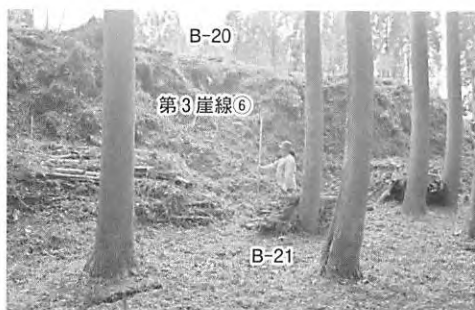
第27図 B区全体測量図



第28図 B区地形断面図（北東－南西）

崖線	区	長さ	高低差	上段
第3⑥	B-21	43	4.41	B-20
第5	B-4	16.5	6.36	B-1a
第6	B-5	11	6.3～4.89	B-2・3
第7	B-9	30.5	3.84	B-1a
第8	B-11	5.3	3.52	B-10
第9	B-17	15	3.09	B-9
第10	B-30	10.5	2.69	B-23
第11	B-32	12	3.41	B-30
第12	B-33	19	2.95	B-32

第12表 B区崖線計測表 (単位：m)



写真(5) B-21と第3崖線⑥

〔北東斜面〕

山頂（高城）の北東下に4段の帯状削平地、最下位に半月状の小削平地（B-8）がある。この中で、B-5の肩部（B-2・3）は、長さ11m分が地形の変化点で、高さ6.3～4.89mの第6崖線となる。一方で、斜面部のB-7は、長さ80mもあり、南端がD区に入り込んでいる。

区	長さ	幅	高低差	上段
B-5	29.5	4.5～2.0	6.3～4.89	B-2・3
(A-4)	31	4.5～1.0	1.00	B-5
B-6	34.0	5.5～2.0	1.74	A-4
B-7	80.0	5.0～1.0	1.85	B-6
B-8	6.0	3.0	1.24	B-7

第13表 B区遺構計測表② (単位：m)



写真(6) 〔高城〕北東斜面と第6崖線

〔南西～南下〕

B-9は、山頂の南西段落ち箇所、高低差3.84m。山腹の崖面は削り出されて、山頂域の小山が突出した格好になっている。Y字形をした主軸尾根の平地で、やや南西側へカーブを描く。端部は、完全に窄まり、直下に堀切2がある。B-9の山頂肩部（B-1a・1b）は、長さ15.5m分が、高さ3.84mの第7崖線となる。

B-9の南東下に、5段の帯状削平地がある。B-11の肩部（B-10）は、長さ5.3m分が、高さ3.52mの第8崖線となる。

B-9の南下に、5段の段状地形がある。長方形のB-19を除き、帯状削平地である。B-17の肩部（B-9）は、長さ15m分が、高さ3.09mの第9崖線になる。B-19は、江戸時代半ば以降から墓地になっている。

区	長さ	幅	高低差	上段
B-9	31.5	19.5～0.5	3.84	B-1a・1b
B-10	17.0	3.0～2.5	1.00	B-9
B-11	11.0	3.0～1.0	3.52	B-10
B-12	26.5	4.0～1.0	1.49	B-11
B-13	24.5	4.5～3.5	1.71	B-12
B-14	26.5	3.5～1.0	1.20	B-7
B-15	20.5	4.0～1.5	1.21	B-9a
B-16	10.0	2.5～1.0	0.75	B-15
B-17	39.0	4.0～1.0	3.09～2.68	B-9
B-18	25.5	5.5～1.5	2.15	B-17
B-19	23.0	10.5～5.5	1.35	B-18

第14表 B区遺構計測表③ (単位：m)



写真(7) B-9と第7崖線（東側）

〔北西斜面〕

10段の段状地形がある。三角形のB-26・28を除き、他は帯状削平地。B-20～25は山腹に並列する。B-21の第3崖線⑥は、20頁でとりあげた。

B区の北西下・凹地に、帯状削平地がある。いずれも、壊れが目立つ。B-30の肩部（B-23）は、長さ13m分が、高さ2.69mの第10崖線になる。さらに、その下位のB-32の肩部（B-30）は、長さ12m分が、高さ3.41mの第11崖線。続いて、B-33の肩部（B-32）は、長さ19m分が、高さ2.95mの第12崖線になる。

区	長さ	幅	高低差	上段
B-20	43.5	5.0～3.0	1.00	B-9b
B-21	53.0	11.0～5.0	4.41	B-20
B-22	55.0	6.5～4.5	1.24	B-21
B-23	29.0	4.5～1.0	1.47	B-22
B-24	29.5	11.0～8.5	0.52	B-23
B-25	23.5	4.0～2.0	1.81	B-24
B-26	6.0	4.0～1.0	1.09	B-25
B-27	23.0	7.5～1.0	1.71	B-26
B-28	14.5	4.0～1.0	1.41	B-27
B-29	32.0	10.5～6.0	1.71	B-28
B-30	32.0	8.5～1.5	2.69	B-23
B-31	21.0	6.0～2.0	2.07	B-30
B-32	19.0	3.0～2.0	2.82	B-30
B-33	38.0	4.5～1.0	2.95	B-32
B-34	13.0	10.5～2.0	1.18	A-22
B-35	26.0	4.5～1.0	1.69	B-34

第15表 B区遺構計測表④ (単位：m)



写真(8) B-30と第10崖線

3. C区

〔主軸尾根筋〕

主軸尾根筋は、B区から堀切2を跨ぐと、緩やかな上りに転じる。主軸方位は、B区と同じである。山頂は標高62.4mで、B区の山頂との高低差は-0.46m。円形状の平場（C-1）で、縁部と斜面との境目に、整地痕がある。一定の面積があり、山頂には、建物が存在した可能性が高い。東縁の真ん中付近に、切り石積みめの石台がある。石祠は残っているが、内部の御神体は撤去されている。

C区の南側には、小派生尾根が下り、背面に粗い造成が感じられる。しかし、平地を形成する様な切り込みは無く、緩傾斜地のままである。隣り合わせのF区・尾根筋と同じである。

区	長さ	幅	高低差	上段
C-1	11.6	9.0	—	—
C-2	6.0	5.5	1.24	C-1
C-3	9.2	1.8～1.3	2.62	C-2
C-4	19.5	5.0～2.0	2.24	C-3
C-5	15.8	2.8～1.0	2.03	C-4
C-6	6.8	8.82	0.62	C-5

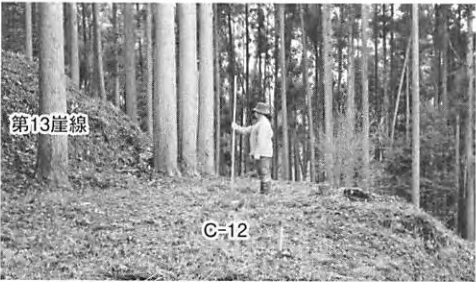
第16表 C区遺構計測表① (単位：m)

〔東～北東尾根筋〕

山頂の東直下には、極細の帯状削平地（C-7）があり、高低差1.16mの側面が削り落とされている。長さ11m、幅1.4～1.0mの犬走りで、上面は、やや傾斜地である。南端がC-2、北端がC-9に繋がる。

山頂の東下斜面（上位）には、極細の帯状削平地（C-8）がある。やや弧状で、元来は、南側のC-3と繋がっていた可能性がある。

山頂の北東側尾根筋は、4区画に分かれるが、大方、造成の度合が低く、緩傾斜地である。C-12は、堀切2の上段面にあたる。肩部（C-17・24）は、長さ14m分が、高さ2.4mの第13崖線になる。



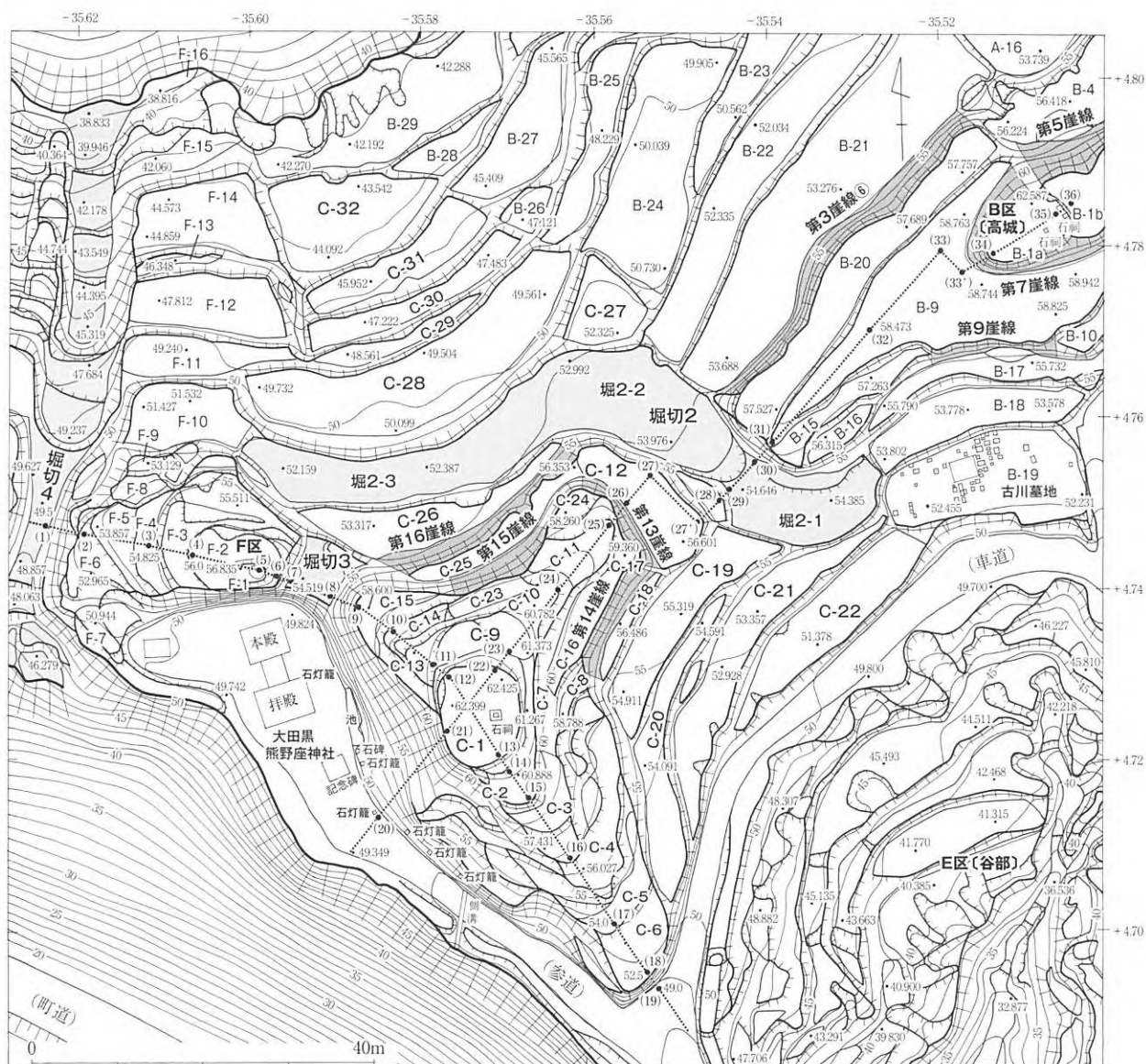
写真(9) C-12と第13崖線

区	長さ	幅	高低差	上段
C-7	11.0	1.4～1.0	1.16	C-1
C-8	21.0	1.8～1.0	1.21	C-16
C-9	11.4	4.6～3.4	1.05	C-1
C-10	5.5	5.0～3.0	0.59	C-9
C-11	8.6	6.8～2.0	0.78	C-10
C-12	17.2	6.5～2.8	2.76～1.91	C-17・24

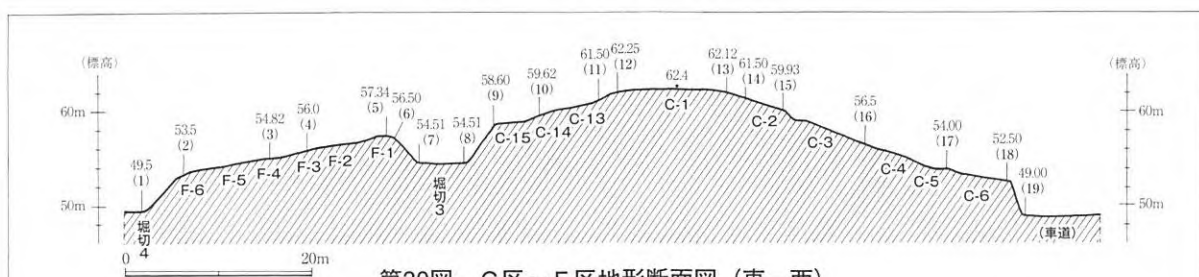
第17表 C区遺構計測表② (単位：m)

崖線	区	長さ	高低差	上段
第13	C-12	14.0	2.4	C-17・24
第14	C-18	14.0	3.29	C-16
第15	C-25	12.0	3.57	C-11・23
第16	C-26	27.0	3.11	C-25

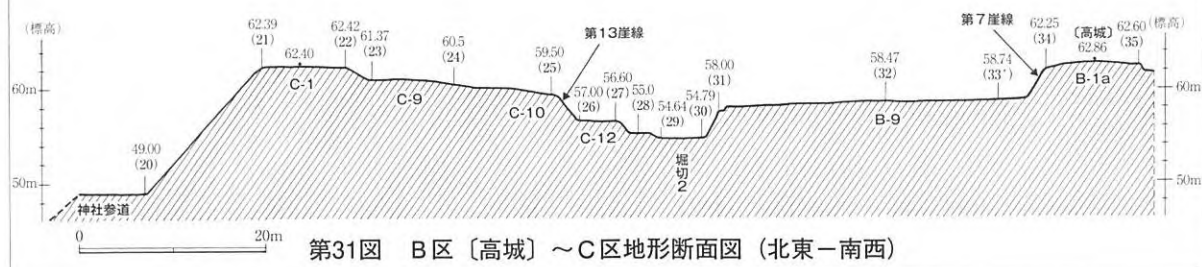
第18表 C区崖線計測表 (単位：m)



第29図 C区～F区全体測量図



第30図 C区～F区地形断面図（東～西）



第31図 B区〔高城〕～C区地形断面図（北東—南西）

山頂の北西斜面部には、3箇所の造成地（C-13～15）が連なる。但し、整形の度合いは低く、段状地形をなさない。C-15の真下に、堀切3がある。

区	長さ	幅	高低差	上段
C-13	8.0	3.5	1.60	C-1
C-14	7.8	1.5～2.4	1.17	C-13
C-15	11.2	4.8	1.03	C-14

第19表 C区遺構計測表③ (単位：m)

主軸尾根筋の東直下斜面に、2段の段状地形（C-16・17）がある。

区	長さ	幅	高低差	上段
C-16	15.4	4.0～1.4	1.0	C-10
C-17	5.4	3.2	0.64	C-11

第20表 C区遺構計測表④ (単位：m)

主軸尾根筋の東凹地斜面に、5段の段状地形が連なっている。帯状の段状地形で、C-19から下位は大型造りになる。最下位のC-22は、地形の変化点で、E区の小谷に接している。C-18の肩部（C-16）は、長さ14m分が、高さ3.29mの第14崖線になる。

区	長さ	幅	高低差	上段
C-18	14.0	1.6～1.0	3.29	C-16
C-19	28.0	6.0～4.0	1.17	C-18
C-20	37.0	4.5～1.8	0.82	C-19
C-21	46.0	4.5～1.0	1.66	C-20
C-22	31.0	6.0～1.4	1.98	C-21

第21表 C区遺構計測表⑤ (単位：m)

主軸尾根筋の北直下に、4段の段状地形がある。C-25の肩部（C-23・11）は、長さ12m分が、高さ3.57mの第15崖線になる。

C-26の肩部（C-25）は、長さ27m分が、高さ3.11mの第16崖線になる。

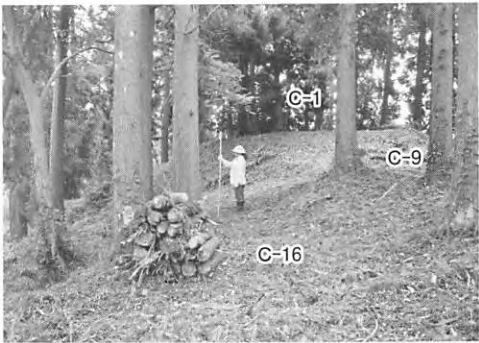
区	長さ	幅	高低差	上段
C-23	10.0	2.2	0.78	C-10
C-24	7.6	3.6	1.74	C-11
C-25	25.0	3.8～1.4	3.57～2.01	C-15・23・11・24
C-26	34.6	5.01.2	3.11	C-25

第22表 C区遺構計測表⑥ (単位：m)

堀切2を挟んだ北斜面に、6段の段状地形がある。B区の斜面とF区の北斜面に挟まれた凹地の造成区画である。

区	長さ	幅	高低差	上段
C-27	10.0	7.7	0.67	堀2-2
C-28	41.0	8.0～4.5	2.29	堀2-3
C-29	21.0	2.5～1.2	0.94	C-28
C-30	26.0	3.0～2.0	1.34	C-29
C-31	21.5	5.0～3.0	1.27	C-30
C-32	19.0	最大11.0	1.86	C-31

第23表 C区遺構計測表⑦ (単位：m)



写真(10) 主軸尾根東直下 (C-16)



写真(11) C-19と第14崖線



写真(12) C-26と第16崖線



写真(13) 北斜面段状地形 (C-32)

〔堀切2〕

外観上は区分出来ないが、遺構の説明上、堀2-1～3に分けた。堀切の形状を留めるのは、堀2-1である。堀2-2・3は、空堀に変化する箇所、後世、完全に埋め戻されて、今日、帯状平地になっている。

堀2-1は、尾根筋中心部の断ち切りである。長さ17m、上場幅9.0m～11.0m、下場幅8.0m。高低差は北東のB-9南西端から3.35m、南西のC-12から1.96m。堀2-2は、長さ25m、最大幅9.5m。上段C-12からの高低差は3.36m。堀2-3は、長さ37m、幅7.0～4.5m、上段C-26からの高低差は0.93m。

区	長さ	幅(上場)	幅(下場)	高低差	上段
堀切2-1	17.0	9.0～11.0	8.0	3.35	B-9
				1.96	C-12
堀切2-2	25.0	—	最大9.5	3.36	C-12
堀切2-3	37.0	—	7.0～4.5	0.93	C-26

第24表 堀切2計測表 (単位：m)



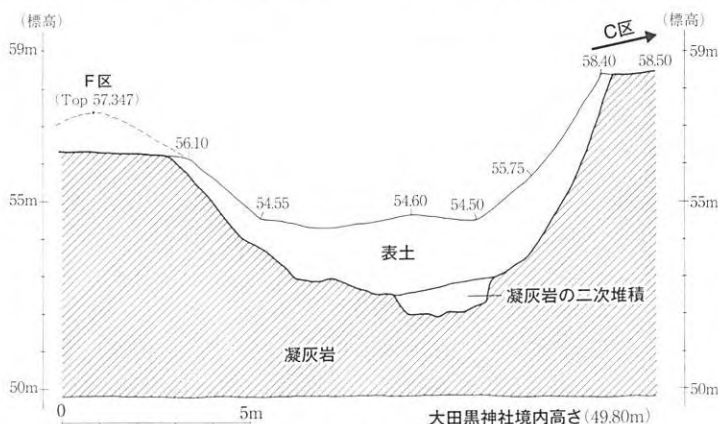
写真(14) 堀切2 (堀2-1→堀2-2)



第32図 堀切2・堀切3測量図

〔堀切3〕

C区とF区の間を仕切っている。C区からの傾斜尾根が、大きく括れており、理にかなった防禦施設である。但し、北東斜面は、直下に緩斜面を造成したC-26があり、尾根筋だけの断ち切りに留まる。一方、南西斜面は、崖面が削り取られて、直下が大田黒熊野座神社の境内になっている。現況からして、旧地形は、ある程度の急斜面で、南へ堅堀が下っていたと思われる。長さ5.6m、幅は7.0～6.5m、高低差はC-15から4.08m、F-1から2.83m。北直下には、C-26の带状削平地の西端部があり、高低差は1.20m。



第33図 堀切3南壁実測図



写真(15) 堀切3南壁 (大田黒熊野座神社境内)

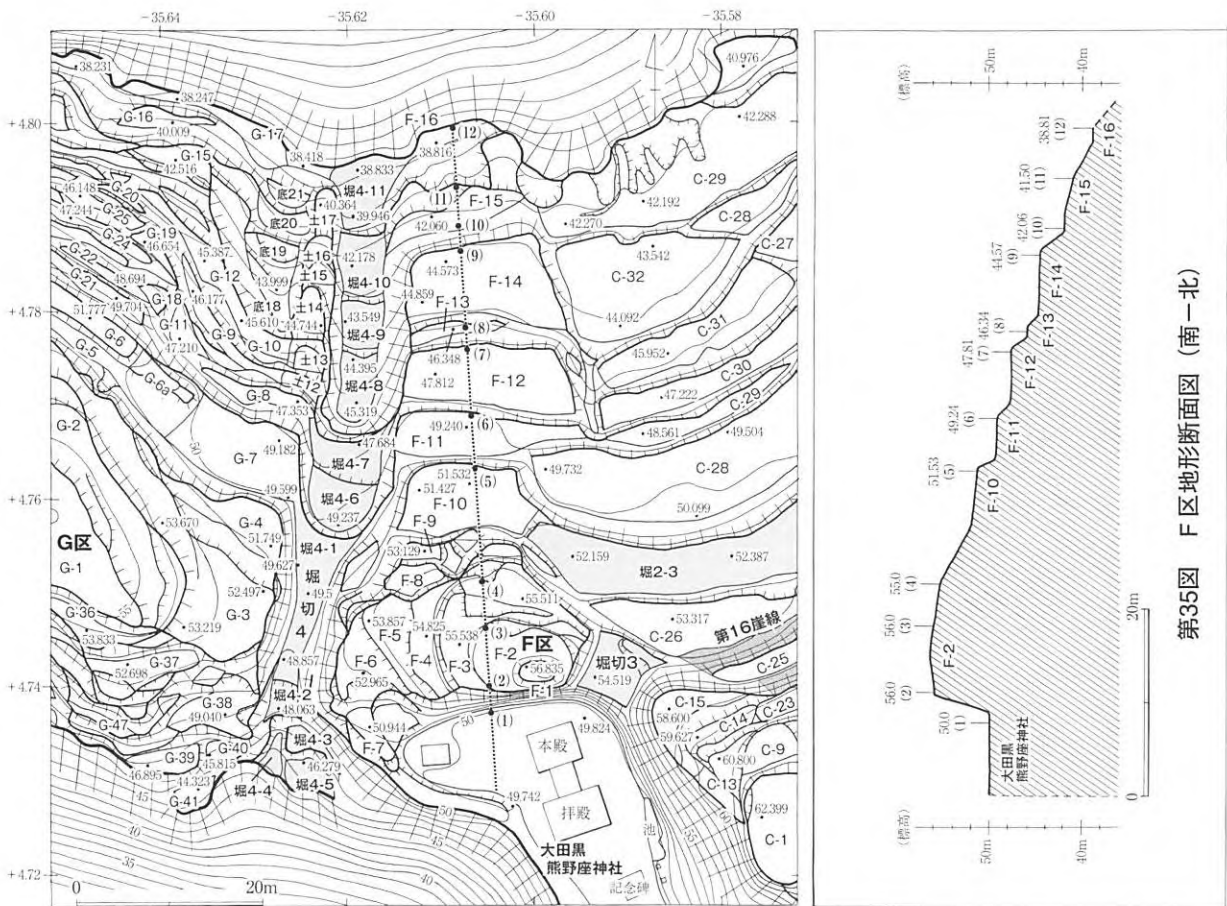
4. F区

(1) 全体が緩傾斜の主軸尾根筋で、堀切3と堀切4に挟まれている。完全な平地は無いが、それでも粗い整地の痕跡は伺える。北斜面に限っては、2箇所小平地(F-8・9)もある。

北の凸斜面に、5段の段状地形(F-10~14)が連なっている。堀切4の東肩部にあたり、造成の度合いの高い削平地である。一方、堀切を挟んだG区の西対岸には、土塁が段状(土12~17)に積まれている。土塁の有無の違いは、西より東の標高が高いためである。通常、堀切を掘削する時は、低い方に排土を積み上げて土塁とする。その方が、労力的に楽である。

F-14の下位にも、2段の段状地形がある。上段と性格は同じであるが、形態が異なる。整地の度合いが低く、段差面は、整地がなされていない。大方、自然地形のままである。

(2) F区は、郭としての意味合いは薄い。尾根の末端部にあれば捨て曲輪になるが、縄張りの中心点に位置するので、それなりの意味合いがあったと思われる。もし、堀切3と堀切2の空堀部分が繋がるのであれば、堀切4との絡みが生じる。その場合、規模の大きな二重堀として、中間の土塁の役目を果たす事になる。頂きの凸部分は、堀切4に関連した土塁の残存部分と考えられる。



第34図 F区全体測量図

第35図 F区地形断面図(南→北)



写真(16) F-1 (西→東)



写真(17) G-3→堀切4→F-6

区	長さ	幅
F-1	5.5	3.5
F-2	10.5	6.5～5.0
F-3	10.0	6.0～2.5
F-4	11.0	3.0～1.5
F-5	11.5	5.5～2.0
F-6	10.0	最大6.0
F-7	6.5	2.0
F-8	6.5	3.0～2.0
F-9	3.2	2.9～1.4

第25表 F区遺構計測表① (単位：m)

区	長さ	幅	高低差	上段
F-10	14.0	8.0～6.5	1.70	F-9
F-11	20.5	5.0～1.5	2.29	F-10
F-12	18.0	7.0～5.0	1.43	F-11
F-13	10.0	1.5～0.5	1.46	F-12
F-14	17.0	11.5～6.0	1.49	F-13
F-15	15.5	6.0～1.5	2.51	F-14
F-16	7.0	2.0～1.0	3.24	F-15

第26表 F区遺構計測表② (単位：m)

〔堀切4〕

神尾城跡で最大規模の堀切である。F区～G区に繋がる主軸尾根を完全に断ち切っている。規模は、図面上で全長70mに及んでいる（注）。この内、尾根の背面部は、長さ20m、堀幅の上位幅は最大9m。底幅は2.5m～3m。G区東端部からの深さ3.5m。かなり大規模な堀切である。

堀切の形状から、断ち切り箇所の旧地形がわかる。主軸尾根の直下で、11m幅の凹地が始まり、これが最北端では22m幅に開いている。図面上では長さ30m。堀切の箇所は、尾根の鞍部箇所にあたる。そこに、築城者は目を付けたのである。排土は、堀切を挟んで、標高の低い西へ積み上げている。その場所は、斜面の途中からで、段積みになっており、堀切5と同じ工法である。斜面部に積み上げる場合、合理的と思われる。

この土塁の西側は凹地で、段状地形になっている。部分的に、二重堀の工法を取っている事が分かる。旧地形の凹地は、11mの幅があるためであろう。これから西の斜面は、段状地形になっている。

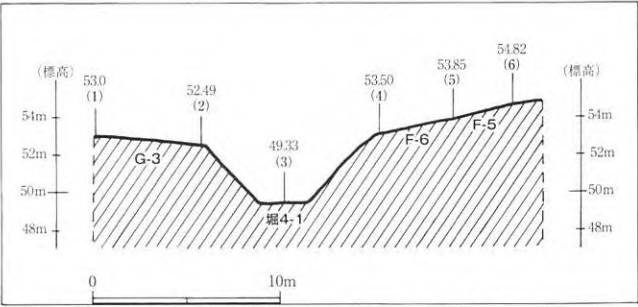
堀切4の東肩部は、6段の段状地形（F-10～15）で、土塁の役目も果たす造成地である。一方で、堀切の南端は、3～5の小段状地形に留まる。堀切5の南端と同じ造成の仕方、南斜面が急な崖になっているために、細かな造成は不要である。平時の際は木橋が架かっており、有事の際は切り落とされたと考えられる。

堀底が南北に長いのが特徴である。その分、断ち切り箇所の尾根幅が広い事を意味する。堀底の北端は、凹状態に広がっており、西側のG-7と繋がる。

（注）堀切の構造について、後述する『古城考』は「流れ」という表現をしている。（→68頁）

区	長さ	幅	高低差	上段(F区)	高低差	上段(G区)
堀4-1	16.0	7.0(北端)	3.5	F-9	2.12	G-4
		3.0(中央)	4.35	F-6	3.00	G-3
		2.5(南端)	4.11	F-6	3.54	G-3
堀4-2	3.5	3.5～2.5	4.44	F-6	0.98	G-38

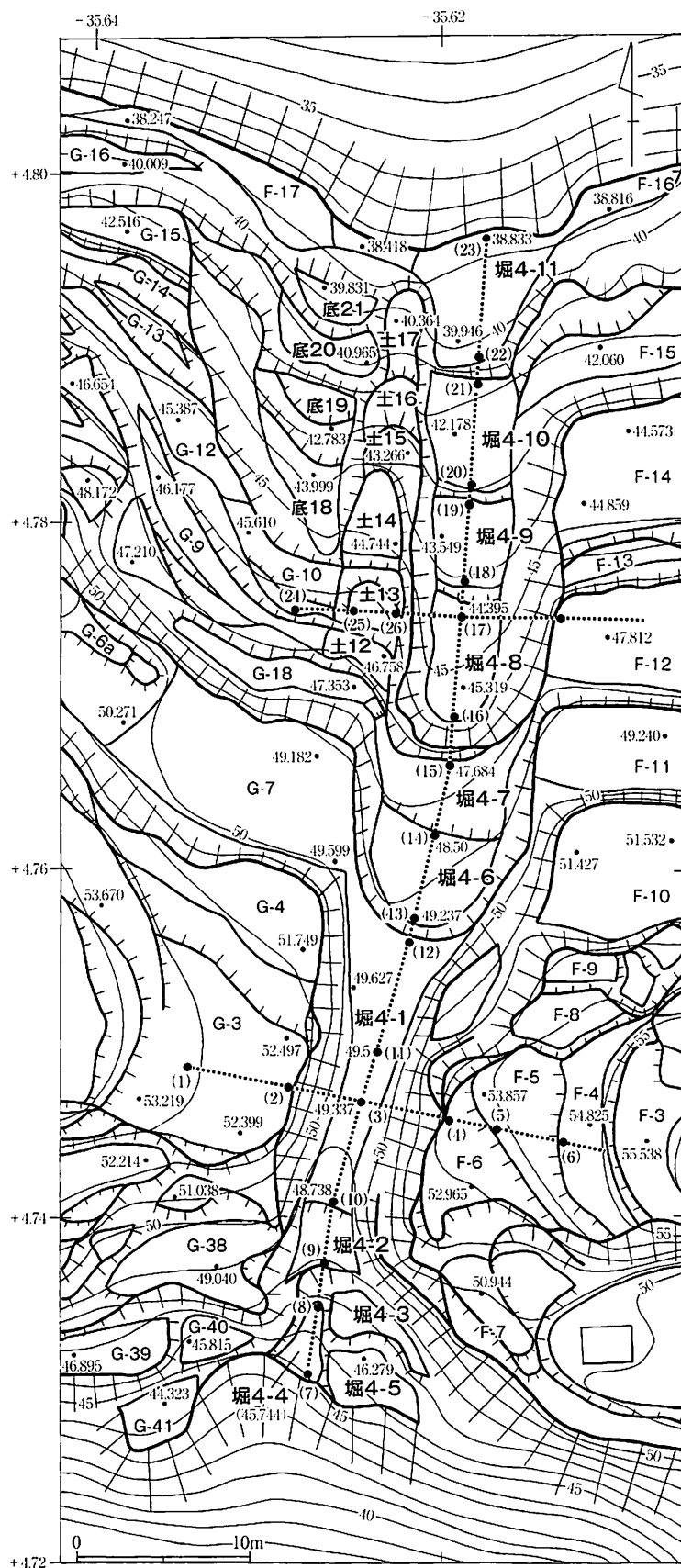
第27表 堀切4計測表① (単位：m)



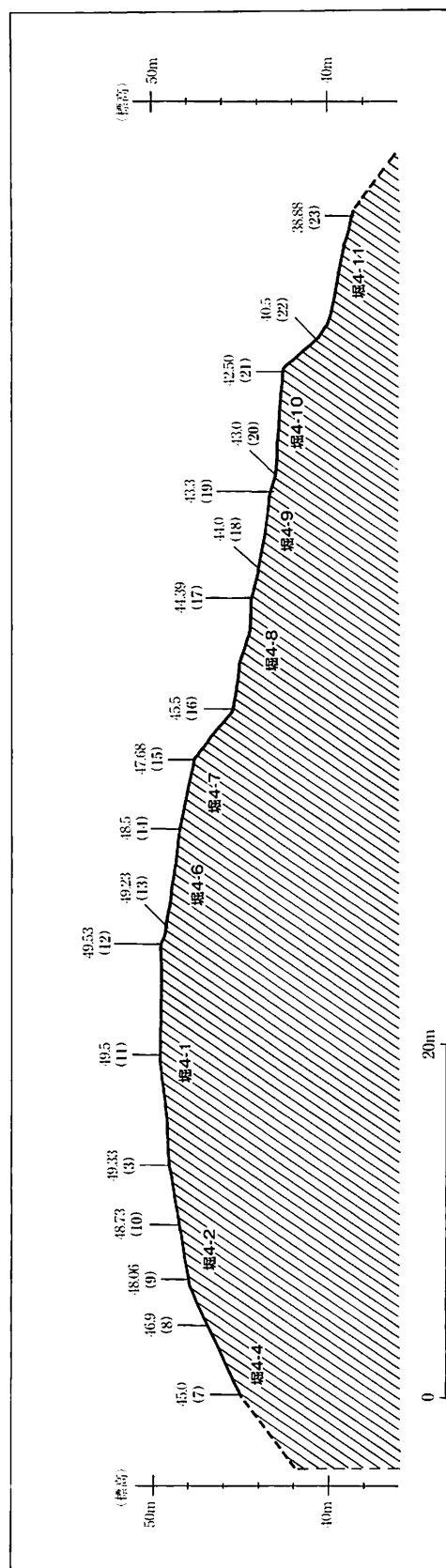
第36図 堀切4 (堀4-1) 断面図 (西→東)



写真(18) 堀切4 (南→北)



第37图 堀切4测量图



第38图 堀切4断面图 (南—北)

堀切4の南下には、3箇所に関連の小段がある。これより下位は、絶壁である。

区	長さ	幅	高低差	上段(F区)	高低差	上段(G区)
堀4-3	7.0	2.5~1.0	3.94	F-7	2.00	G-38
堀4-4	4.5	3.0~1.0	5.20	F-7	3.30	G-38
堀4-5	5.0	3.5~2.0	4.66	F-7	2.76	G-38

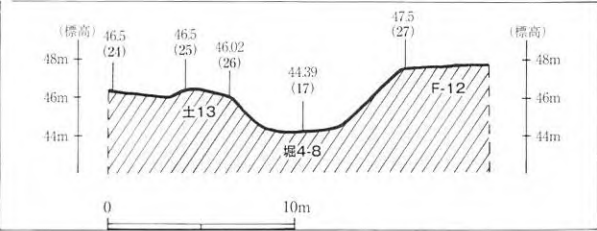
第28表 堀切4計測表② (単位：m)

堀切4の北下は、堀底が6段に連なる。いずれも舌状形で、後世の造成とも思われる。

区	長さ	幅	高低差	上段(F区)	高低差	上段(G区)
堀4-6	5.0	7.5	2.19	F-10	0.36	G-7
堀4-7	8.0	3.0~6.0	1.56	F-11	1.50	G-7
堀4-8	6.5	4.0	3.42	F-12	1.63	±13
堀4-9	5.0	4.0~5.0	1.31	F-14	1.19	±14
堀4-10	6.5	4.5~5.0	2.40	F-14	1.09	±15
堀4-11	7.0	5.0~8.0	2.11	F-15	0.42	±17

第29表 堀切4計測表③ (単位：m)

【注】「±13」の表記は、堀切4 - 土塁13の略である。図中同様の表記となる。



第39図 堀切4 (堀4-8) 断面図 (西-東)

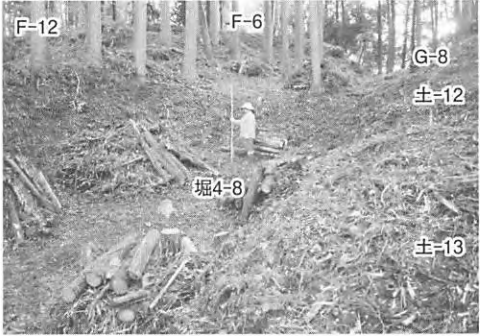


写真(19) 堀切4北側 (堀4-8)

堀切4の西肩部に、6段の土塁が積まれている。後述するが、堀切5の東土塁も同様に段状になっている。

区	長さ	幅	高低差	堀底
±12	4.5	1.5	1.44	堀4-8
±13	3.5	2.5	1.63	堀4-8
±14	3.0	5.0	1.19	堀4-9
±15	3.5	2.0	1.09	堀4-10
±16	3.0	2.5	0.18	堀4-10
±17	2.0	5.5	0.42	堀4-11

第30表 土塁計測表 (単位：m)



写真(20) 堀4-8と西肩部の土塁13

堀切4の西肩部の土塁下には、末広がりの凹地が下っている。上から3番目の土塁14からである。底部は、4段に分かれている。凹地の幅は、上位で4m、下位で13m、長さ16m。

区	長さ	幅	高低差	土塁
底18	9.0	6.0~1.5	0.74	±14
底19	2.0	4.5	0.48	±15
底20	6.5	1.5~2.5	0.03	±17
底21	5.0	2.0	0.53	±17

第31表 底部計測表 (単位：m)

【注】「底18」の表記は、堀切4-底部18の略である。図中同様の表記となる。



写真(21) 底部19 (西肩部土塁西下の凹地)

5. G区

(山頂域)

山の東寄りにある。内枠のG-1は、山頂の上面域で、鋭角三角形をしている。幅は、西端が広く東端で窄まる。整地の痕跡を感じられるが、平地の確保までには、至っていない。山頂の高さは、僅かな範囲（長さ4m・幅2～1m）が、標高56.0m。東西両端は、標高55mの緩傾斜地で、殆ど、差異が無い。

G-2は、G-1の外枠にあたり、歪な台形である。西端が広がり、東端で、やや窄まる。整地の度合は低いが、平面形状は、整っている。北縁には、斜面を切り込む崖線が走り、直下を空堀と土塁が走っている。これは、G-1・2・4の北が、広い範囲で、緩斜面をなす為であろう。さらに、整地の痕跡がある東端平地をG-3、その北東斜面をG-4に細分した。

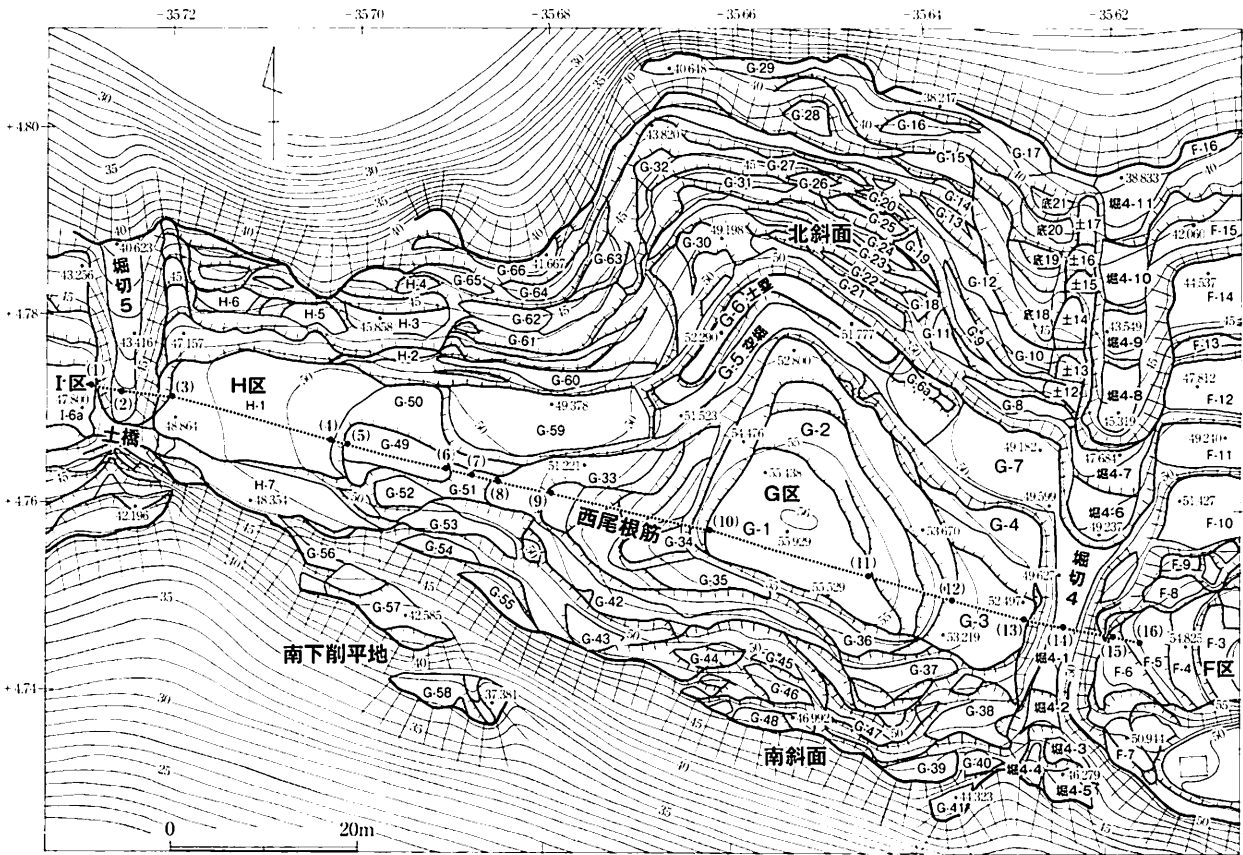
区	長さ	幅	高低差	上段
G-1	23.5	11～2.0	—	—
G-2	38.0	24～15～17.6	3.2	山頂

第32表 G区遺構計測表① (単位：m)

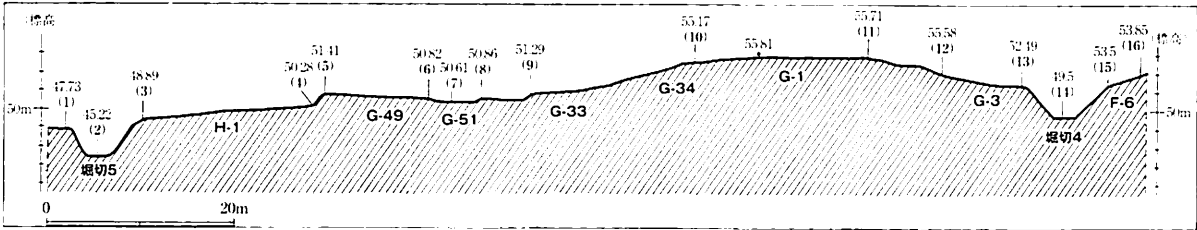
G-3は、堀切4の上段区画にあたる。造成地であるが、西端で、尾根筋への切り込みが無い。下位の堀切4に連動する区画である。G-4は、堀切4の西肩部にあたるので、斜面が整地されている。

区	長さ	幅	高低差	下場	上場幅	対岸
G-3	11.0	10.4～7.8	3.00	堀切4-1	9.0	F-6
G-4	22.5	5.0～1.5	2.12	堀切4-1	13.0	F-8

第33表 G区遺構計測表② (単位：m)



第40図 G区・H区全体測量図



第41図 G区・H区地形断面図 (西－東)

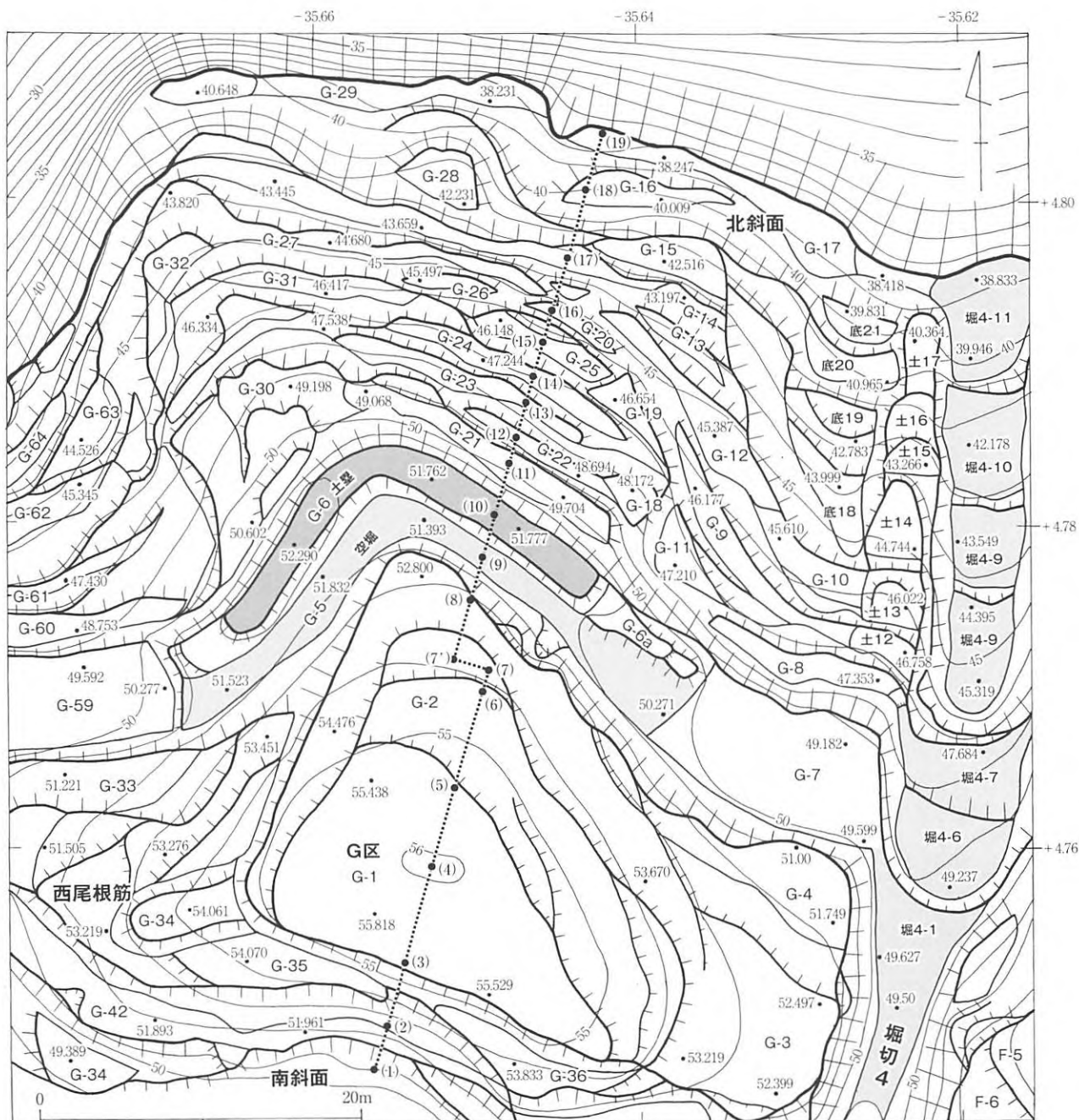
〔空堀と土塁〕

G-2の北直下・崖下を空堀（G-5）が東西に走行している。東端（G-7）で堀切4と繋がり、西角隅で南西に大きく折れ曲がる。全体は、幅広の逆U字形を描き、北肩部に土塁（G-6）を積んでいる。

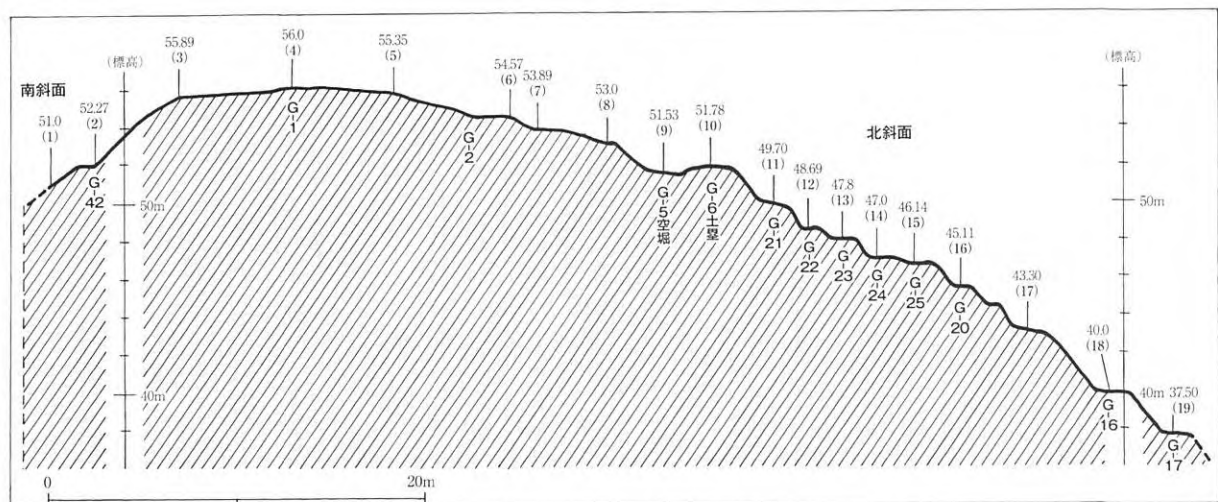
土塁の東端（G-6a）は、長さ8.0m分が、少し地下げされており、0.5mの段落ちになる。さらに、東先のG-7は、長さ15.0m、幅7.0～5.5m分が、全くの帯状削平地になっている。

空堀の存在は、G区の北が、広い緩斜面である事をカバーするものである。空堀は、東へ延びて堀切4と繋がっていたと思われるが、現在は、東へ弧状に廻り込んで消滅した形になっている。空堀を掘り込むG-3とG-4の下には、削り出された堀壁ラインがある。これに加えて、空堀から下の北斜面には、細帯状削平地が連っており、東端に大規模造りの堀切4もある。一帯は、堅固な守りになっている。

一方で、山頂上面域の造成は甘く、完全な平地の確保には至っていない。北斜面とは、対照的な造成の仕方である。しかしながら、G-1～4の全体形は、粗く長方形状に造られており、アンバランスな感じがする。



第42図 G区 山頂～空堀・土塁～北斜面測量図



第43図 G区 山頂～空堀・土塁～北斜面地形断面図（南～北）



写真(22) 空堀（G-5）と土塁（G-6）

〔北斜面〕

G-1・空堀（G-5）・土塁（G-6）下の広い北斜面は、標高50m～38mの間に、細带状削平地が密に連なっている。形状から犬走りのものが多い。異なるのはG-11・18・19・28の小段だけである。

図面上での北斜面幅は、東で24m、西で20m。直下は牛舎の敷地になっており、高低差12m。斜面は崖である。

25箇所の小段の内、高低差が2.51mを越えるのは3箇所に留まる。緩斜面の造成地で、前述の空堀と土塁が巡るのは、そのためであろう。

東端は、堀切4に伴う土塁が仕切りとなる。



写真(23) G区北斜面（G-16）

遺構	全長	幅（下場）	幅（上場）
G-5	39.5	5.0〔東端〕	8.5〔東端〕
		1.2〔東寄り〕	4.0〔東寄り〕
		3.0〔角隅〕	5.0〔角隅〕
		3.0〔西端〕	6.5〔西端〕

第34表 G区遺構計測表③（単位：m）

遺構	長さ	幅	高低差	上段
G-6	29.5	2.3～1.6	0.37	G-5
G-6a	8.0	2.3～1.0	0.50	G-6
G-7	15.0	7.0～5.5	1.40	G-4

第35表 G区遺構計測表④（単位：m）

区	長さ	幅	高低差	上段
G-8	13.0	1.5～1.0	1.83	G-7
G-9	28.0	1.5～0.5	1.03	G-11
G-10	9.0	2.0～1.0	0.57	G-9
G-11	6.0	2.0	3.86	G-6
G-12	18.0	3.0～1.0	0.79	G-9
G-13	7.5	1.0	1.39	G-12
G-14	37.0	2.0～0.5	0.80	G-13
G-15	9.0	3.0～1.0	1.04	G-14
G-16	10.5	2.0～0.5	2.51	G-15
G-17	25.0	4.0～1.0	1.77	G-16
G-18	3.5	2.0	1.53	G-21
G-19	6.0	2.5	0.65	G-24
G-20	7.0	1.0	1.03	G-25
G-21	19.0	2.0～1.0	2.07	G-6（土塁）
G-22	10.5	1.0	1.00	G-21
G-23	30.0	1.5～0.5	1.02	G-21
G-24	16.5	1.5～1.0	0.81	G-23
G-25	9.5	2.0～1.0	2.00	G-24
G-26	6.0	1.0	0.65	G-25
G-27	20.0	1.5～1.0	1.74	G-31
G-28	6.0	3.5	1.43	G-14
G-29	25.0	2.0～1.0	4.00	G-28
G-30	6.0	3.0～2.5	3.09	G-6
G-31	13.0	2.0～1.5	1.12	G-23
G-32	4.5	2.5	1.22	G-31

第36表 G区遺構計測表⑤（単位：m）

G-33・34は、G-1の西尾根筋である。G-33は、舌状形をしており、西端で窄まる。長さ22.5m、東端幅14m、西への緩傾斜地で、高低差2.5m。G-34は、G-33枠内の南東隅にある細带状の張り出し小区画で、長さ28m、幅2.5m。整地の痕跡は、何もない。

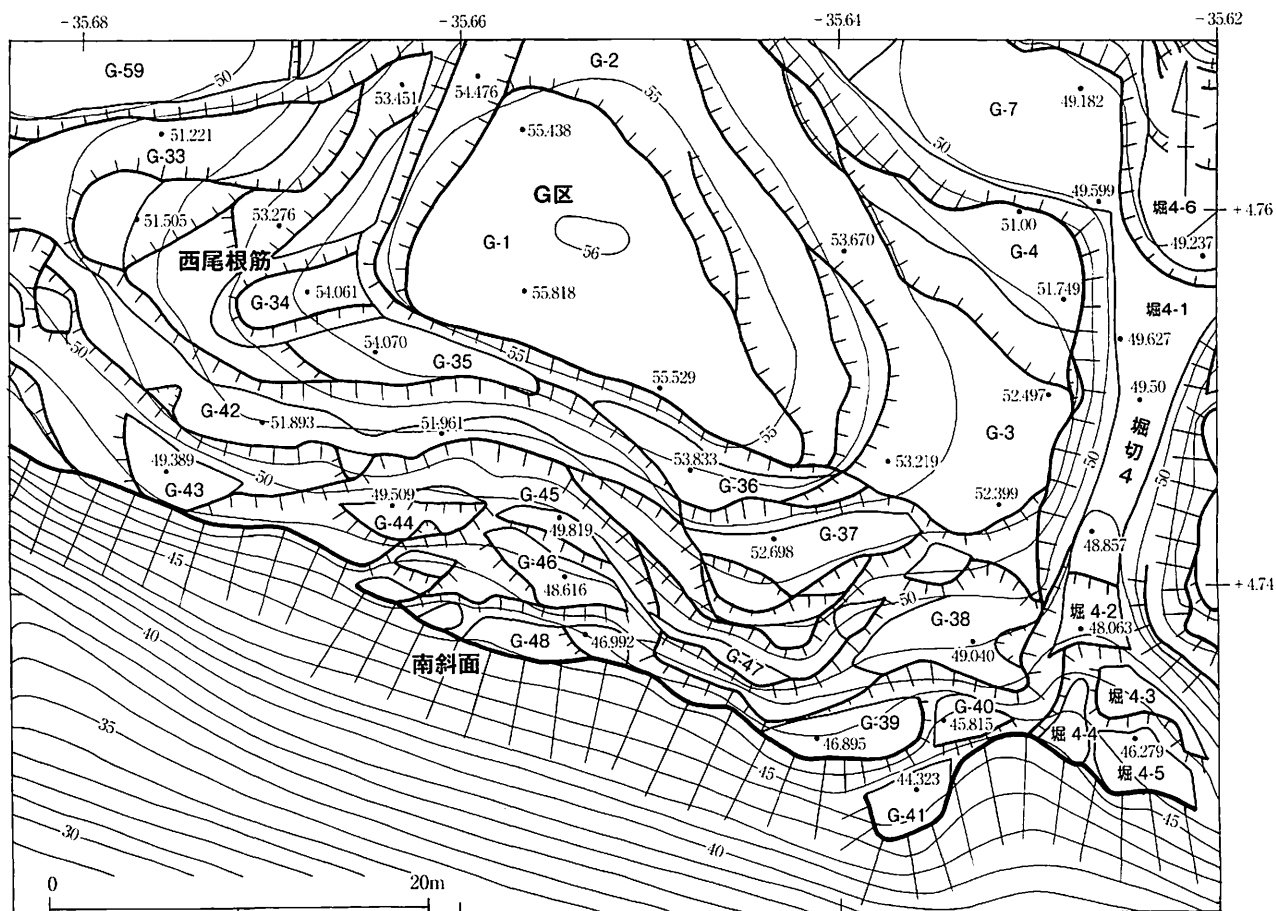
G-1・3・33の南斜面には、小段群がある。標高35～44mの範囲に分布しており、小段の造りは、小振りながら、北斜面のそれと比較した場合、幅広いのが特徴である。この中で、G-42は長さ37.5mで、例外的に本格的な犬走りである。小段群の下位は絶壁になる。

図面上での南斜面の幅は14mで、北斜面の約2分の1に止まる。

各段の高低差は、2.45mを越えるものが7段あり、全体の50%を占めている。それだけ急斜面に築かれている事が分かる。

区	長さ	幅	高低差	上段
G-35	13.0	3.0~1.0	1.75	G-1
G-36	13.0	2.5~0.5	1.0	G-1
G-37	11.0	4.5~1.5	1.14	G-36
G-38	10.5	5.5~1.5	3.66	G-37
G-39	9.0	4.0~1.0	2.15	G-38
G-40	4.0	2.5~3.0	3.23	G-38
G-41	5.0	3.0	2.57	G-39
G-42	37.5	3.0~1.0	2.18	G-35
G-43	7.0	3.0	2.50	G-42
G-44	6.5	2.5~1.5	2.45	G-42
G-45	6.0	1.5	2.14	G-42
G-46	8.5	2.5~1.0	1.20	G-45
G-47	8.0	1.5~1.0	3.70	G-37
G-48	9.5	2.0	1.62	G-46

第37表 G区遺構計測表⑥ (単位：m)



第44图 G区 南斜面測量図

〔西尾根筋・南斜面〕

G-49は、やや凹地状態のG-51を挟んでおり、G-33の西に位置している。東端がやや窄まる長方形の小区画で、長さ12m、幅4.0～2.0m。西端が東端よりも、17cm高い。尾根筋の最も高い部分を削り残している。G-50は、G-49の外枠で、長さ12.5m、幅11m。

G-51は、長さ4m、幅3.0～4.5m、深さ20cm。外見上は、尾根筋を断ち切る堀切に違いないが、余りに小規模で、疑問が残る（発掘調査を行なえば、堀切の埋没が確認できるかもしれないが）。

尾根筋の南斜面は、若干の凹地形で、標高51～48mの範囲に、小規模な細帯状地形がある。

区	長さ	幅	高低差	上段
G-52	7.5	3.5	0.90	G-49
G-53	13.0	3.1～1.0	1.86	G-51
G-54	9.0	9.0～2.0	0.63	G-53
G-55	11.0	3.0	0.84	G-54

第38表 G区遺構計測表⑦ (単位：m)



写真(24) G区西尾根筋南斜面 (G-43)

〔西尾根筋・南下削平地〕

標高47m下の崖面に、やや大型の削平地がある。H-7から小道が下っている。規模は異なるが、同様な造成地は、A-6にもある。

区	長さ	幅	高低差	上段
G-56	10.0	2.0～0.5	3.47	H-7
G-57	15.0	4.5～3.5	2.30	G-56
G-58	13.0	4.5～1.0	5.20	G-57

第39表 G区遺構計測表⑧ (単位：m)



写真(25) G区南下削平地 (G-57)

〔西尾根筋・北斜面〕

G-59は、G-33の北下にある。長さ21m、幅6.5m、高低差1.57mの帯状地形で、地形的には、G-5（空堀）とG-6（土塁）の延長部との方が出来る。後世に、土塁が壊されて空堀が埋め立てられた区画であろう。そうすれば、空堀は最終的に、G-51の堀切推定地に繋がる事になる（第45図）。理想的な防禦ラインである。しかし、前述の様にG-51の堀切は確定していない。さらに、両区画の接点は、G-51から見て、-61cmの高低差があり、この点が気になる。

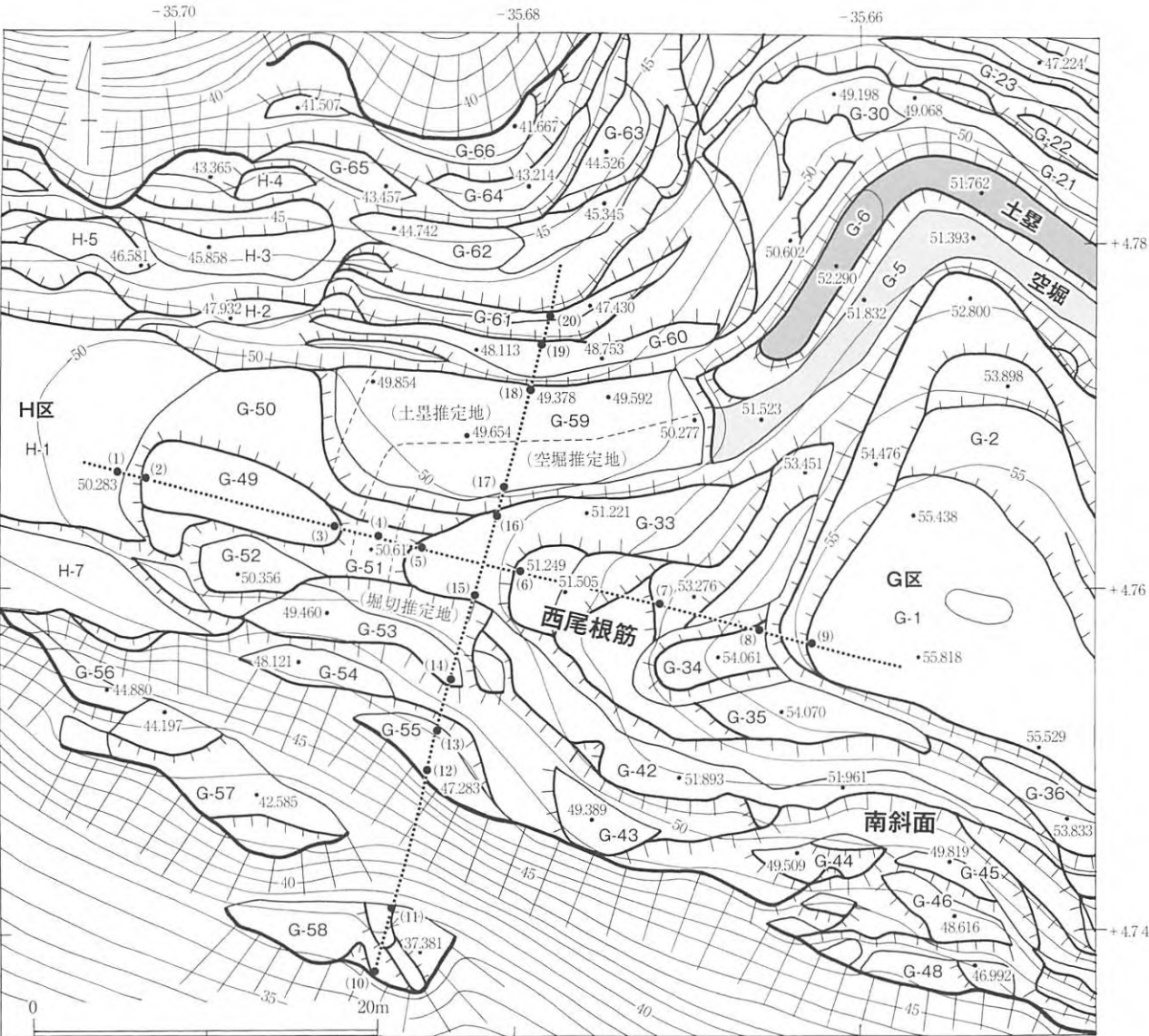
G-59の北斜面は、凹地になっており、標高49～41mの間に、帯状地形と小段が連なる。

区	長さ	幅	高低差	上段
G-60	14.5	2.0～0.5	1.26	G-59
G-61	19.0	1.0～0.5	0.68	G-60
G-62	17.5	2.5～1.0	2.08	G-61
G-63	7.5	2.5（最大）	0.82	G-62
G-64	11.5	2.0～1.5	2.13	G-62
G-65	18.0	2.0～0.5	1.28	G-62
G-66	9.0	2.0～0.5	1.55	G-64

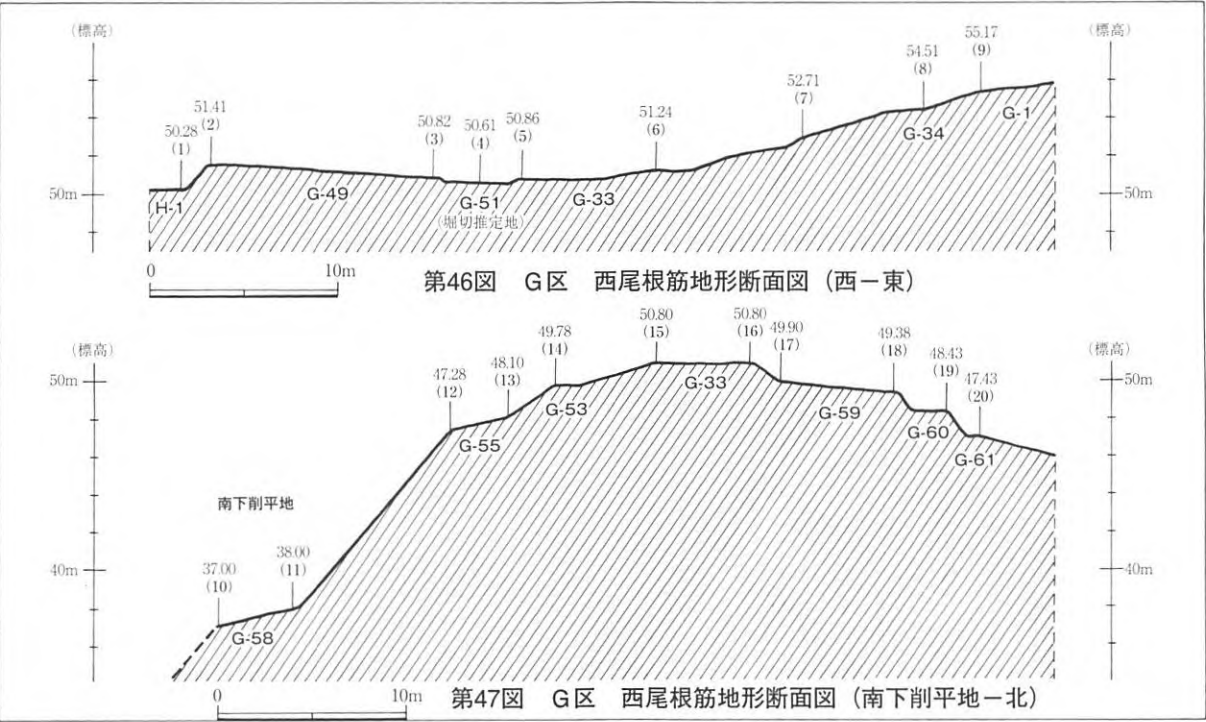
第40表 G区遺構計測表⑨ (単位：m)



写真(26) G区尾根筋北斜面 (G-66)



第45图 G区 西尾根筋测量图



6. H区

G区の主軸尾根筋は、この個所で、一変して平地に転じる。元来、傾斜地であるが、丁寧に整地されており、東西両端の高低差は、1.42mまで縮まっている。地形的には、G区に含まれるが、整地状態が全く異なるので、別区画とした。西対岸の堀切5に関連した区画で、地下に何らかの遺構が考えられる。

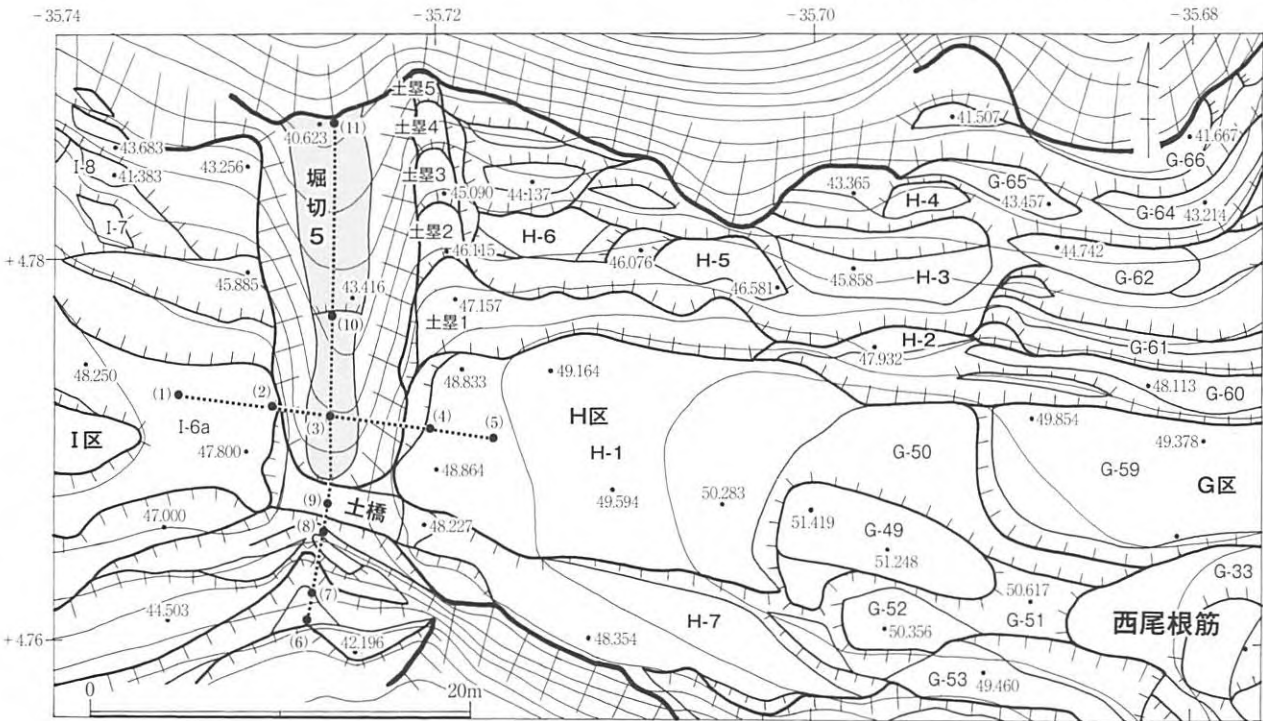
北斜面には、標高49.5～44mの間に小段群がある。西端は、堀切5の土塁に接する。

区	長さ	幅	高低差	上段
H-1	19.5	11.5～8.5	1.42	Hの東端
H-2	11.5	1.5～0.5	2.35	H-1
H-3	12.0	3.0～2.0	2.07	H-2
H-4	5.5	2.0～1.0	2.49	H-3
H-5	10.0	2.5～1.5	2.92	H-1
H-6	6.5	2.0～1.5	0.58	H-5

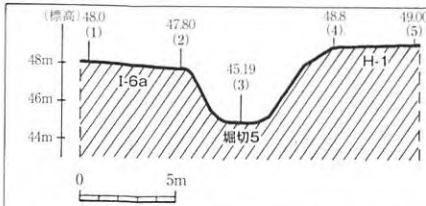
第41表 H区遺構計測表① (単位：m)



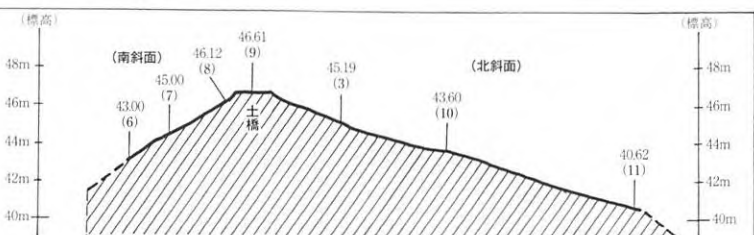
写真(27) H区西端部 (H-1)



第48図 H区全体測量図



第49図 堀切5断面図① (西－東)



第50図 堀切5断面図② (南－北)

H-7は、H-1の南直下にある。長形状で、東端が窄まる。長さ23.5m、幅4.5～2.0m。高低差1.24m。西端は、少し下ると堀切5の土橋に接する。堀切5の存在は、近くまで行かねば、全く伺い知れない。敵勢が、G区の尾根を一気に駆け下れば、そのまま、堀底に転落しかねない状況にある。これは、対岸のI-6aが、H区より一段低い(－1.06m)事による。対岸も、明らかに戦略的な地盤下げが行われている。

H区とI区間の鞍部を断ち切っており、形状的には竖堀に近い。この箇所は、主軸尾根筋の中で、地形の一大変化点である。極端に括れた緩傾斜の主軸尾根が、ここで上りに転化している。この場合、特異な事は、主軸尾根筋の狭い背面が南縁に偏り、北斜面は急傾斜になる事である。

土橋は、尾根筋の南縁ギリギリを掘り残して造られている。平時には通路で、簡単な橋が架っていたと思われる。有事の際には、柵などで遮断されたのであろう。

区	長さ	幅	高低差	上段	高低差	上段
土橋	6.2	22～16	1.19	I-6a	1.62	H-7

(单位: m)

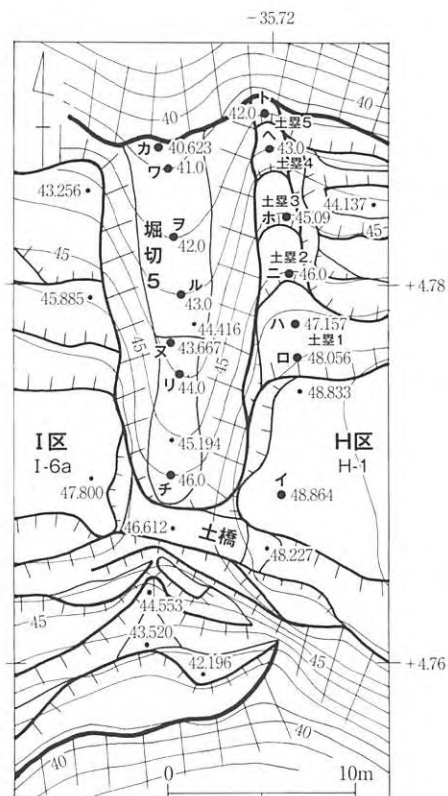
東肩部に、段状になった土塁の基底部が残る。土塁の最上段には、H区の西端が、土塁の役目を果たしている。この段状土塁は、元々、このような形状であったものと思われる。斜面部に土塁を積み上げる効率的な工法である。

区	長さ	幅	高低差	上場幅	下場幅
H-1	9.2	—	2.86 (イーチ)	7.0	2.5
土塁1	4.6	—	4.05 (ローリ)	7.8	2.0
			3.48 (ハース)	8.0	3.0
土塁2	3.2	2.4	3.0 (ニール)	8.5	3.5
土塁3	2.8	2.0	3.09 (ホーヲ)	8.2	3.8
土塁4	2.6	1.8	2.0 (ヘーワ)	8.2	3.8
土塁5	1.6	1.6	1.37 (トーカ)	—	4.0

(単位: m)



写真(28) 堀切5 (南→北)



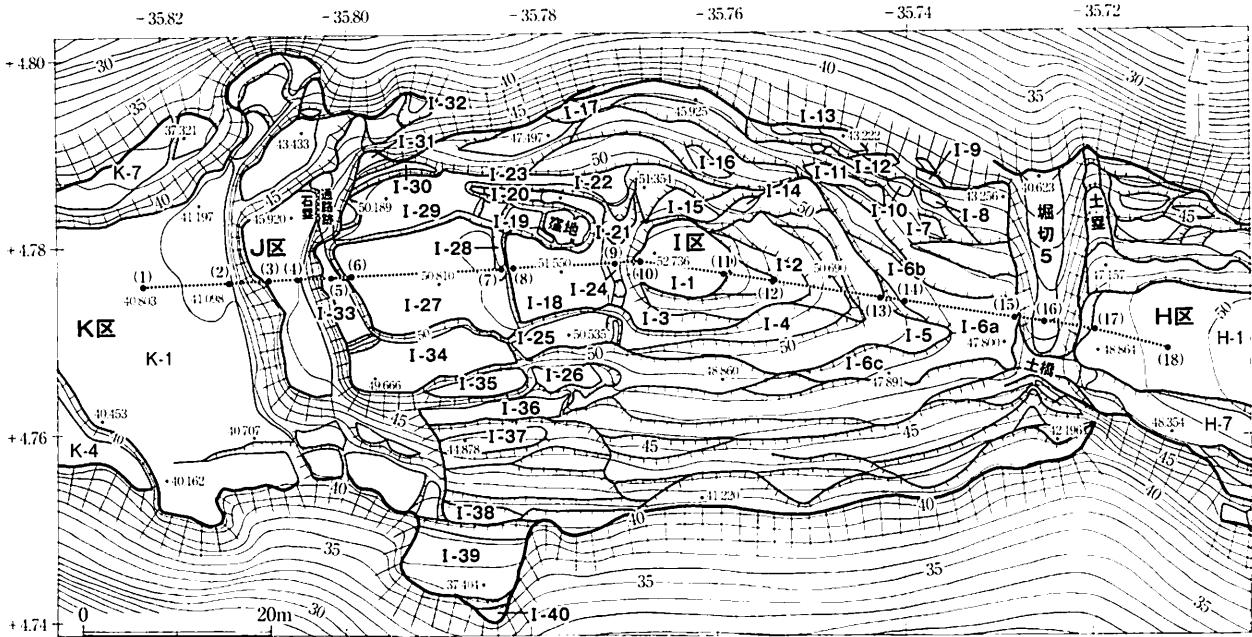
第51図 堀切5測量図

堀切 5 に関連する事は疑いないが、山頂域の状態を比較すると奇異な感じがする。前述したように、堀切 5 の対岸 I-6 a が、H 区より一段低いとの事象がある。H 区も戦略的な造成であろうか。この辺りは、解 釈が非常に難しい。

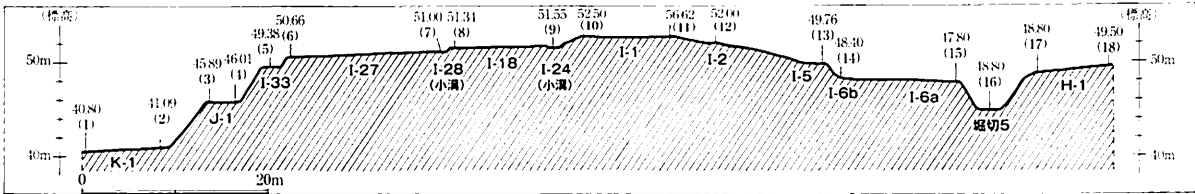
7. I 区

東下で堀切5と、西下でJ区に挟まれている。山頂域から東の尾根筋は、6区に細分される。但し、はっきりとした平地はなく、区分の目安は、斜面縁部に残る粗い整形痕（薄い切り込み面）である。

I区は、東と西で造成の仕方が大きく異なる。東では自然地形を残し、東下の堀切5へ下っている。一方、西は、造成度合いが高い平地（I-18・I-27）がある。これはJ区の段状地形に繋がる造成地である。



第52図 I区全体測量図



第53図 I区地形断面図（西－東）

〔I区東側〕

I-6aは、I区尾根の東端で整地されている。堀切5の西対岸にもあたる。但し、西側の尾根筋への切り込みはない。I-6a～cで、Y字形をしている。

区	長さ	幅
I-1	16.4	7.4～2.0
I-2	3.2（東）	2.2（北東） 2.6～2.0（南）
I-3	—	2.4～1.0（南）
I-4	4.8（東）	3.6～2.6（北東）
I-4a	2.0（南東）	1.6～0.6（北東）

区	長さ	幅
I-5	9.2（東）	3.4～2.0（北東） 3.6～1.0（南）
I-6a	7.0（東）	7.6～6.4
I-6b	14.6（北東）	4.2～4.0
I-6c	17（南）	3.6～3.0

（単位：m）

第44表 I区造構計測表①

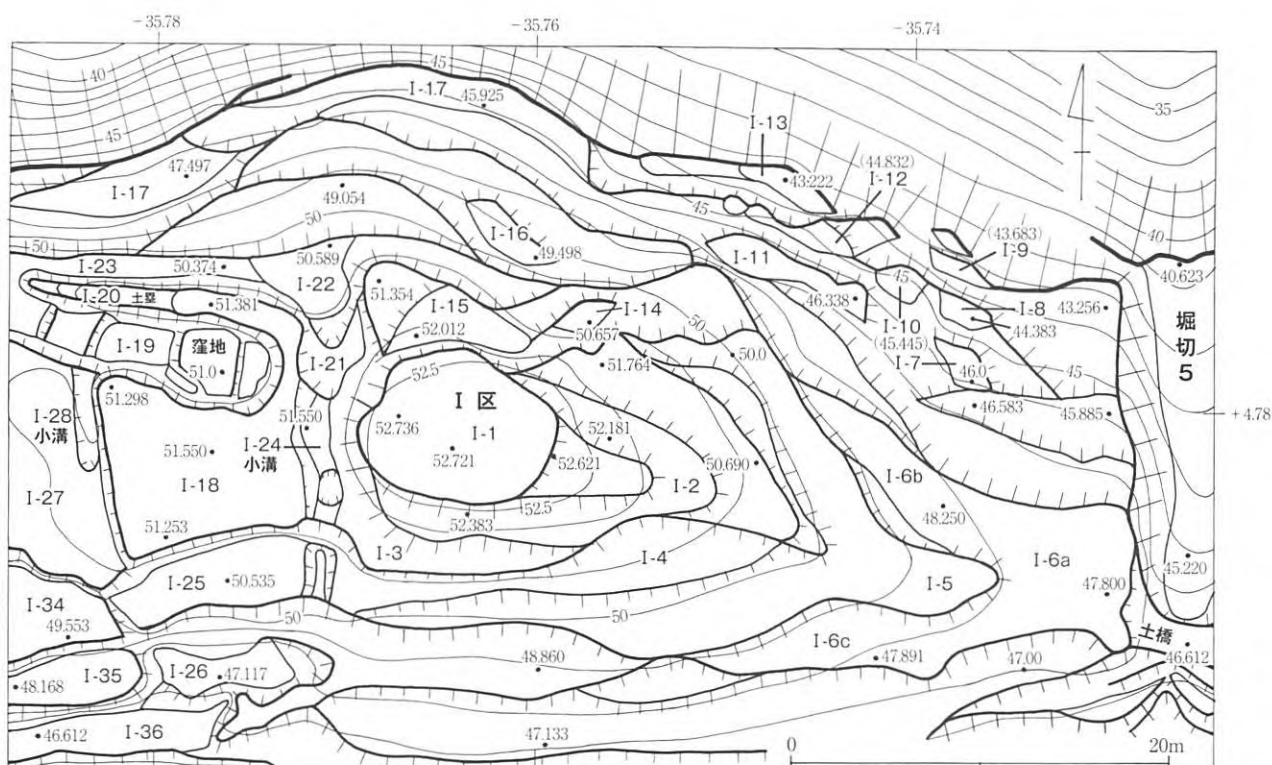
北斜面には、標高50～43mの範囲に、小段群と犬走りが見られる。数はG区の南北斜面と比較すると、かなり少なめである。この中で、I-17は、唯一、大型の犬走りで、斜面の西へ延びている。

区	長さ	幅	高低差	上段
I-7	4.0	2.0	2.25	I-6b
I-8	3.6	1.2	1.62	I-7
I-9	4.2	1.0	0.70	I-8
I-10	3.0	1.8	0.89	I-11
I-11	9.4	2.2～0.8	3.66	I-5
I-12	8.2	1.8～0.6	1.50	I-11

区	長さ	幅	高低差	上段
I-13	11.0	1.4～0.8	1.61	I-12
I-14	3.6	1.4	1.11	I-4
I-15	9.8	4.4～1.0	0.72	I-1
I-16	5.8	1.8	2.51	I-15
I-17	34.8	4.0～1.0	3.57	I-16

（単位：m）

第45表 I区造構計測表②



第54図 I区 東側測量図

〔I区西側〕

小溝（I-24）を挟んで、2区画（I-18・I-27）からなる造成地で、窪地や南斜面に小段群がある。

〔窪地と土塁〕

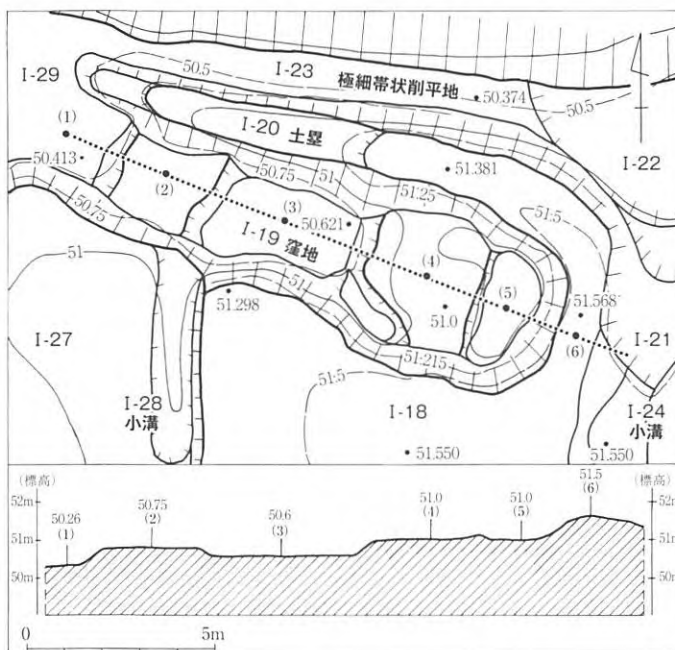
I-18には、北縁に、窪地（I-19）・土塁（I-20）・極細帯状削平地（I-23）がある。

窪地（I-19）は、底部が4段に分かれ、北肩部に土塁を積んでいる。雨水を溜める遺構と考えられる。平地（I-18）の面積に対して、溝の占める割合が大きいのが特徴である。

土塁（I-20）は、窪地の北肩部に積まれている。東端は、I-18に同化している。溝の大きさの割りには、細長である。



写真(29) I区・窪地（東→西）



第55図 I区 窪地実測図・地形断面図

区	長さ	上場幅	底部の高さ
I-19	12.8	東 5.2	東 51.05
		中央 3.1	中央 50.62
		西 3.0	西 50.41

区	長さ	幅	高低差	上段
I-18	9.6	10~6.2	1.17	I-1

区	長さ	上場幅	高低差	下部
I-20	15.2	2.0~0.6	0.76	I-19
I-23	12.1	1.2~0.8	1.00	I-20

第46表 I区遺構計測表③

(単位: m)

〔小溝〕

I-1の西下には、小溝（I-24）があり、これを挟んで、2箇所平坦地（I-18・I-27）が並んでいる。

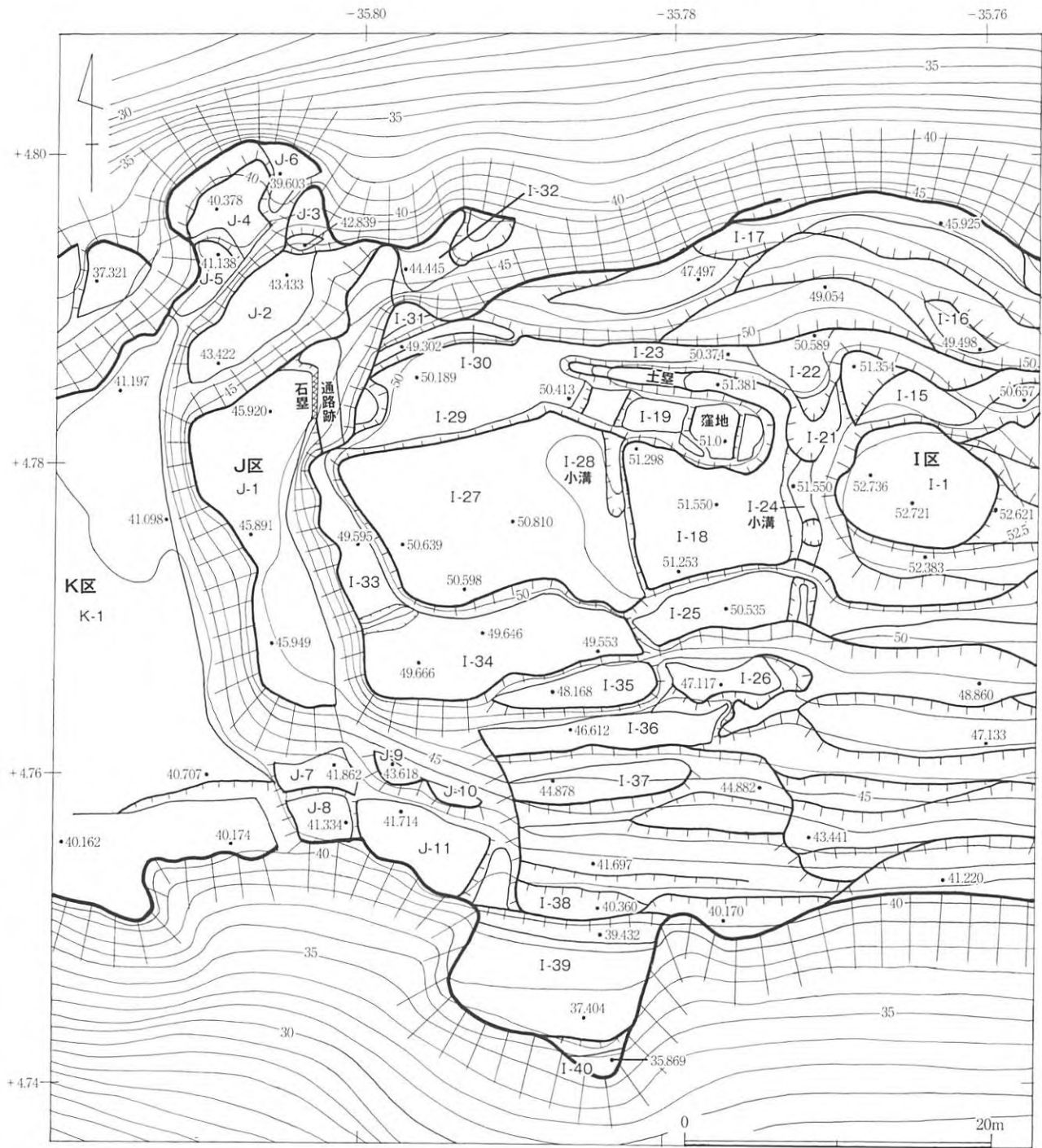
小溝は、「く」の字を描き、北から南へ下っている。区画の仕切り溝と思われる。北端に、流れ込みの雨水を流すための2段の凹地（I-21・22）がある。窪地とは、連動していない。

区	長さ	幅	高低差	上段
I-24	7.8	2.2～1.4	1.19	I-1
I-21	2.0	3.0	0.76	I-15
I-22	4.0	5.2	0.76	I-15

第47表 I区遺構計測表④ (単位：m)



写真(30) 小溝（I-24）



第56図 I区 西側測量図

〔西側平地〕

北斜面には、前述の犬走り（I-17）が、端部を延ばしている。それ以外に、小段は無い。南縁直下には、帯状地形（I-25）と崖下に小段（I-26）がある。

区	長さ	幅	高低差	上段
I-25	10.5	3.6	0.72	I-18
I-26	7.0	2.8～1.2	3.42	I-25

第48表 I 区遺構計測表⑤ (単位：m)

I-27は、I-18との間に小溝（I-28）を挟む。小溝は区画の仕切りと思われるが、途中で消滅する。

区	長さ	幅	高低差	上段
I-27	17.0～15.0	10.8	0.74	I-18
I-28	5.4	1.4	0.55	I-18

第49表 I 区遺構計測表⑥ (単位：m)



写真(31) 小溝（I-28）

I-27の北縁には、幅広の帯状地形（I-29）と、直下に極細帯状削平地（I-30）と極小段（I-31）がある。北斜面には、帯状地形（I-32）がある。これから下位は、崖面となる。西縁には、細長の帯状地形（I-33）がある。下位は、崖面に造成された大規模造りの造成地（J-1）となる。南縁には、幅広の帯状削平地（I-34）がある。

区	長さ	幅	高低差	上段
I-29	14.0	5.2～3.8	0.62	I-27
I-30	9.6	1.0～0.4	0.89	I-29
I-31	3.2	1.4	1.30	I-30
I-32	8.0	3.0～2.6	3.55	I-31
I-33	10.6	3.0～0.8	1.04	I-27
I-34	18.0	5.4～1.0	0.95	I-27

第50表 I 区遺構計測表⑦ (単位：m)



写真(32) I-29（東→西）

南斜面の標高49～35mの間には、細帯状削平地（I-35～38）、幅広の削平地（I-39）、小型舌状削平地（I-40）がある。

区	長さ	幅	高低差	上段
I-35	10.8	2.4～0.8	1.39	I-34
I-36	16.0	2.2～1.4	1.56	I-35
I-37	11.8	2.4～1.4	1.73	I-36
I-38	8.6	2.2	4.52	I-37
I-39	12.3	6.3～6.2	0.93	I-38
I-40	4.0	1.6	1.54	I-39

第51表 I 区遺構計測表⑧ (単位：m)



写真(33) I-36（東→西）

I-18・27は、主軸尾根・上面域における最西端の平地である。西下のK区との兼ね合いも含めて、極めて重要な区画と思われる。縄張りの位置からしても、主軸尾根の中で、本格的な「詰めの城」の役割りを担ったものと思われる（前述したが、A区にも「詰めの区画」がある）。

平地を二分するI-28は、同じく斜面を区切るI-25・34の地割が共通しており、当初からの仕切り溝であった可能性が高い。この区画には建物施設があった事は確かである。I-19（窪地）は、雨水を溜める遺構と思われる。肩部の小土塁などの存在から見て、後世の農業用溜め池ではなかろう。

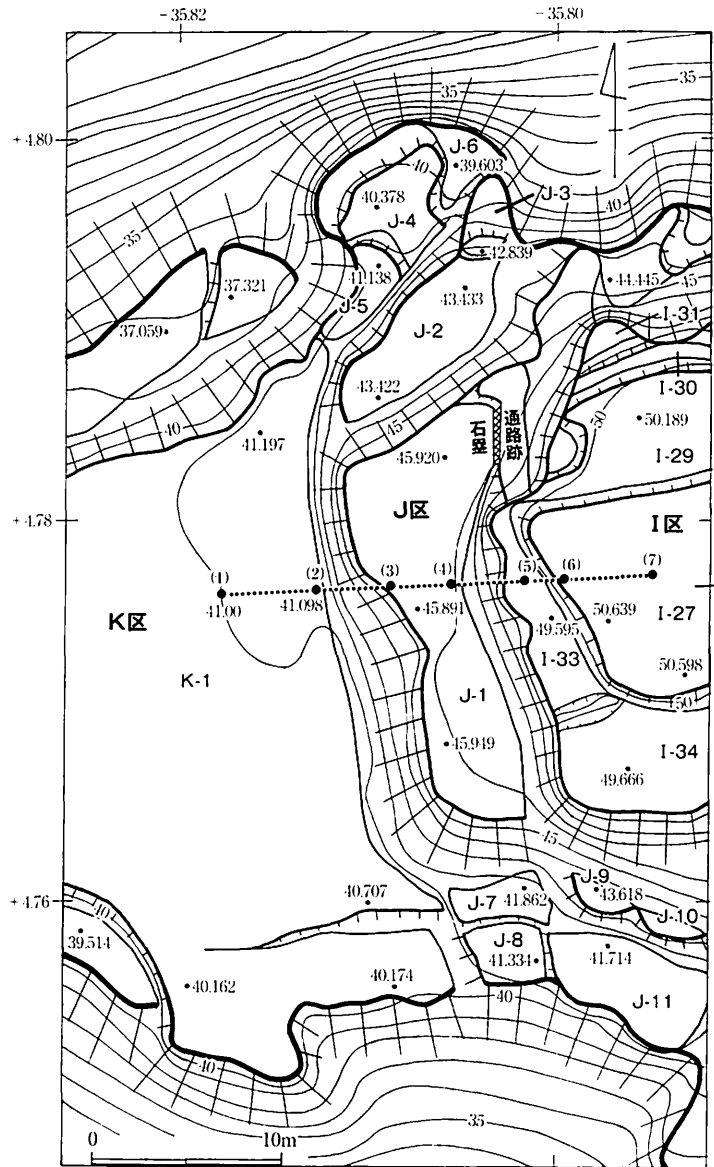
I 区の東と西における造成の大きな違いは、G 区と全く同様である。

8. J 区

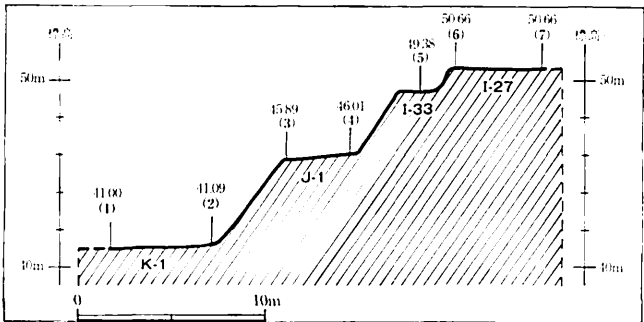
主軸尾根筋の段下がり崖面を、大規模工事によって、段状に削り出している。特に、J-1下の崖面は、削り出しが著しい。面的には、台形状に整形されているのが特徴である。この状態は、堀切5の東肩部・壁面に良く似ている。造成にこだわりがあり、同時期の工事である事が分かる。

区	長さ	幅	高低差	上段
J-1	22.0	7.2~3.0	3.70	I-33

第52表 J 区遺構計測表① (単位: m)



第57図 J 区測量図



第58図 J 区地形断面図 (西-東)

なお、この区の大規模工事は、K区が城跡内で唯一、標高の低い区画で、これに対処するための崖面工事である事は、疑いがない。

主軸尾根が急激に高さを減じる箇所の大規模工事である。岩盤が凝灰岩で、掘削工事は、やや安易であったとはいえ、難工事であった事に変わりがない。前述のように、末端尾根の低平な地形 (K区) をカバーするために、避けて通れないものであった。

中心部の J-1 は、安全工事の工夫が伺える。肩部の縁は、直線的なものにせず、山の地形に合わせて凸状態にしている。そして、崖面の崩落を防止するために I-27 との間に小段の I-33 を設けて、段掘りにしている。一方、下縁が凹形になっているのも、尾根斜面の旧地形に沿ったためであろう。さらに J-2 は、脇から J-1 を支えるための造成地と思われる。

J-1 下の崖面は、長さ22m、高低差4.80mもある。これを、さらに削り出して、外観的に台形状に整形されている。K区に侵入した敵方に大きな威圧感を与えるための方策であったと思われる。高低差のある崖面に、足掛かりが全く無い事と堅固な守りを最大限にアピールするものであった。高石垣に匹敵する防禦施設と考えられる。同じ様な工法は、前述した堀切5の東壁にも見られる。

南北斜面に小段が造成されているのは、敵方の下位からの侵入を阻止するためであろう。北では、J-3~6、南で J-7~11 である。いずれも急傾斜地に造成されている。

この区画も、防禦面で、非常に大事な区画である。

区	長さ	幅	高低差	上段
J-2	12.0	4.2～2.6	2.50	J-1
J-3	4.2	4.0	0.59	J-2
J-4	5.0	6.4～3.0	3.06	J-2
J-5	5.6	3.0～0.8	2.29	J-2
J-6	4.4	4.2～1.0	0.77	J-4

第53表 J区遺構計測表② (単位：m)

区	長さ	幅	高低差	上段
J-7	4.8	3.0～1.6	4.09	J-1
J-8	4.0	3.2～2.4	0.53	J-7
J-9	3.4	1.2	6.05	I-34
J-10	3.6	0.8	6.66	I-34
J-11	8.9	4.6～3.6	1.90	J-9

第54表 J区遺構計測表③ (単位：m)

〔崖面通路跡〕

崖面に通路のようなルート跡がある事が分かった。よく見ると、最下位には石塁の残欠もあった。この事については、後世の通り道と片付けられない一面がある。それは、もし、このJ区の崖面が、戦略的な段状の削り出しのままであったら、平時は、どうなるのかという事である。通常、堀切には木橋が架かっており、平時は通れるが、有事の際には、即、切り落とす方策がとられていた。

そこで、J区の場合も、平時には、K区との往来が出来る通路が必要であったとの結論に至った。そうでなければ、平時には、J区とK区の間が、完全に遮断されてしまう。これは縄張りのにもおかしい事になる。通路のようなルート跡は生きるとの結論に至った。有事の際は、柵などで遮断すればよいし、通路は、一部を崩せばよい。

J-1からK区を見下ろすと、有事の際に、ここから矢を放つと、極めて効果的であった事が実感できる。実際、K区を隅々まで見渡せる。K区との高低差は4.80m。これが尾根の上面I-27からでは、高低差が約9.5mに拡大する。射的距離は、短い方がよいと思われる。それに、緩衝区画としての役目もある。J区に段状地形を造成した理由は、これらであろう。その意味から、J-1は、有事の際、攻撃の要になった区画と見られる。

城は、麓集落に面して南向きの造りになっている。大手口は、後述する小谷のE区肩部である。その城構えは、地形的にも、しっかりしている。一方、築城者にとっては、城の裏側が、非常に気になる所であった。主軸尾根が急激に高さを減じて、さらに、低平な末端尾根が長く続いていた。そこでJ区の大崖面を削り出して、下位の低平区域に手を入れて、平地にしたのである。

地形図を見ると、城跡の「城平」の山は、北に標高86.5mの山、東に十町川、南に和仁川に囲まれている。したがって、西に位置する山付きの栗山地区の守りを固めれば、城跡の西端K区には、敵方が、容易に近づけない状況にはある。



写真(34) J-1 (I-33より)



写真(35) J-1 (南→北)



写真(36) 崖面・通路跡

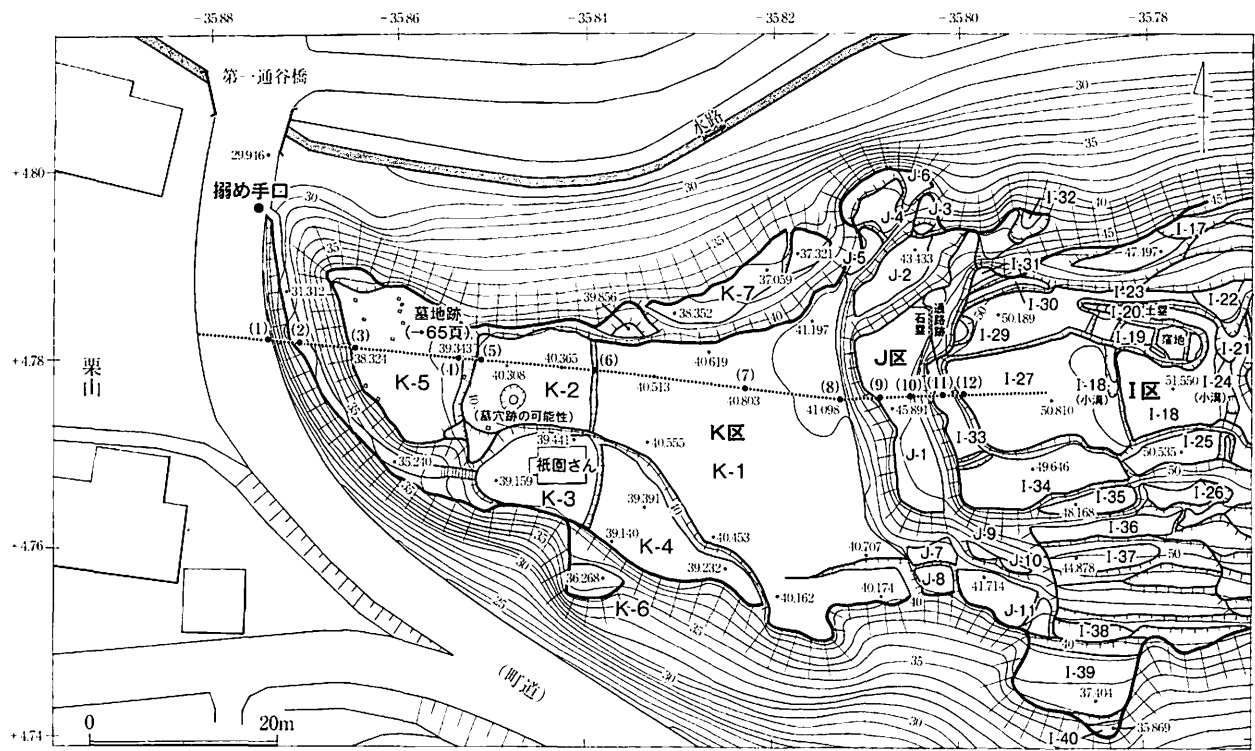
9. K区

城山の西端域（尾根筋の斜面部）を造成した区画で、西下の道路面とは、高低差が8.38mに過ぎない。縄張りのには、城の搦め手にあたるが、防禦面で、非常に弱い区画である。築城者は、この点をどのように見て、いかなる対策を講じたのであろうか。

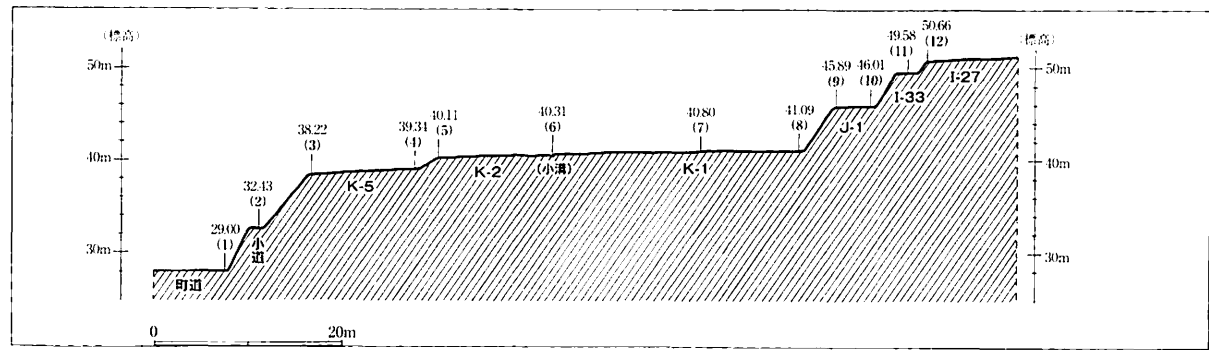
旧地形を推定すると、地形の一大変化点は、I-27の西端である事に疑いはない。尾根筋は、ここから、一挙に急斜面へ転じている。そこで、この変化点に、大きく手を入れたのが、J区である。神尾城で最大の土木工事で、段状地形のJ-1を造設した後、さらに崖面を垂直状態に削り出している。そして、緩斜面の西側下部を平地に整地したのが、K区である。

K区は、東西の長さ55m、東端39mの広さがある。西端は極端に窄まっている。但し、平地を確保するにあたって、極端な地下げは、必要なかったものと思われる。

K-1は中心区画で、建物も存在した可能性が高い。東縁の崖面は、削り出しが加わって、強烈なインパクトがある。K-2とK-1の間には、幅30cm・深さ19cmの小溝がある。西区画は、廃城後に墓地になった事が分かる。直径2.5mの円形状凹地は、墓穴跡の可能性もある。



第59図 K区全体測量図



第60図 K区地形断面図 (西-東)

区	長さ	幅	形状	高低差	上段
K-1	25.4	39.0 (東縁) 21.9 (中央) 10.0 (西端)	台形	4.80	J-1
K-2	12.0 (北縁) 13.8 (南縁)	10.0 (東縁) 9.8 (西縁)	長方形	0.15	K-1

第55表 K区遺構計測表①

(単位：m)

K-3は、K-2の南下にある。方形状で、「祇園さん」と呼ばれる拝殿がある。氏子は西下の集落。K-4は、K-1の南下にある。K-3は、この区画の西側を少し掘り下げたものである。

K-5は、K-2の西下にある。三角形状で、かつては墓地であったが、墓終いがなされている。

K-3・4の南下にK-6があり、K-1の北下にK-7がある。

区	長さ	幅	高低差	上段
K-3	13.0	9.0 (東縁) 2.0 (西縁)	0.92	K-2
K-4	20.6	9.4 (西端) 2.4 (東端)	1.16	K-1
K-5	24.8	7.2～3.8	0.97	K-2
K-6	6.2	最大8.0	2.87	K-4
K-7	20.5	4.5～1.0	2.27	K-1

第56表 K区遺構計測表②

(単位：m)



写真(37) K-1と崖面 (南→北)



写真(38) K-4 (西→東)

〔城跡の西端域〕

城跡が築かれた「城平」の山は、東西に主軸尾根の向きがある。全長418m。幅が東端で最大230m、西端で15mに窄まる。K区は、この最も西端域にあり、城の裏玄関（搦め手）になる。区画の東端は、主軸尾根が急激に高さを減じる箇所、冒頭に述べた様に、西端の平地K-5と、直下・道路との高低差は8.38mに縮まる。B区・高城の山頂は、集落との高低差が43mなので、5分の1ほどに、高さが減じる事になる。それでもK区は、南北両縁下が崖面なので、完全に無防備な区画ではない。

K区は、大手口から遠く離れた城の裏側であるが、れっきとした城内である。縄張りとしての用途は、敵方が、万一、このK区側に廻り込んだ場合、ここで、白兵戦により、城内・東への侵入を阻止する役目を荷ったと思われる。その意味から、この区画には、それに見合う防禦施設と考えられる。そして前述したように、敵方を東の高台（J区）から、一斉に狙い打ちしたのであろう。

K-3に建立されている神社は、「祇園さん」と呼ばれている。廃城後の建立であろうか、よく分からない。

「祇園さん」神社から石段があり、その下から搦め手道がある。新しい道に思えるが、地形的に見て、ここしか城道は考えられない。山の斜面の岩盤をカットしたもので、道幅1～2mと非常に狭い。非常時は、登り口に城門も設置されていたはずである。

廃城後、K-5は、江戸時代から墓地になった。現在は、墓終いされて墓石が散乱している。別途、報告するが（→65頁）、確認できた最も古い墓碑は、宝永三年（1706）で、次いで享保元年（1716）である。参考までに、B区・B-19の古川墓地は、最古の墓碑が、元禄十二年（1699）である。墓所も城跡地の利用の一つである。

10. D区

北のB-9下から、南東へ延びる段落ちの派生尾根である。鞍部（B-34）が括れて、徐々に幅広くなるために、長靴の様な地形をしている。区内は、尾根筋が低平であるために、全体的に小丘陵の景観を呈する。標高54.70mの山頂には、三角形の小平場（D-1）があり、段下りのD-2が、北を除く三方から取り囲んでいる。整地の度合いは非常に高く、凝灰岩の岩盤を大規模に造成している。地下げによって平地が生じているが、表土の厚さは数cmに留まる。一方で、山頂周囲の法面は、粗い削り落としに終わっている。実用的な区画で、複数の建物が存在したと思われる。南の最下部では、高畑地区の集落と繋がっている。

〔中心部〕

D区・山頂の標高は、B区の高城よりも約8m低いが、平地面積が遙かに広い。D-1・2の南直下には、D-10②（細帯状削平地）を挟んで、D-11の大型・帯状削平地が造成されている。削り落とされた崖面の高さは、D-2とD-10②が1.90m、D-10②とD-11が2.4mで合計4.30m、全長32mの第17崖線となる。

区	長さ	幅	高低差	上段
D-1	12.0	10～5.0	—	—
D-2	31	22.5～5	1.16	D-1

第57表 D区遺構計測表①（単位：m）

崖線	区	長さ	高低差	上段
第17	D-10②	21.0	1.90	D-2
	D-11	11.0	2.40	D-10②

第58表 D区崖線計測表（単位：m）



第61図 D区 南側測量図

第62図 D区地形断面図（南西―北東）

〔西斜面〕

尾根筋の西斜面は、直下に現道と谷部（E区）がある。斜面には、3段の段状地形がある。この内、最上段のD-10①は、南下のD-10②からの延長部で、平場直下の犬走りと思われる。

区	長さ	幅	高低差	上段
D-10①	23	3.0～1.5	2.14	D-2
D-3	36.0	9.0～3.5	1.15	D-10①
D-4	19.5	4.0～1.5	1.89	D-3

第59表 D区遺構計測表② (単位：m)

〔D区の張り出し尾根（南西端の区画）〕

D-8・9は、江戸時代後期（寛政九年：1797年）に、神尾山墓地になっている。現況から、この区画は、城時代にも、墓地造営の呼び水となった造成地があったと考えられる。D-8からは、現道へ通じる石段が下がっている。

区	長さ	幅	高低差	上段
D-5	16.5	9.0	1.04	D-11
D-6	16.0	4.0	2.17	D-5
D-7	11.0	7.0～2.0	1.46	D-5
D-8	14.0	12.0	0.56	D-7
D-9	6.5	4.0～2.5	1.75	D-5

第60表 D区遺構計測表③ (単位：m)

頂きの南直下にあるD-11は、斜面を大規模に造成したものである。D-2・10②との境をなす崖面で、急峻に削り落とされている。上面域の平場と連動した区画で、ここも建物が存在した可能性がある。

区	長さ	幅	高低差	上段
D-10②	21.0	2.0～0.5	1.90	D-2
D-11	46.5	11.5～1.5	2.40	D-10②
D-12	26.0	4.5～2.5	1.97	D-11

第61表 D区遺構計測表④ (単位：m)

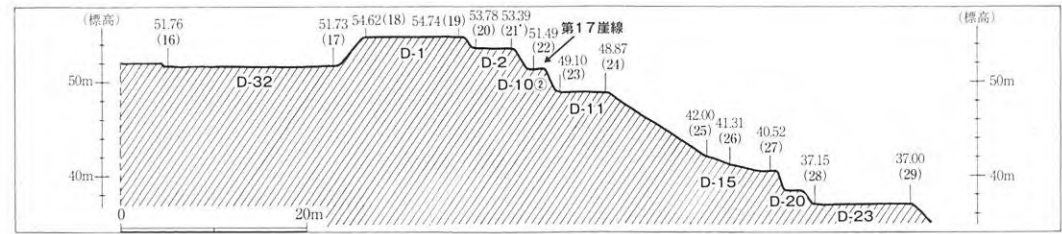


写真(39) 神尾山墓地 (D-8)



写真(40) D-11と第17崖線

D-13～16の肩部は、大きな自然の崖（これまでの第1～17の崖線とは異なる）で、D区における地形の一大変化点である。肩部（D-12）との高低差は4.89～8.1mに達する。造成地では、大型のD-13が目立っている。ここまでがD区を中心域である。



第63図 D区地形断面図（北西－南東）

〔南下周辺部〕

D-11・12の直下に、D-13の帯状削平地（長さ41.5m・幅7.5m）があり、東へ5つの小段群（D-14～18）が横並びにある。全長66m。

D-13の直下にD-21の細い帯状削平地（長さ26m・幅4.5～1.5m）があり、これから東へ2つ横並びする（D-19・20）。全長45m、上段との高低差1.06m。さらに、この直下にD-22の細帯状削平地（長さ16m・幅2.5～1.0m）が、東にD-23の大型削平地がある。全長42m、上段との高低差1.75m。西下には、ヘアピンカーブの現道が通り、東端に細帯状削平地（D-24）がある。

最下位は、大型の削平地が東から西へ4つ並んでいる（D-28～31）。全長83m。この下位は、民家の敷地となる。D区の最大の特徴は、集落に接する事である。

区	長さ	幅	高低差	上段	自然崖
D-13	41.5	7.5	6.42	D-12	○
D-14	5.5	3.0	4.40	D-12	○
D-15	13.0	7.0～1.5	7.56	D-11	○
D-16	6.0	3.0～1.5	8.07	D-11	○
D-17	11.5	4.0～1.0	0.79	D-15	
D-18	8.0	5.5	1.63	D-16	
D-19	10.0	3.5～2.0	3.38	D-14	○
D-20	7.0	2.5	2.08	D-17	
D-21	26.0	4.5～1.5	1.06	D-13	
D-22	16.0	2.5～1.0	1.21	D-21	
D-23	25.5	16.0～2.0	1.29	D-20	
D-24	27.0	4.5～2.0	1.44	D-23	
D-25	23.5	3.5～1.0	1.71	D-21	
D-26	8.5	5.0～3.0	0.74	D-25	
D-27	14.0	9.0	1.84	D-26	
D-28	25.0	17.0～3.0	2.24	D-24	
D-29	23.0	8.5～6.0	1.04	D-28	
D-30	22.5	7.0～5.5	1.00	D-29	
D-31	15.5	10.5～7.0	0.65	D-30	

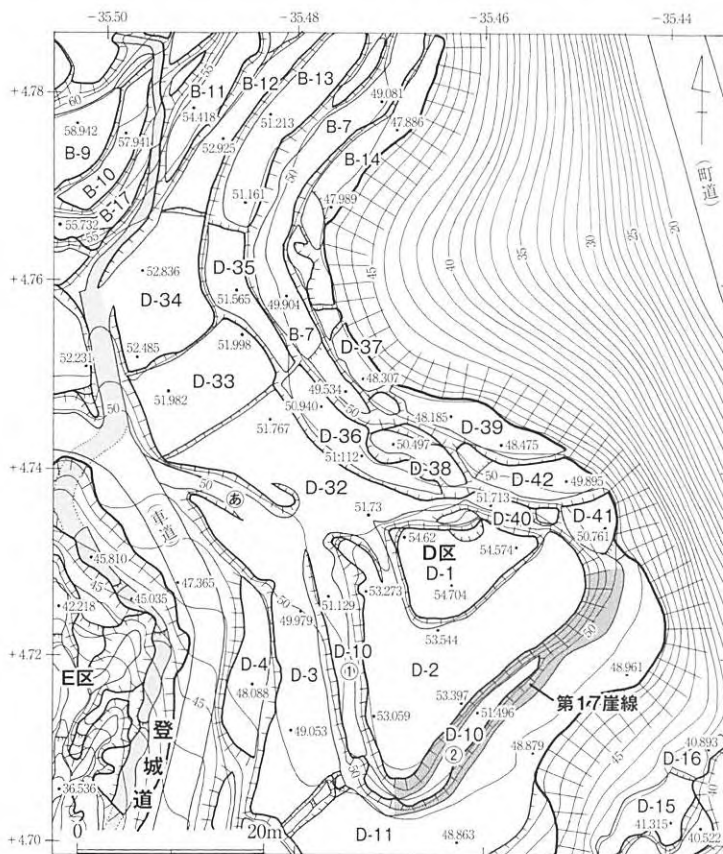
第62表 D区遺構計測表⑤ (単位：m)



写真(41) D-13と崖面

〔D区の北鞍部〕

派生尾根筋は、B-9区の南東下から延びているが、通常のものとは形態が大きく異なる。ここでは、元々、上面域が平らに近い状態で、後世、さらに、押し馴された可能性がある。付け根部分のD-32を例にすると、現状では、長方形の平地で、長さ24m、幅14～7m、D-1との高低差2.89m、北側のD-33とは高低差+0.22mで、鞍部では、この箇所が最も低い。この箇所に堀切の埋没が考えられるが、不思議な事に、西縁の崖面に、それらしき痕跡は見当たらない。ここが尾根続きとは、到底、思えないが。



第64図 D区 北側鞍部測量図

【注①】 戦の時、この郭から東下（現：水田）へ矢を放ったので、「矢落とし」という小名が付いているという。実戦にまつわる伝承である。

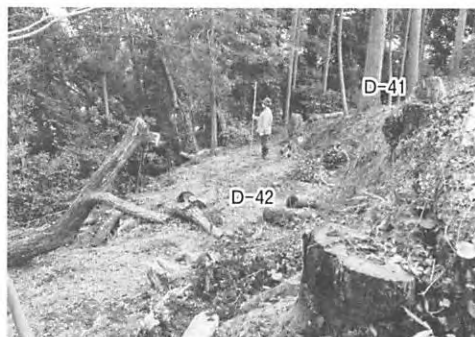
【注②】 D-3の北端に小溝がある。これは現代の掘削路で、城跡の遺構ではない。以前、この地を訪れた見学者のリーダーが「これは、この郭へ上がる進入路④そのものだ」と話していたのを小耳に挟んだので、今回、この事を報告書に明記して欲しいとの申し入れがあった。

【注③】 D-34とB-17の高低差は2.90m。これはB区の東縁とD区・派生尾根の高低差である。いわゆる段下がりの派生尾根で、前述の様に地形的にも堀切の設置が求められる箇所である。

※ 【注①】・【注②】は、共に地権者の古川明子さんの示唆である。

区	長さ	幅	高低差	上段
D-32	24	14～7.0	0.22	D-33
D-33	15.0	13.0～12.0	0.50	D-34
D-34	13.5	10.0～5.0	2.90	B-17
D-35	17.0	4.0～1.5	0.92	D-34
D-36	21.0	4.0～1.0	0.83	D-32
D-37	7.5	2.0～1.5	1.23	B-7
D-38	11.0	3.5～2.0	0.62	D-36
D-39	20.0	4.0	2.31	D-38
D-40	8.0	2.0	2.86	D-1
D-41	5.5	5.5	2.24	D-2
D-42	17.5	4.0～1.05	0.87	D-41

第63表 D区遺構計測表⑥ (単位：m)



写真(42) D-42 (西→東)

11. E区

東側のD区と、西側のC区に挟まれた小谷である。城跡の斜面が、外部に大きく口を開いており、大手の登城道は、この区画にあったと考えられる(前述したが、堀め手の道は、K区の西端にある)。

谷底に残る水路(E-1)は、全長85m。標高44m～24mを下っている。幅は0.5～3.0m、最下部で6.0mに広がる。平時には「通路」に利用されて雨天時に「水路」となる水路兼道路とも思えるが、谷底は小規模な地隙の様相を呈しており、可能性は、低いと見る。

〔東肩部〕

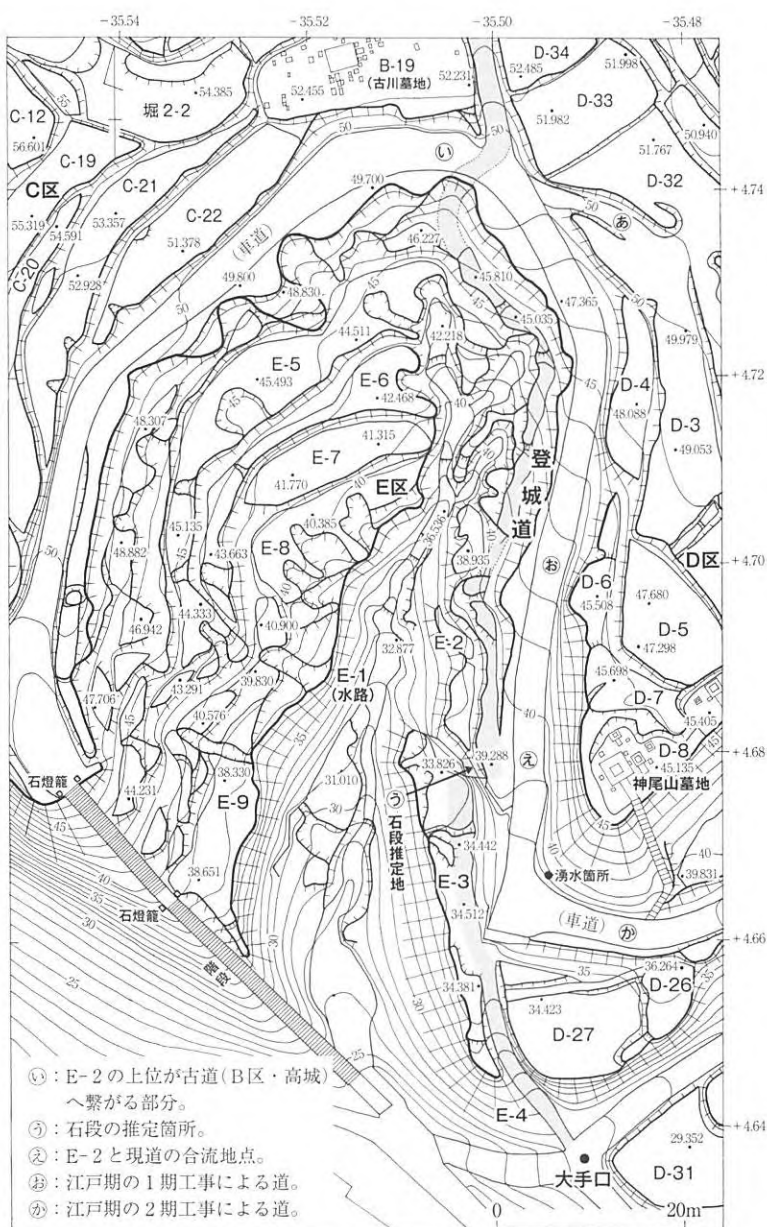
標高47～25mの間が急傾斜地で、幅は上位で7m、下位で15m。この区画に、登城道の存在が考えられる。真上を現道が通ってる。

〔登城道の考察〕

E-2は、全長63m。標高46～39mを下っており、現道との高低差は、上位で2.33m。下位で車道と接する。幅は上位で2～1m、中位で2.5～1.5m。下位で3～1.5m。「く」の字をした細帯状削平地で、水路との間に小段を挟んでいる。



写真(43) E-2 (登城道)



第65図 E区全体測量図

E-3は、E-2の南下位にあり、標高34～32mを下っている。幅広の帯状削平地で、全長38.5m。先端から11mの所に段差があり、高低差0.62m。幅広の帯状削平地で、先端で最大6.0m、端部で1.5mに窄まる。

E-4は、E-3の末端近く10mの所で、合流している。幅1.5～1.0m、現況は、階段である。

問題点は、E-2とE-3の接点で、繋がらない事である。両者の間には、5.46mの高低差が生じている。しかし、間に㊦の小段（長さ9m、幅3m）を挟んでいるのがポイントである。この段差面に積み石を持ってくれば、問題点は解決する。E-2～3～4で、登城道を構成していた事は、間違いないと思われる。

〔谷部の西肩部〕

標高49～37mの間は、緩斜面となっている。幅は、谷部の中央部で、32mもある。この区画に、幅広の帯状削平地（E-5～9）がある。

区	長さ	幅	高低差	上段
E-5	33.5	54.5	4.31	現道
E-6	32.5	7.0～1.0	2.04	E-5
E-7	21.0	7.0	1.15	E-6
E-8	21.0	8.0～5.0	1.39	E-7
E-9	25.5	6.5～4.0	4.50	E-5

第64表 E区遺構計測表 (単位：m)

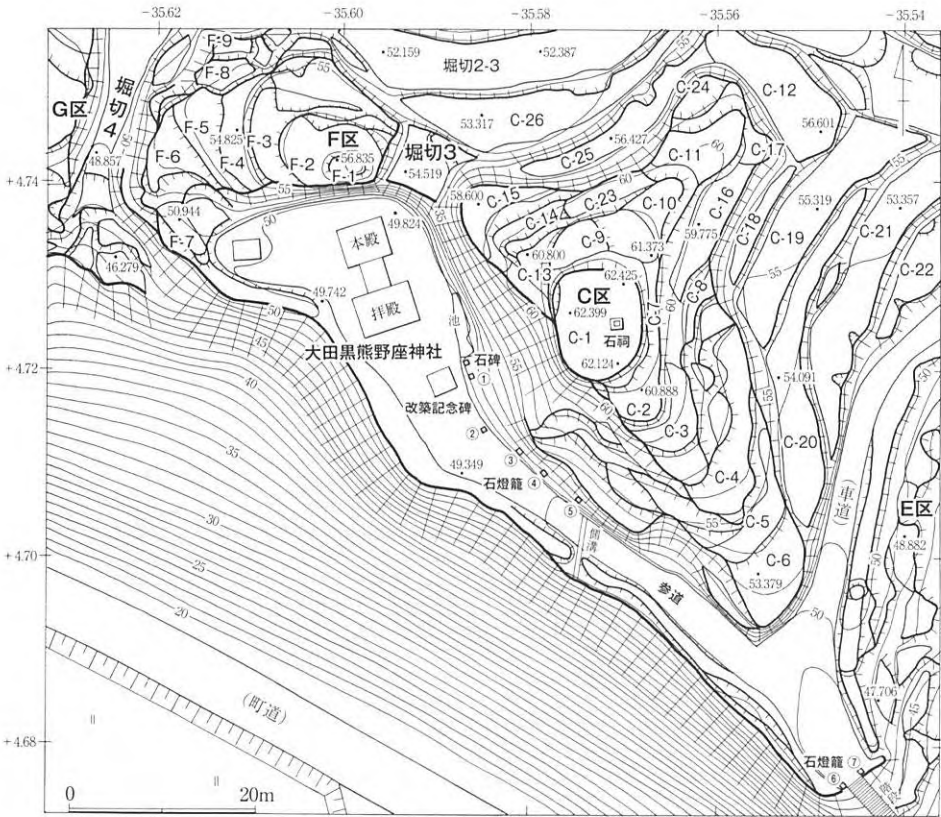
12. 大田黒熊野座神社

C区・F区の西下に、神社が勧請されている。土地利用の内訳は、北半分が本殿・拝殿・脇殿で、南半分が参道である。創立の由来は、拝殿前の熊野宮改築記念碑に記されている。
「新築 元禄十三年（1700）二月二十七日 上棟」
「改築 昭和四十五年二月一日 着工 四月三日 完成」

神社の境内は、元々、城時代に大型の帯状地形があったと推定される。これに、後世、手が加えられたのであろう。境内の広さと参道の長さ・広さから、何もなかった所からの造成は考え難い。縄張りを後世に拡張したものと思われる。



写真(44) 大田黒熊野座神社



第66図 大田黒熊野座神社境内測量図

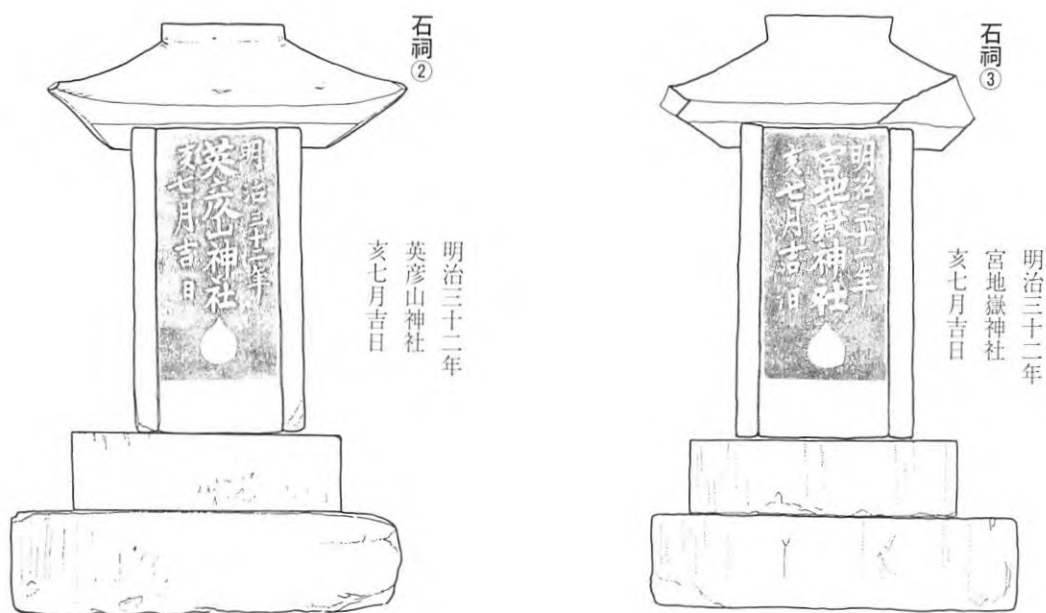
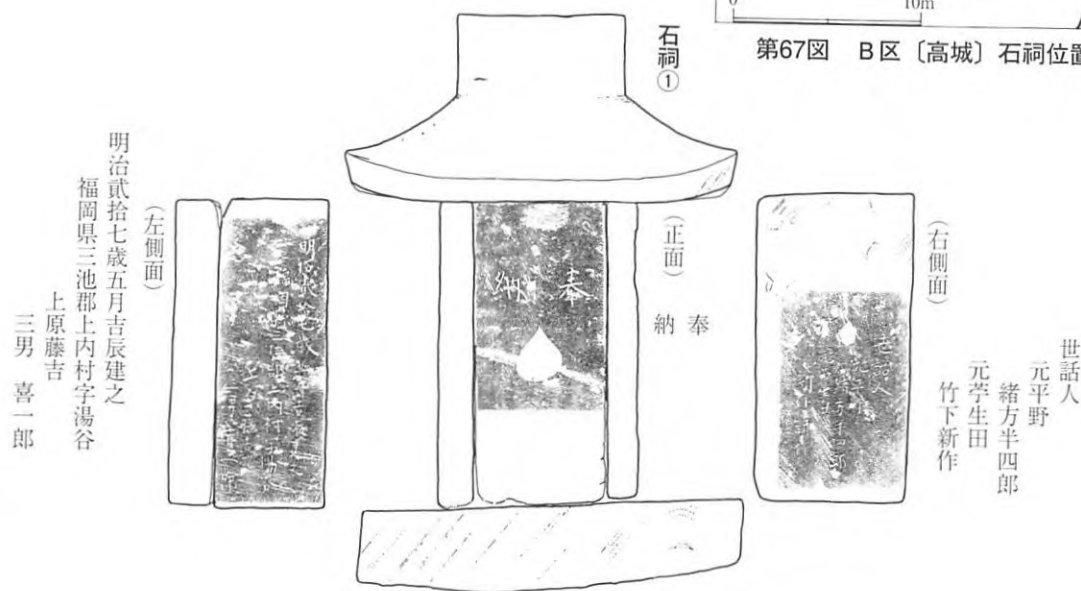
第2節 城跡の石造物調査

1. B区〔高城〕

高城の最上段に位置する。城時代も、何らかの神を祀った場所であろうと推定される。

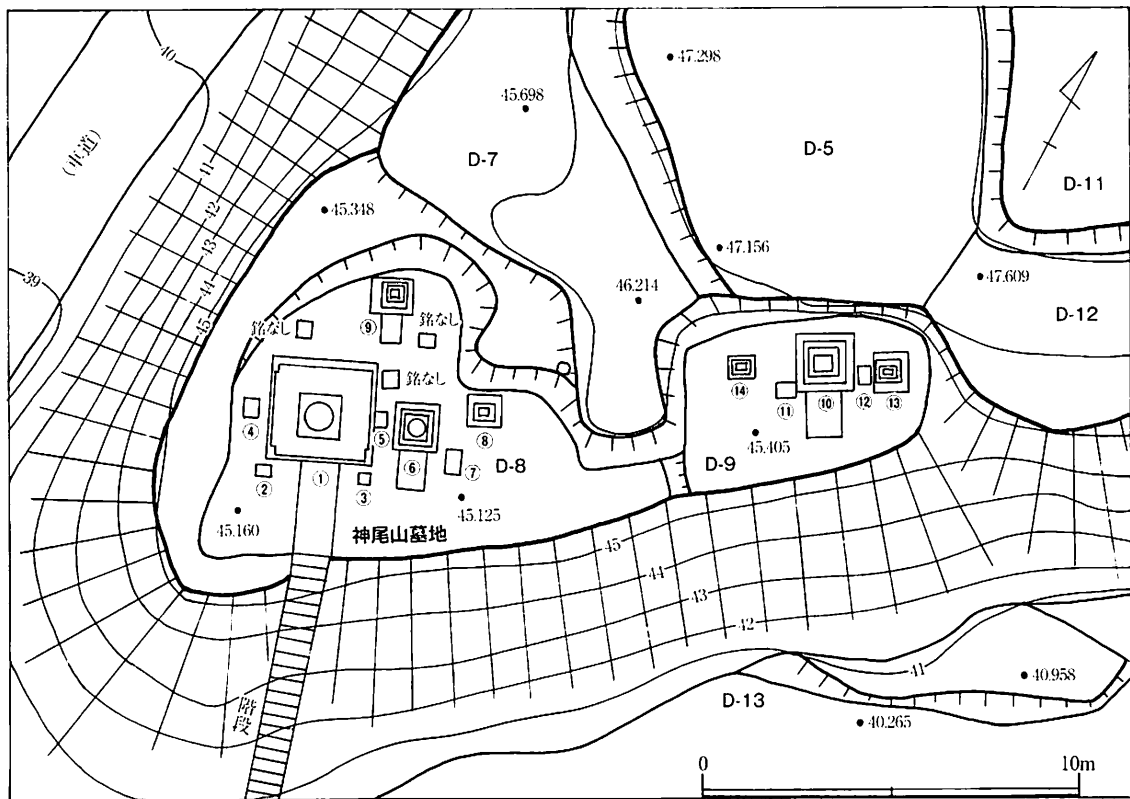


第67図 B区〔高城〕石祠位置図



第68図 B区〔高城〕石祠実測図

2. 神尾山墓地（77頁参照 歴史調査の楽しみ方「神尾城跡16」広報なごみ令和2年2月号）



第69図 神尾山墓地 石塔位置図

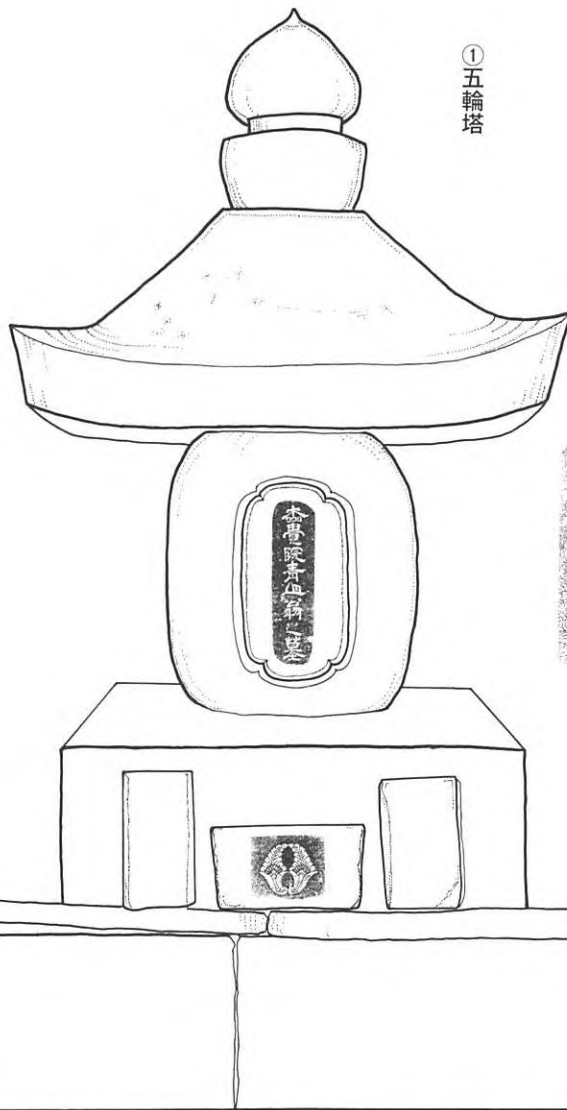
番号		銘	年号	西暦
①	五輪塔	本覚院青山翁之墓 (吉弘加左衛門正直)	寛政九年	1797
②	石燈籠	三男垂水勝清	寛政九年	1797
③	石燈籠	吉弘正業	寛政九年	1797
④	石燈籠	田辺貞貫	寛政十年	1798
⑤	石燈籠	田辺頼直	寛政十年	1798
⑥	五輪塔	真覚院妙壽婦人之墓 (正直継室)	文政四年	1821
⑦	石燈籠	吉弘正雄 吉弘喜生 中村正常 山形正明 垂水勝政	文政四年	1821
⑧	石塔	一字一石之塔 (真覚院書写)	寛政十年	1798
⑨	墓碑	山形君直哉翁之墓	弘化二年	1845
⑩	墓碑	吉弘加左衛門正業之墓 (正雄謹建)	享和二年	1802
⑪	石燈籠	吉弘正壽	寛政十一年	1799
⑫	石燈籠	吉弘正雄	寛政十一年	1799
⑬	墓碑	厚深院妙信日了幽儀 (吉弘正直室・正業母)	享和二年	1802
⑭	墓碑	放光文思 童子 (吉弘正業三男 兵一)	寛政七年	1795

第65表 神尾山墓地 石塔一覧表

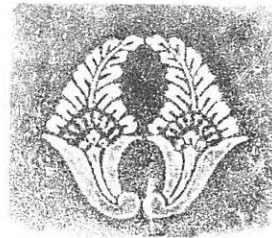
※他、銘なしの石塔が3基。

本覺院青山翁之墓

(正面) 本覺院青山翁之墓



①五輪塔



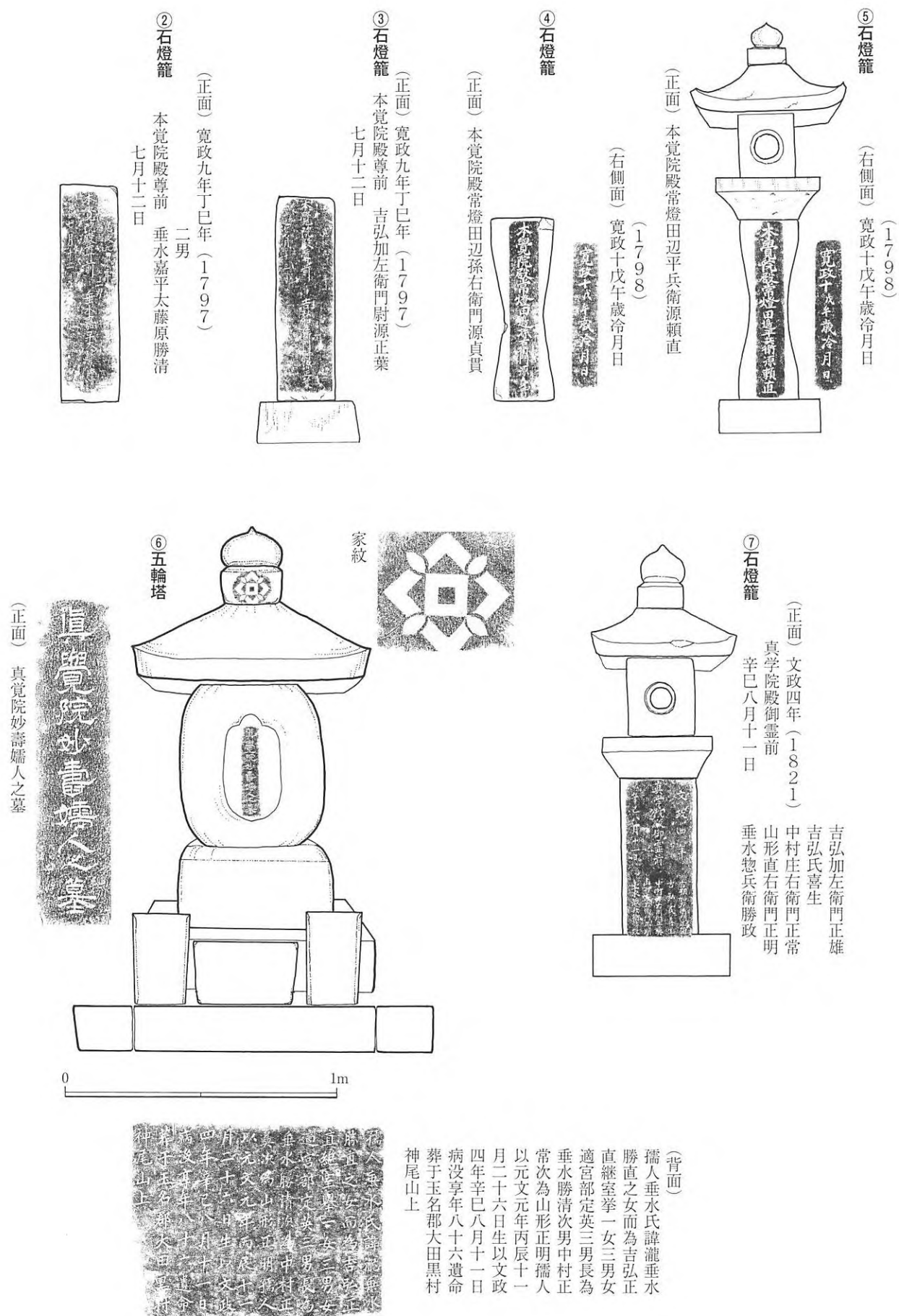
(家紋) 抱き杏葉 (だきぎようよう) 大友氏の家紋

0 1m

第70図 神尾山墓地 石塔実測図①

吉弘加左衛門尉源正直少
字金治賜祿三百五拾石賜
邑三玉名郡大田黒西照寺
益城郡上郷地世居大田黒
享保十七年壬子十一月十
一日誕于地長為騎隊老致
仕號青山寛政九年丁巳三
月十二日卒壽六十有六常
言我死則座于神尾山上而
勿移于他所卒後嗣奉遺
命葬于此永鎮焉

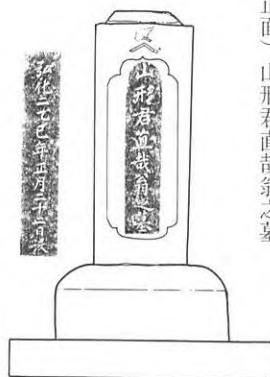
(背面)
吉弘加左衛門尉源正直少
字金治賜祿三百五拾石賜
邑三玉名郡大田黒西照寺
益城郡上郷地世居大田黒
享保十七年壬子十一月十
一日誕于地長為騎隊老致
仕號青山寛政九年丁巳三
月十二日卒壽六十有六常
言我死則座于神尾山上而
勿移于他所卒後嗣奉遺
命葬于此永鎮焉



第71図 神尾山墓地 石塔実測図②

⑨ 墓碑

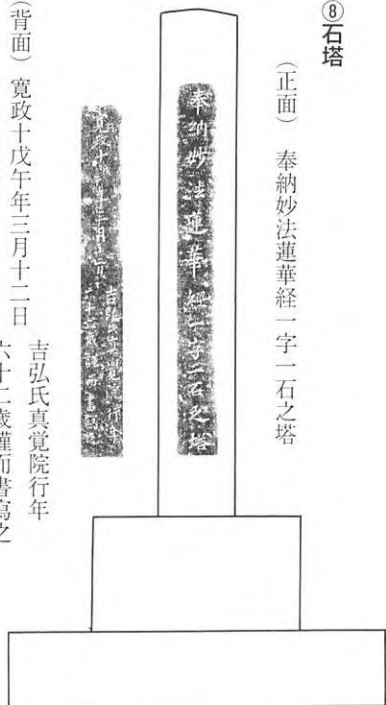
(正面) 山形君直哉翁之墓



(背面) 弘化二乙巳年正月二十二日没
(1845)

⑧ 石塔

(正面) 奉納妙法蓮華經一字二石之塔



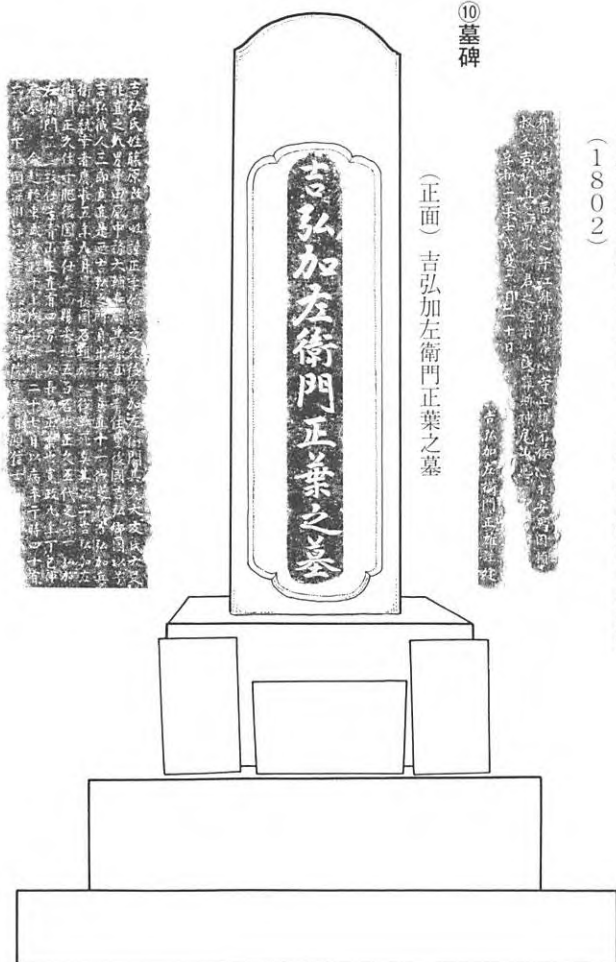
(背面) 寛政十戊午年三月十二日
(1798) 吉弘氏真覺院行年六十二歳謹而書寫之

⑩ 墓碑

(背面)

智積君既没而葬之于江都深川浄心寺正雄不佞心未安馬因頼叔父吉弘直記而取 君之遺骨以改葬斯神尾山也
享和二年壬戌夏六月二十日 吉弘加左衛門正雄謹建
(1802)

(正面) 吉弘加左衛門正葉之墓

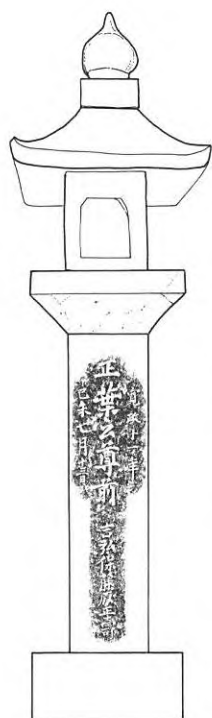


(左側面)

吉弘氏姓藤原改旧姓諱正葉始熊之丞後改加左衛門其先大友氏大又能宜之九男号田原中務大輔泰広其孫貞直者住豊後国吉弘郷因以号吉弘藏人三即貞直是遇吉弘之所自出者也貞直十一代之孫吉弘加左衛門統幸者慶長五年九月豊後国石垣原之役戰死矣其次子吉弘加左衛門正久住于肥後国奉仕矣而賜采地五百石也正久五代之孫吉弘加左衛門正直致仕号青山正直有四男一女長乃正葉也寛政九年丁巳仲春奉 命赴於東武寛政十年戊午二月二十七日以病卒于時四十有六歳葬下総国深川浄心寺法諡號智積院道覚日顯信士

0 1m

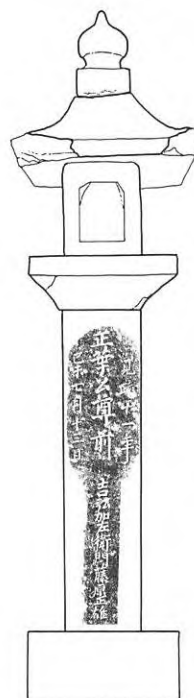
第72図 神尾山墓地 石塔実測図③



⑪石燈籠

(正面)

寛政十一年(1799)
正葉公尊前 吉弘保藤原正壽
己未七月十三日



⑫石燈籠

(正面)

寛政十一年(1799)
正葉公尊前 吉弘加左衛門藤原正雄
己未七月十三日



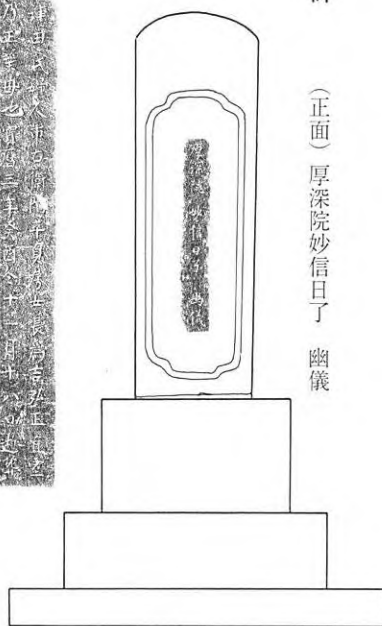
(左側面)

津田氏婦人市右衛門卒貞房女長為吉弘正直室
乃正葉母也宝曆三年癸酉十一月十八日逝葬
于菊地郡河原今去享和二壬戌年五十年慈孫正
雄奉詞大父遺命遷神尾山上矣

⑬墓碑

(正面) 厚深院妙信日了

幽儀



⑭墓碑

(正面)

寛政七乙卯年(1795)
放光文思 童子
十月二日



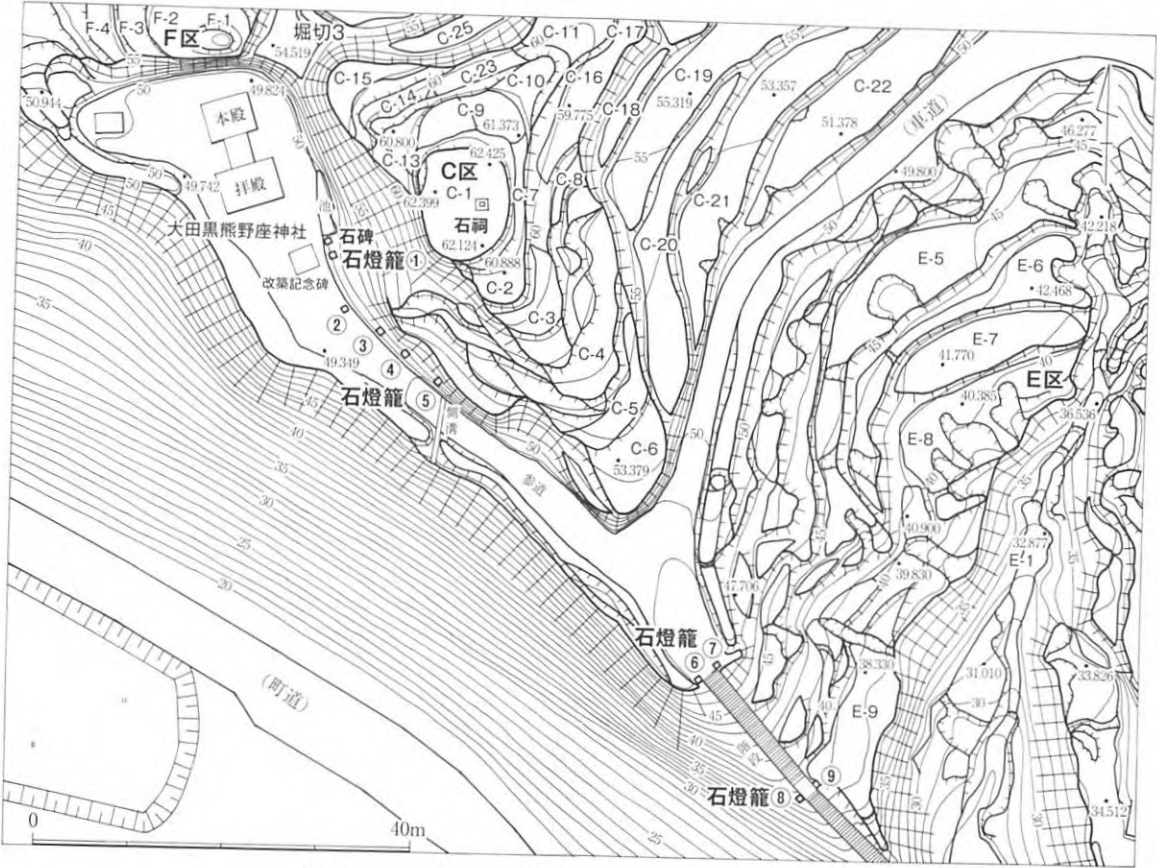
(左側面)

吉弘加左衛門源正葉
三男兵一

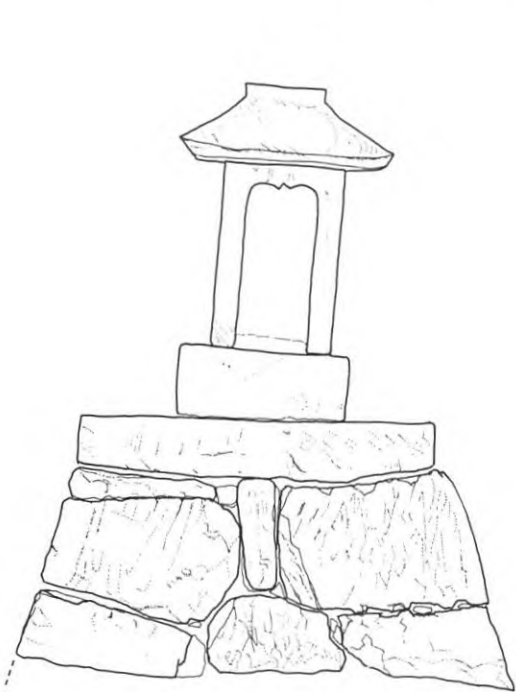
0 1m

第73図 神尾山墓地 石塔実測図④

3. C区 (C-1)・大田黒熊野座神社



第74図 C-1・大田黒熊野座神社 石造物位置図



第75図 C-1 石祠実測図



石碑

神業

阿南猿田彦太神

正徳三癸巳年(1713)

二月吉日

鎮安

古川吉左衛門尉

同 玄宗

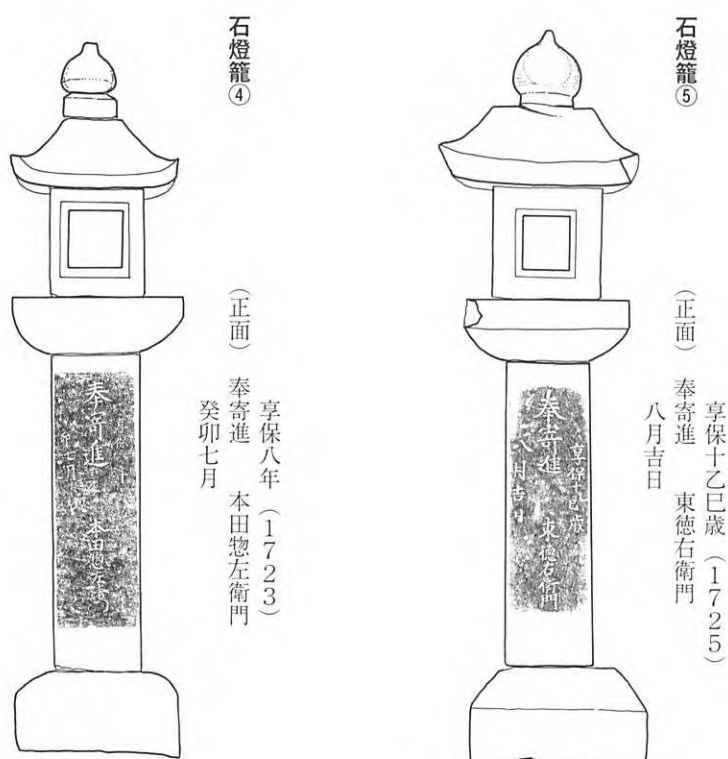
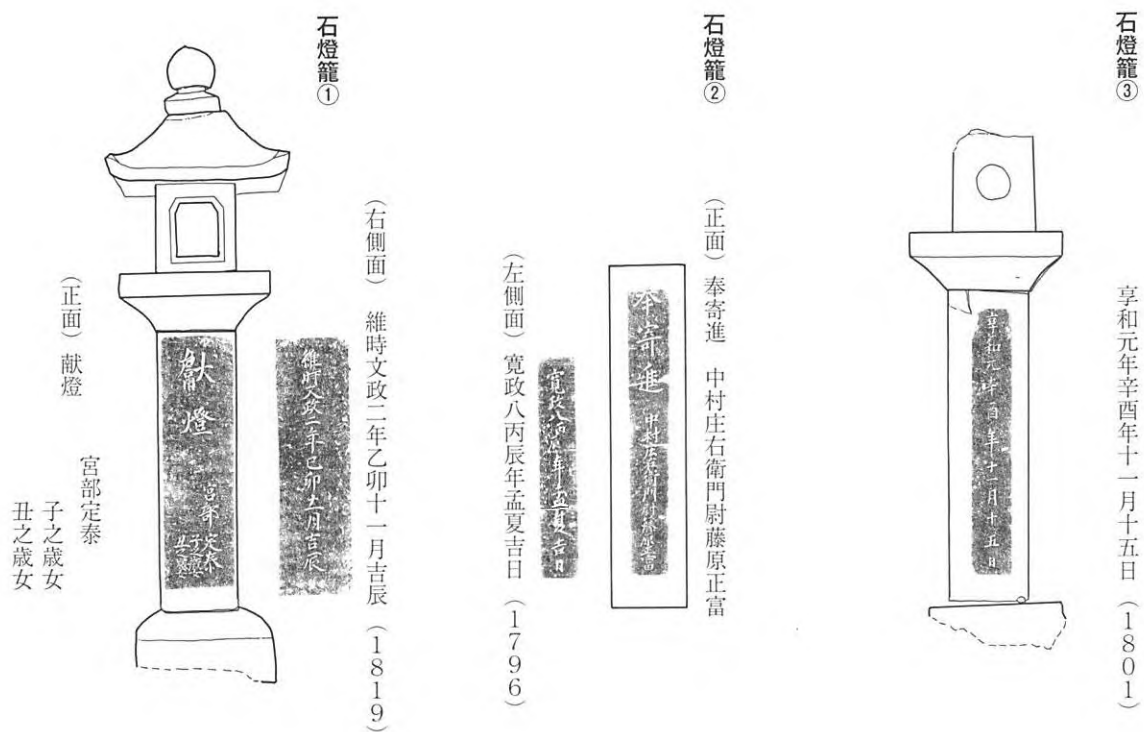
同 平右門尉

上津原村

古山仁右門尉

古閑記内尉

第76図 神社境内 石碑実測図



番号	年号	西暦
①	文政二年	1819
②	寛政八年	1796
③	享和元年	1801
④	享保八年	1723
⑤	享保十年	1725
⑥	天明四年	1784
⑦	寛政七年	1795
⑧	天明四年	1784
⑨	天明二年	1782

第66表 石燈籠 年代表



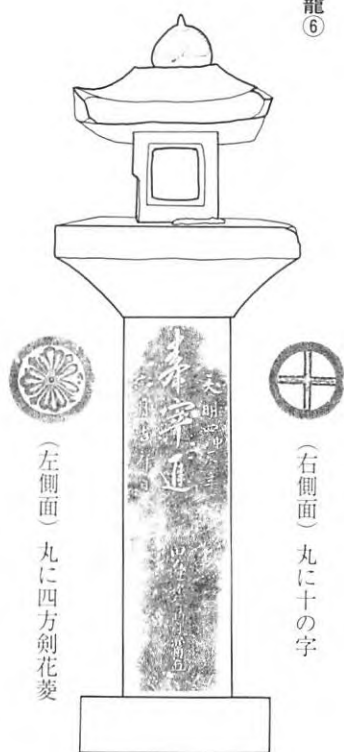
第77図 神社参道北壁 石燈籠実測図

石燈籠⑦



(正面) 寛政七乙寅年(1795)
奉寄進 古川氏
七月吉祥日 虎力嶋
伊三次

石燈籠⑥



(正面) 天明四甲辰年(1784)
奉寄進 田邊孫右衛門尉源頼直
六月吉祥日

石燈籠⑨



(正面) 天明二癸寅天(1782)
奉寄進 石燈籠 牛馬才右衛門
十一月吉日 父子

石燈籠⑧

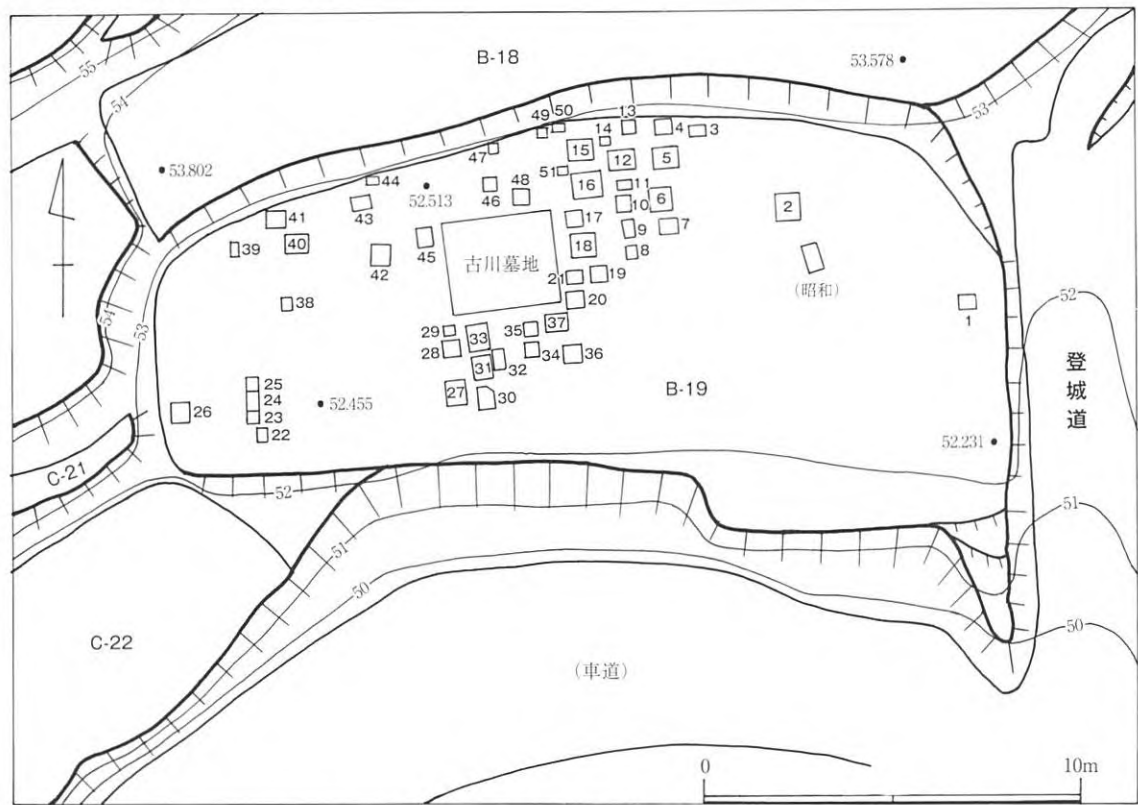


(正面) 天明四年(1784)
奉寄進 黒原宇平
甲辰三月吉祥日



第78図 神社参道石段 石燈籠実測図

4. B区 (B-19) 古川墓地



第79図 B-19 (古川墓地) 墓碑位置図

番号	刻年	西暦	番号	刻年	西暦	番号	刻年	西暦
1	慶応二年	1866	16	明治24年	1891	31	明和八年	1771
2	明治29年	1896	17	—	—	※32	享保五年	1720
3	文化四年	1807	18	明治10年	1877	※33	天明八年	1788
4	文政六年	1823	19	文政六年	1823	※34	正徳三年	1713
5	文政十年	1827	20	文化十二年	1815	※35	享保七年	1722
6	万延元年	1860	21	—	—	36	宝暦六年	1756
7	天保五年	1834	22	—	—	※37	寛保二年	1742
※8	延享二年	1745	23	—	—	※38	享保九年	1724
※9	寛保元年	1741	24	—	—	39	元禄十三年	1700
※10	享保十五年	1730	※25	元禄十五年	1702	40	明治5年	1872
※11	享保二十年	1735	※26	元禄十二年	1699	※41	正徳二年	1712
12	弘化三年	1846	27	—	—	42	明治20年	1887
13	文化元年	1804	※28	享保八年	1723	43	明治5年	1872
14	—	—	29	享和三年	1803	44	享保六年	1721
15	明治38年	1905	30	享保十六年	1731	45	慶応二年	1866
						46	文化八年	1811
						47	享保八年	1723
						48	文化元年	1804
						※49	享保十二年	1727
						※50	享保十八年	1733
						51	文化三年	1806

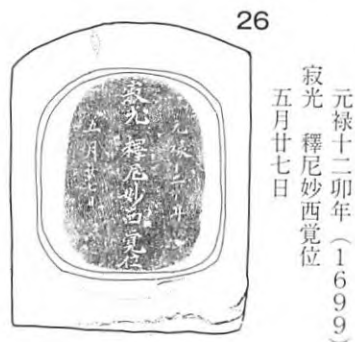
(注1) ※は拓本掲載

(注2) —は劣化で刻年の判読不能

第67表 古川墓地 墓碑年代表

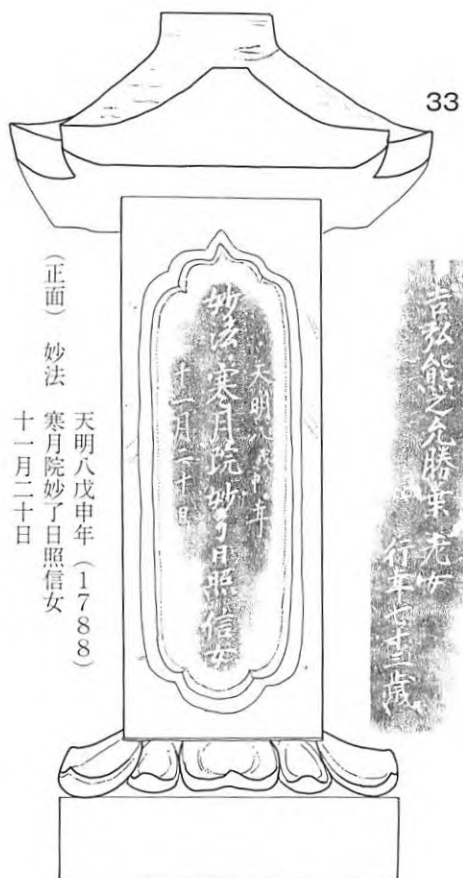


写真(45) 古川墓地



0 50cm

第80図 B-19墓碑実測図①



(正面) 妙法
天明八戌申年 (1788)
寒月院妙了日照信女
十一月二十日

吉弘熊之允勝葉 老女
行年七十三歳

(右側面) 吉弘熊之允勝葉 老女
行年七十三歳



寅 六月三日

壬 享保七年 (1722)
釈尼妙閑不退位



享保九甲辰年 (1724)
釋教順
九月八日



(正面) 一元
寛保二壬戌年 (1742)
釋道閑靈
十月二十二日

(右側面) 俗名古川吉左右門



正徳二天 (1712)
一元 釋教円泉
七月八日



享保十二未丁 (1727)
一元 釈了意
二月九日 俗名爲助



享保十八癸丑天 (1733)
飯寂釈了夢
七月廿三日

0 50cm

第81図 B-19墓碑実測図②

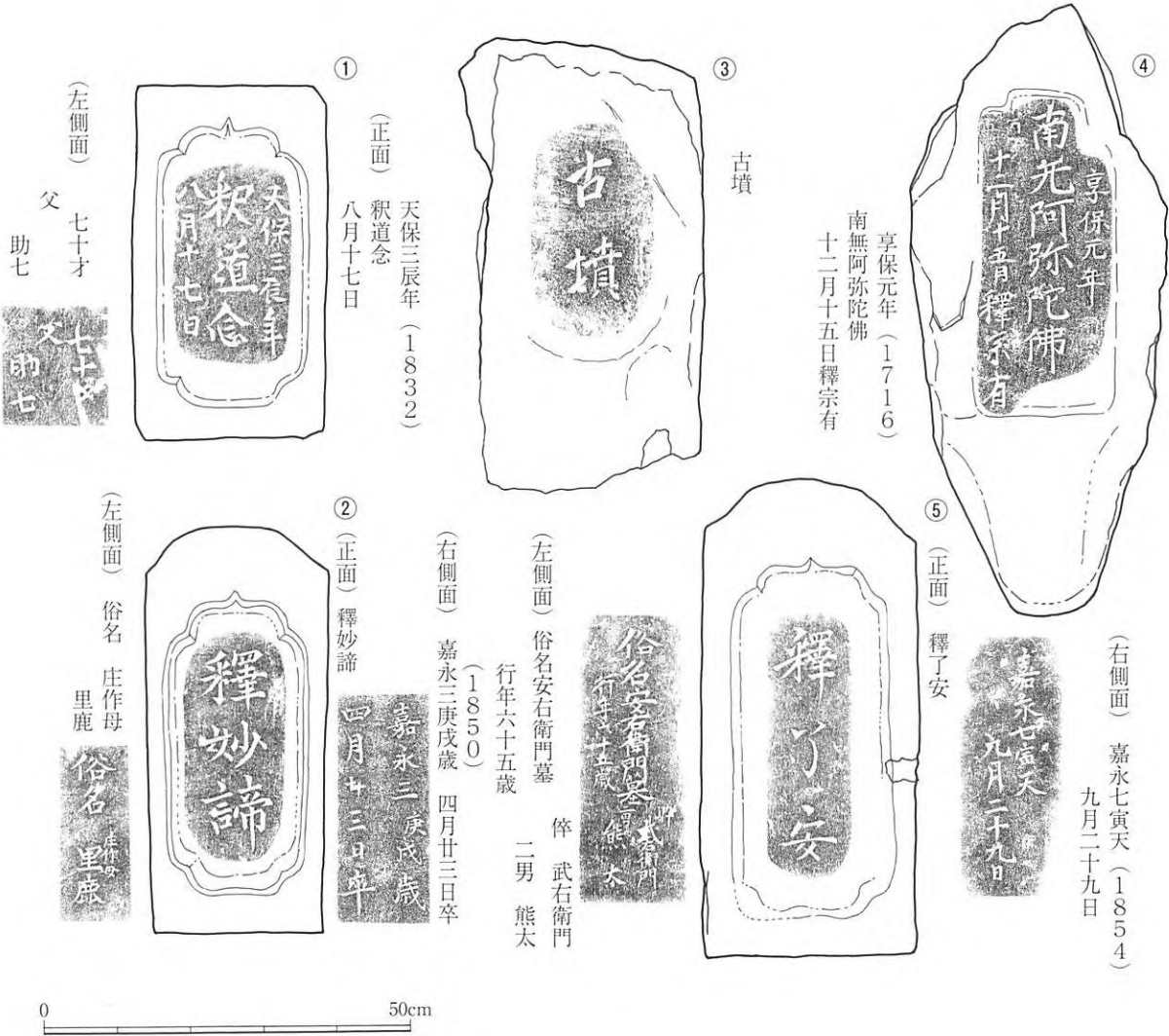
5. K区 (K-5) 墓地跡 (墓終いがされている)



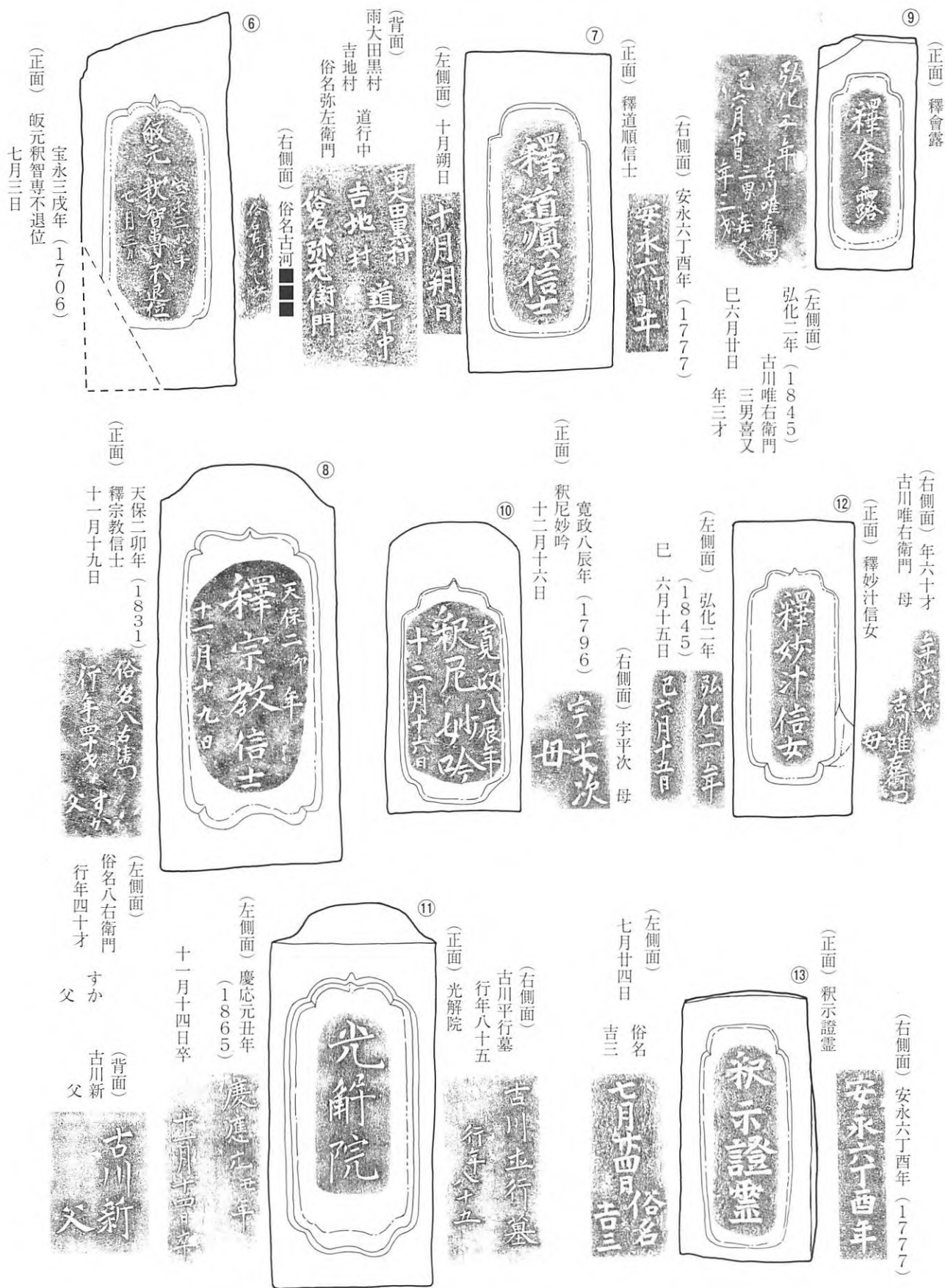
第82図 K-5墓碑位置図

番号	戒名	刻年	西暦
①	釈道念	天保三年	1832
②	釈妙諦	嘉永三年	1850
③	古墳 (刻名)	——	——
④	釈宗有	享保元年	1716
⑤	釈了安	嘉永七年	1854
⑥	飯元釈智専	宝永三年	1706
⑦	釈道順信士	安永六年	1777
⑧	釈宗教信士	天保二年	1831
⑨	釈命露	弘化二年	1845
⑩	釈尼妙吟	寛政八年	1796
⑪	光解院	慶応元年	1865
⑫	釈妙汁信女	弘化二年	1845
⑬	釈示證霊	安永六年	1777

第68表 K区 墓碑年代表



第83図 K-5墓碑実測図①

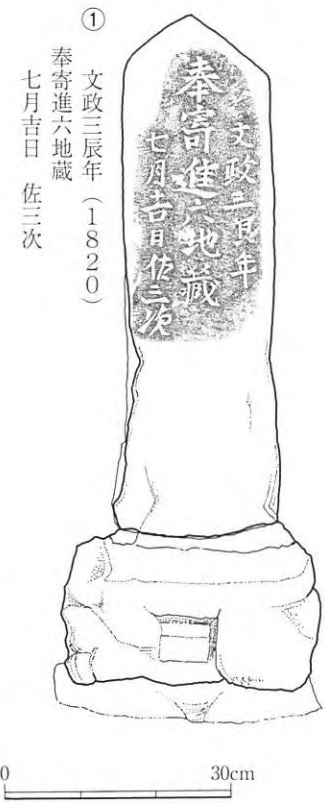


第84図 K-5墓碑実測図②

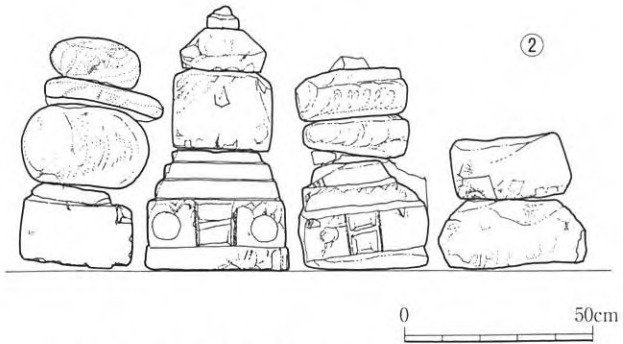
6. 高畑地区



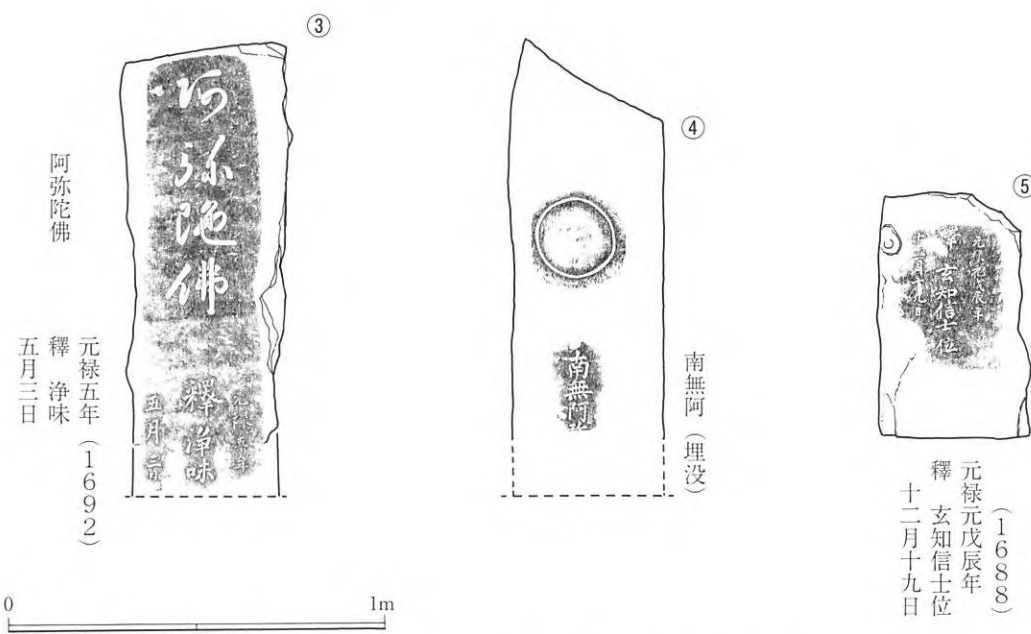
第85図 高畑地区石塔位置図



第86図 高畑六地藏 石塔実測図



第87図 高畑六地藏 宝篋印塔 (五輪塔) 実測図



第88図 高畑地区 墓碑実測図 (和仁川沿岸)

第Ⅲ章 まとめ

1.『古城考』に見る神尾城跡の縄張り

【記載文】

「東西七十間（東西七十四間）、南北八十間、高東西十間、西は尾根続き、口二間（深さ二間）、流れ三十間の堀有り、曲輪六百六十間あり」

※（ ）の部分は、『肥後国誌』の記載文。両書を読み比べると、内容は、ほぼ同一で、2 箇所だけ記載内容が異なる。

【解説】

江戸時代に、単位の「間」は、六尺五寸（1.97m）、六尺三寸（1.91m）、六尺（1.82m）の三通りがあった。そこで、本文中で「間」の換算数値と計測数値を比較したところ、神尾城跡の場合は、六尺五寸が妥当と判明した。

東西の長さは〔高城東端の①～堀切4の西縁②〕、南北の長さは〔A区の北端③～C区の頂き④〕、高東西は〔高城の東西の長さ①～⑤〕と推定した。『古城考』の記載文を、城跡地の地形に当てはめれば、大方、その様になる。

一方で、「西は尾続き」とある。確かに、その様な地形であるが、縄張りの解説は、堀切4と見られる遺構のみに留まっている。実際の所、堀切4の西域に、G区～H区～堀切5～I区～J区～K区の縄張りも展開するが、『古城考』は、この事に一切、触れていない。堀切5はもちろんの事、G区の北下縁には、確たる空堀と土塁も存在するので、不可解である。

記載文の「口二間」は、堀切4の堀幅（底部）であろう。北端近くの②～⑥で、幅3.9m。「流れ三十間の堀」は、堀切4の全長（⑦～⑧）を示す。しかも、この数値は、本格的に測量した平面上の長さを意味する。単なる斜距離でない事が、興味深い。さらに、「曲輪六百六十間」は、神尾城跡の上面縁を実際に全周した長さである事が判明した。計測数値は1300mで、『古城考』との誤差は、ほとんど無い。

大きな疑問は、これだけ正式な測量を実施しながら、先に取り上げた区画（西は尾根続き）の遺構を取り上げていない事である。何故、城跡地の中心部に限った報告に留めたのであろうか。

場 所	6 尺 5 寸 (1.97m)	6 尺 3 寸 (1.91m)	6 尺 (1.82m)	測量値 (m)
東西 70間	◎ 137.90	133.70	127.40	137.0
(74間)	145.78	141.34	134.68	137.0
南北 80間	◎ 157.60	152.80	145.60	157.6
高東西 10間	◎ 19.70	19.10	18.20	20.0
口 2 間	◎ 3.94	3.82	3.64	4.0
(深さ 2 間)	◎ 3.94	3.82	3.64	4.0
流 30間	◎ 59.10	57.30	54.60	60.0
曲輪 660間	◎ 1300.20	1260.20	1201.20	1300

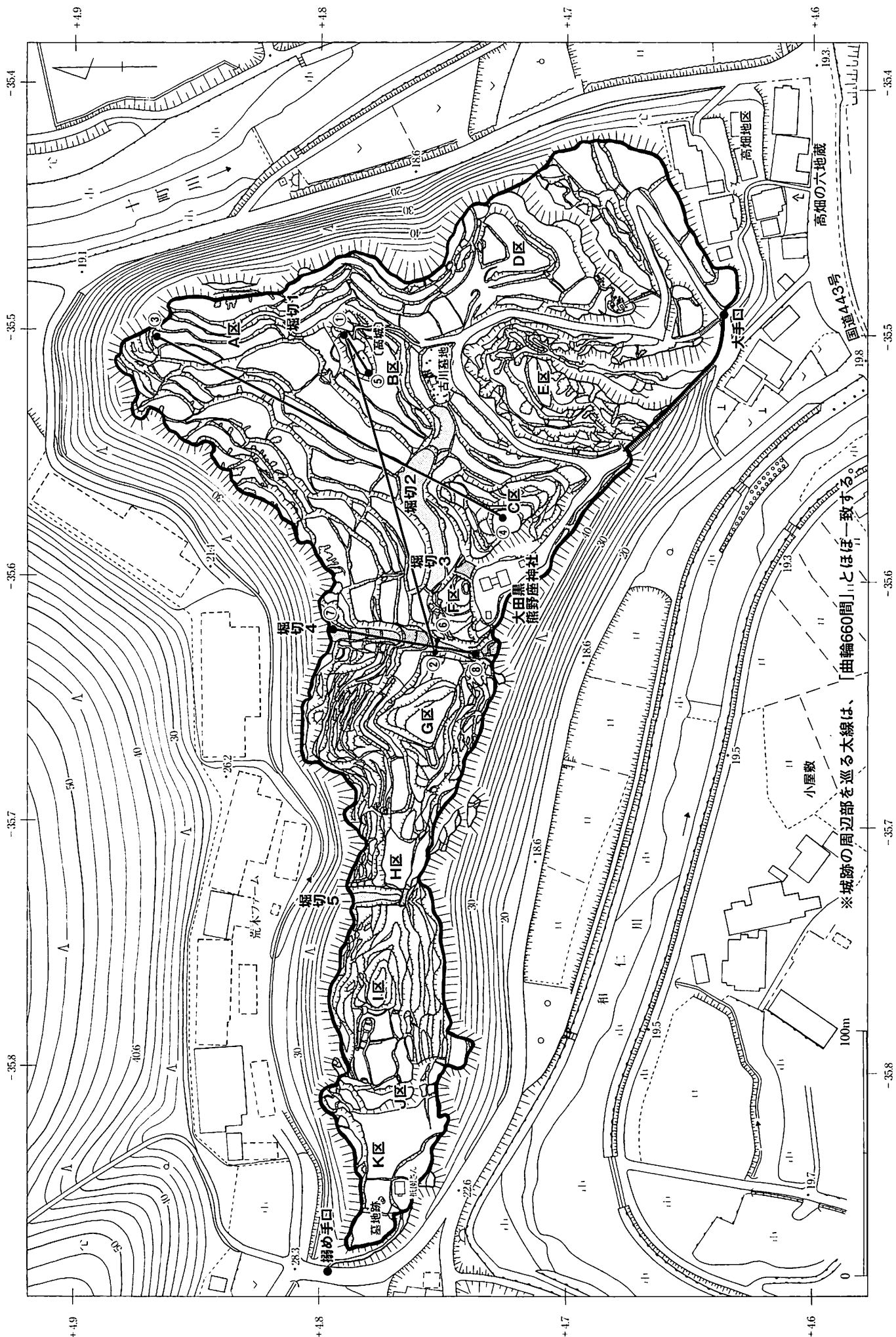
第69表 縄張り換算表①

※ ◎は、測量数値に最も近い事を意味する。

場 所	測量値	換算値
東西 ①～②	137.0m	70.7間
南北 ③～④	157.6m	82.2間
高東西 ①～⑤	20.0m	10間
堀切4 全長	60.0m	31.3間
深さ	4.0m	2 間

第70表 縄張り換算表②

※『歴史玉名』第62号（平成24年冬季号・玉名歴史研究会）掲載の「論考『古城学』（『肥後国誌』を含む）に掲載された城跡規模を検証する―大田幸博―」を参考した。



第89図 神尾城跡 縄張り計測図

※城跡の周辺部を巡る太線は、「曲輪660間」とほぼ一致する。

2. 城跡の構造

独立の低山に築かれた連郭式の山城で、南麓の国道443号（大田黒橋）との高低差は43m。俯瞰形状は、鋭角三角形で、東西の長さ418m、幅は東端で230m、西端で15m。主軸尾根は、北東端のA区から南西へ延びて、B区で西側へ直線的に向きを変える。他方、段落ちの派生尾根は、B区の南東から分岐して、高畑地区に下っている。町内では、有数の大規模城跡である。

縄張りは、主軸尾根にA～C区・F～K区の9区画が並び、派生尾根にD区、さらに、その西谷にE区がある。大手口は、高畑地区の北西で、搦め手口は、K区西端と推定される。

主軸尾根を断ち切った堀切は、計5本。堀切1はA区とB区、堀切2はB区とC区、堀切3はC区とF区、堀切4はF区とG区、堀切5はH区とI区に分けている。

堀切1は小振りで、残り4本（堀切2～5）は大規模造り。堀切1は、痩せ馬地形（A区）の付け根（B区との接点）を刻む。堀切2は、両端が空堀に変化したと推定。堀切3は、尾根の段下がり鞍部にあり、北斜面の堅堀が堀切2の空堀と繋がる事も考えられる。

堀切4は、尾根筋の中央部に土橋があり、南北両側へ堅堀が下る。北側は、裾部まで延びて、西肩部に段状の土塁を積む。南側は、程無く崖面に吸収される。

堀切5は、尾根の南端に土橋があり、北斜面を堅堀が下る。地山の凝灰岩を掘り下げており、東肩部には、堀切4と同様に、段状の土塁がある。

A区は、痩せ馬地形で、東西両斜面に段状地形が連なる。段差の大きい肩部の法面が削り出されて、あたかも、城壁のようになってい。これを、本文中では「崖線」と名付けた（これに対して、自然地形は崖面と表現）。同地形はB・C地区にもあり、総計17ラインを数える。

B区には、「高城」と呼ばれる小山がある。上面は非常に狭く、法面を崖線が巡る。築山のような外観で、神尾城跡のシンボリックな区画と考えられる。事実上の本丸である。

C区にも小山があるが、B区よりも、やや標高が低く、平地面積も広い。麓集落からは、間近に見える位置にあり、建物も予想される。西下に、江戸時代に創建された大田黒熊野座神社がある。

F区は、堀切3と4に挟まれている。尾根の途切れ部分で、小区画の傾斜地でもあり、郭としての意味合いは薄い。一方で、堀切3と堀切2の空堀部分が繋がるのであれば、堀切4との絡みが生じる。規模の大きな二重堀として、中間点の土塁的な役目を果たす事になる。

G区は、尾根筋に自然地形を残すが、北斜面に確たる空堀と土塁がある。これらの東端は、堀切4の北側堅堀に繋がっていたと思われる。

H区は、G区と尾根続きである。元来、西への傾斜地であるが、丁寧な整地がなされて、平地状態になっている。整地の理由は、不明。

I区は、東と西で造成が異なる。中央の頂きと東斜面には、自然地形が残存して、西は2区画から成る造成地である。土塁を伴う窪地や南斜面に小段群がある。

J区は、主軸尾根の段下がり部分を、段状に削り出している。上面は平地で、上下は急峻な崖面になっている。下位のK区が、城跡内で、最も標高の低い区画で、これに対処するため（有事の際に上位から攻撃を加える）の区画である。

K区は、城跡地の西端区画で、城の搦め手にあたる。広い平地で、西下の道路面とは、9m弱の高低差に過ぎない。上面は造成されて、広い平地である。平地には、何らかの防禦施設が考えられる。

D区は、段落ちの派生尾根にある。頂きに小平場があり、段下がり地形が三方から取り囲んでいる。建物の存在が考えられる。北の鞍部には、堀切が見当たらないが、その存在は確実である。

E区は、大手口にあたり、谷部の東肩部に登城道が推定される。

3. 城跡の石造物について

- (1) B区の「高城」(B-1a)に、3基の石祠(①～③)がある。①は、B-1aの南東域にあり、石台なし。明治27年に、福岡県三池郡在上原喜一郎が建立。②・③は、B-1aの東縁にあり、切り石の台座に載る。明治32年の建立。②には「英彦山神社」、③には「宮地嶽神社」と刻まれている。この状況から判断して、B-1a・1bは、城時代も、何らかの神を祀った場所であろうと推定される。
- (2) D区南下の神尾山墓地は、「歴史の楽しみ方(『広報なごみ』令和2年2月号)」に解説文を記載したので、これを77頁に転載した。
- (3) C区の円形状平場(C-1:頂き)に、石祠と石積みの台座がある。御神体は、後世に撤去されている。切り石の状態から、江戸時代と思われる。
- (4) 大田黒熊野座神社内には、拝殿前に「阿南猿田彦太神」の石碑がある。正徳三年(1713)の建立。参道の北壁に5基の石燈籠が残存する。年代は、享保八年(1723)～文政二年(1819)。さらに、参道石段の最上部と中位に石燈籠が2基ずつ。年代は、天明二年(1782)と寛政七年(1795)が1基ずつ。天明四年(1784)が2基。

52頁に記載した「12.大田黒熊野座神社」の熊野宮改築記念碑(昭和45年建立)には「新築 元禄十三年(1700)二月二十七日 上棟」とある。参考資料であるが、総じて、18世紀前半の創建と考えてよい。少なくとも、正徳三年までは遡れる。

- (5) B-19に古川墓地(古川明子氏所有)があり、51基の墓碑を数える。最も古いのは、墓碑26の元禄十二年(1699)である。神社の創建時期から、墓地が存在していた事になる。
- 墓碑33は、神尾山墓地関係の墓で、「吉弘熊之允勝葉 老女」天明八年(1788)とある。古川墓地に神尾山墓地の墓碑が混じっている。さらに、神尾山墓地で最も古い燈籠は、垂水勝清が寛政九年(1797)に建立したものである。時期が合わない。古川明子氏の言「神尾山墓地からの持ち込みと聞いています」。
- (6) K区の墓地は、墓終いされており、散在する墓碑の中から13基を調査した。最も古いのは墓碑⑥で、宝永三年(1706)。古川墓地と、ほぼ同時期である。驚く事に、石碑③には「古墳」と刻まれている。何を意味するか不明。近くに古墳は所在しない。
- (7) 高畑地区には、道路脇に「奉寄進六地藏」と刻まれた文政三年(1820)に佐三次が建立した石碑(6-①)。さらに、同地に中世の五輪塔と宝篋印塔の部品を積み上げたものがある(6-②)。古川巧さん(取材後に死去)の言「国道の拡幅工事の際、道路向かいから移された」。
- さらに、高畑地区の南西側・和仁川沿岸の畑地に、墓碑が3基(6-③～⑤)ある。元禄元年(1688)と元禄五年(1692)のもので、大田黒熊野座神社の創建に見合う時期の建立。

4. 神尾城跡と麓集落について

〔立地〕

低山(標高62.86m・南麓の大田黒橋との高低差43m)に築かれているが、極めて、立地条件に恵まれた山城である。東は十町川、南は和仁川に挟まれて、両河川は、城跡の南東側約300m先で合流する。これに加えて北側は、標高86.5mの山が、大きな楯になっている。この山と城跡(高城箇所)の高低差は+23.6m。

さらに、城跡と山の間には、帯状形の谷部がある。山と城跡に挟まれた西側の開口部は、幅40mに狭くなる。城跡の西部にも、山が裾部を下ろしており、こちらも、楯の役割を果たす。

麓集落は、和仁川を挟んだ南側で、現在は、温泉センターなどの施設もある。「小屋敷」の字名が残っており、集落の南縁には、標高70mクラスの山が楯をなしている。

以上の事から、神尾城跡は、低山に築かれているが、地の利に守られた堅固な城である事が分かる。

5. 阿蘇品保夫氏の文献調査と現地との兼ね合い

『中原雑記』（『肥後古記集覧』所収）

「神尾城をあなどった竜造寺勢は、三百騎ほどで城に迫り、何の謀りごともなく、笠の手の攻め口を攻めたが破れず、攻め口を変えようと少し後退したところを城兵につけ込まれた。更に、本丸下の北谷より切って出た大津山勢によって、水原^{みつはる}を追われた竜造寺方は、高岩^{たかいわ}の戸鼻^{とばな}より呉竹山^{くれたけやま}に飛落ち、悉く死んだという。一方、佐藤親子は、かつて知った笠の手口より廻り、傷付いた名ある二人の武者を討ち取らず国境まで送り返したので、竜造寺隆信の礼状・礼物が届き、主君よりも恩賞を得たと記されている」。

（1）場所の推定

笠の手の攻め口 ⇒ K区の搦め手。本丸下の北谷 ⇒ 牛舎のある谷。水原 ⇒ 細長い袋小路の谷部。東側に開口し、山頂近くの西側で行き止まる。竜造寺方はこの谷部を後退したものと思われる。

（2）目の神様

戦国時代、肥前の竜造寺軍勢が神尾城（城主・大津山資冬^{おつやますけふゆ}）を攻めた時、一人の手負いの武士が、この岸壁の中腹の藤かすらにひっかかり宙吊りになっていたのを、小次郎丸の村人達が見つけて下ろしてやった。しかし、敵の侍と知り、怖さの余り鍬や鋤などで撲殺した。その武将は岩本と名乗ったという。村人達は、敵将とはいえ撲殺した事を後悔して、この地に手厚く葬った。そして、いつの頃からか小さなお堂が建てられて、岩本神社と称し『岩本さん』と呼ぶようになった。現在は、目の神様として祀られている（『八つの神様ご利益めぐりエリアマップ』和水町商工観光課）。

この言い伝えは、上記の『中原雑記』の記述「高岩の戸鼻より呉竹山に飛落ち」に相通じる。

【参考】和水町「八つの神様」 合併前の三加和町史編纂時に、町では聞き取り調査をして、複数の神様の中から「八つの神様」を選定した（小山 暁氏の言）。①目の神様（岩本宮）・②イボの神様（自然石）・③胃の神様（石祠）・④性と腰の神様（七郎神・塩井谷神社）・⑤歯の神様（板碑）・⑥命の神様（石祠）・⑦耳の神様（墓石）・⑧手足の神様（石祠）。

（3）佐藤親子

佐藤但馬守・小次郎兵衛。大津山氏の家臣である。敵（竜造寺勢）を助けて、国境まで送り返している。

名ある二人の武者 ⇒ 戸嶋安房守・毛利壱岐守。礼物 ⇒ 黒皮のべの具足（甲冑）に一装束六具を相添え、ひおどし（華やかな、緋色に染めた皮）の具足に一装束六具を相添え。

（4）現地調査

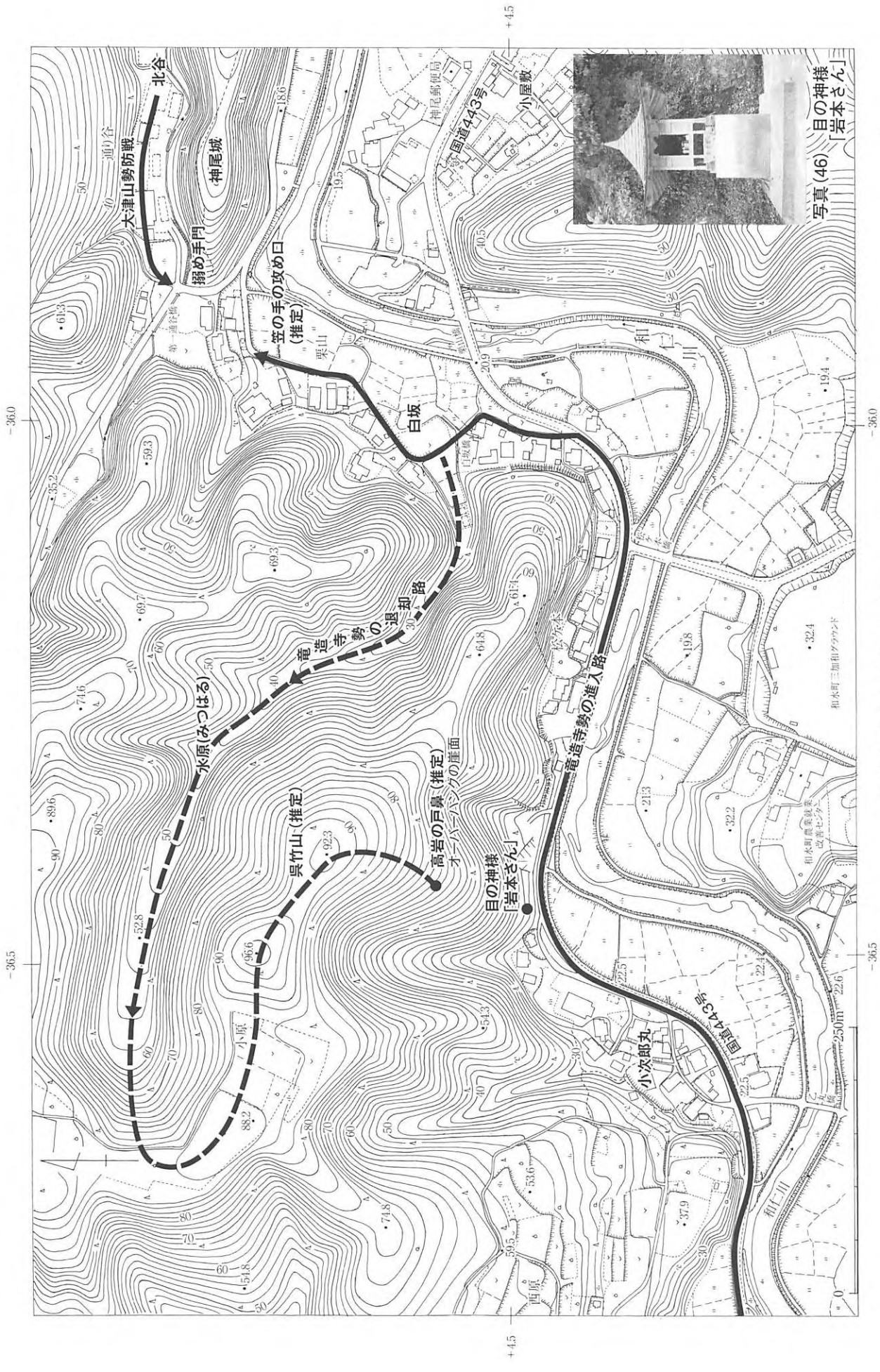
①小山 暁氏（吉地里づくり推進協議会長）のレポート〔調査日：令和3年4月22日〕

地元の歴史に詳しい古川義明氏と神尾城跡の周辺で聞き取り調査を行いました。「水原」地は、長い带状の谷部でした。谷部の入り口に居を構えておられる白坂地区の故古川泰博氏宅や上津田地区の牛島守雄（82）氏宅を訪れました。その結果、「水原」は「みつはる」と呼ばれる事が分かりました。

一方で、『中原雑記』に出てくる「笠の手の攻め口」「高岩の戸鼻」「呉竹山」の位置確認は出来ませんでした。久し振りの調査でしたが、頼みとする古老の方が、殆ど亡くなられており、愕然としました。聞き取り調査の難しさを、身を持って痛感しました。

②小山 暁氏と大田の現地調査〔令和3年5月10日〕

目の神様（岩本宮）は、断崖絶壁（水原の南側）の真下にあった。崖面の上位には、一体の石仏が彫られていた。景観的に、高岩の戸鼻と呉竹山は、この一帯で、さらに、笠の手の攻め口は、本文中に記載したK区の西端周辺だろうと言う事になった。推定場所は、第90図に記入した（大田）。



第90図 文献調査関連地形図

写真(46) 目ノ神様
「岩本さん」



〔参考〕大津山城跡（別称：藪嶽城跡 【出典】南関町文化財調査報告第2集『藪嶽城跡』1995）

所在地：熊本県玉名郡南関町大字関東字城平（大津山城と神尾城との係わりは76頁を参照）

九州縦貫自動車道・南関インターチェンジ近くの大津山に築城された山城。標高256.1m、南麓との高低差は196m。南西端に山頂があり、尾根筋は北東方向へ下る。山腹は急傾斜で、連郭式の山城。本丸・二の丸・三の丸の呼称が残っている。

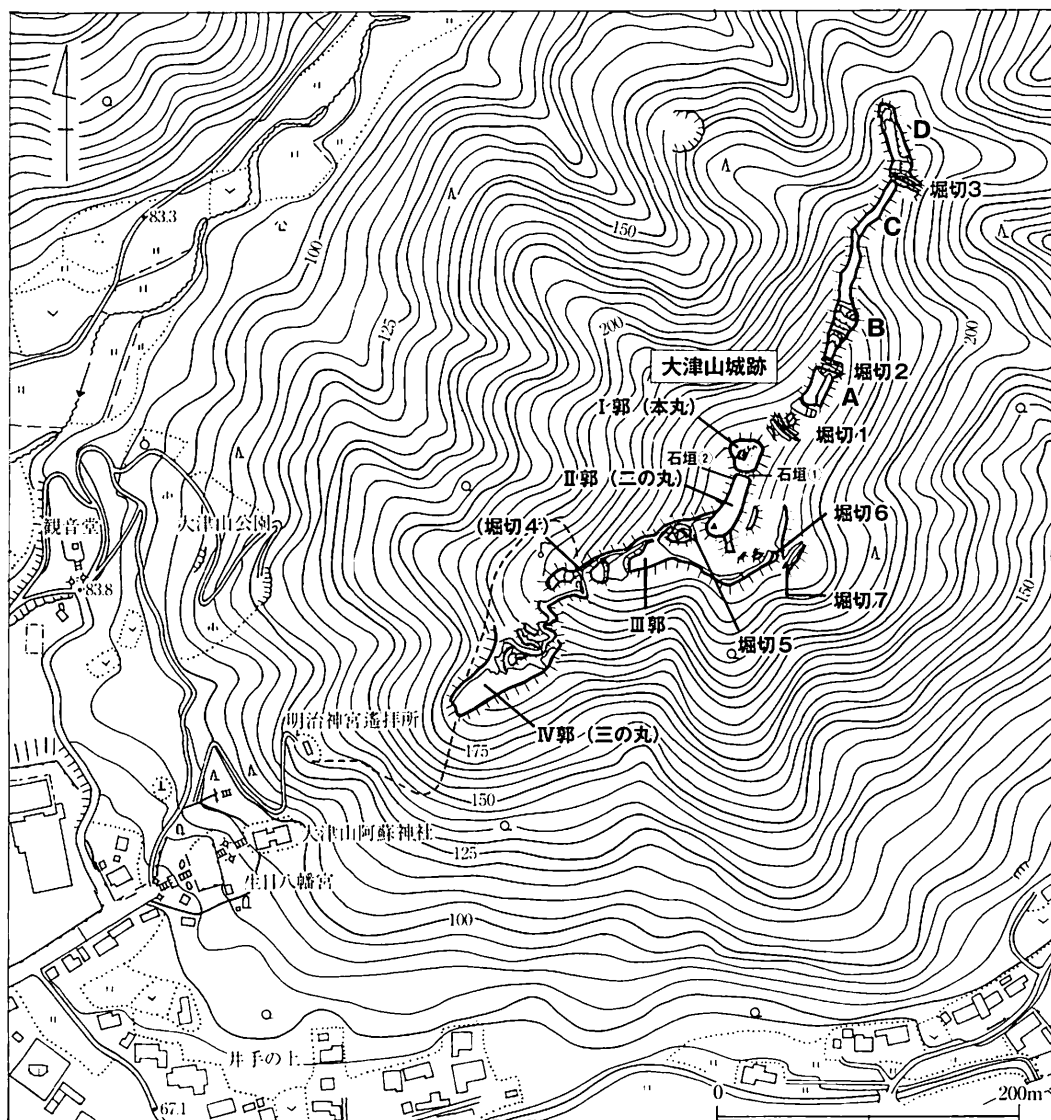
I郭（本丸）：山頂で、25×20.5mの平場がある。南縁の石垣①は、高さ1.0m、長さ6.0m。粗い整形の切り石を積む。

II郭（二の丸）：I郭南下の帯状平場で、長さ46m、幅8.3～17.4m。I郭との高低差は2.0m。II郭北西の石垣②は、高さ3.0m、長さ7.5m。南端の円形高まりは直径15m。円形内に標高256.1mの三等水準点。

堀切1：I郭の東下に残る三重の堀切。岩盤掘削で、③の堀底は、長さ19m、幅2.0m～3.0m。I郭東縁との高低差は、11m。④は、岩盤を両面から直に削り残した土塁。長さ22.2m、幅1.3m、高さ1.0m。⑤の堀底は、長さ20m、幅1.2m～2.3m。⑥は、小山状に掘り残された土塁。上場幅7.0m×6.5m。⑦は、二重堀の外側にあたる。堀底は、長さ18.2m、幅3.9～6.8m（→第93図）。

尾根筋A：上面は、平らで、長さ21.5m、幅6.4～10.3m。

尾根筋B・C・D：自然地形の尾根筋。



※『藪嶽城跡』掲載図面を一部抜粋し、再トレースした。

第91図 大津山城跡縄張り図

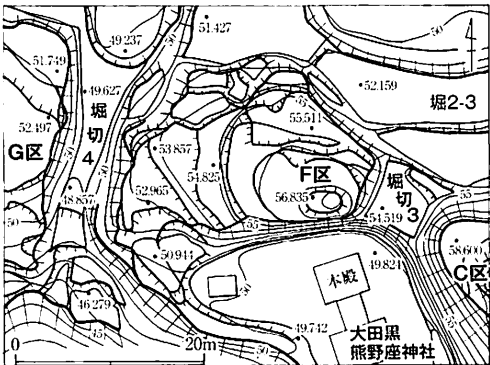
堀切 2：堀底の長さ17m、幅 2～2.5m。中央部に土橋がある。上場幅4.5m。土塁は長さ15m、幅2.0m。
 堀切 3：長さ26.5m、堀底幅1.0～2.2m、上場幅5.2m。直線的な走行。土塁は長さ21m、幅1.5～1.9m。
 堀切 4：小規模堀切。消滅（現在は駐車場）。
 堀切 5：Ⅱ郭西下の小規模な堀切。長さ14m、幅2.0～4.5m。
 犬走り：幅1.0～5.0m、Ⅱ郭の先端斜面を巡る。端部に堀切 6。
 段状地形：Ⅱ郭の南直下に、5段が残っている。
 堀切 6：長さ9.0m、幅3.5m。
 堀切 7：長さ21m、幅1.5m。
 Ⅲ郭：3区画の平場が連なる。
 Ⅳ郭（三の丸）：規模は、長さ59m、幅34～10m。基底部に小山状の高まり。

神尾城と大津山城は、大津山氏の格護の城であったと思われる。両城間の距離は、約10km。

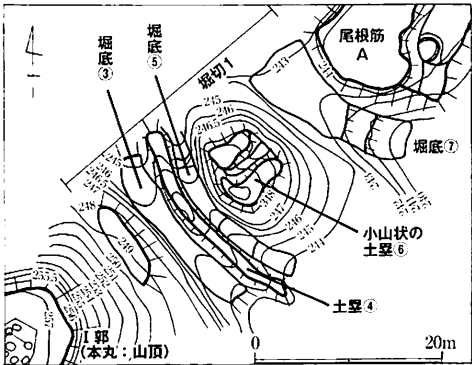
城跡	種別	麓との高低差	城主	縄張り	遺構分布	堀切	区画
神尾城跡	山城	43m	大津山資冬 すけふゆ	尾根筋に展開	長さ(東西)418m 最大幅(南北)230m	5本	11区画
大津山城跡	山城	196m	大津山家稜 いえかぜ	尾根筋に展開	長さ(北東-南西)530m 最大幅(東西)90m	7本	6区画

第71表 城跡概要

※特筆事項 二重堀の中間点が、土塁では無く、小山の様相をなす。
 神尾城跡 ⇒ 堀切 3と堀切 4の間は、小山状のF区。
 大津山城跡 ⇒ 本丸と二の丸の間に三重堀があり、堀底⑤と堀底⑦の間に小山状の土塁⑥。
 同じ形状は、町内の萩原城跡にある。尾根筋に刻まれた堀切 1と堀切 2の間に小山状のⅢ郭。

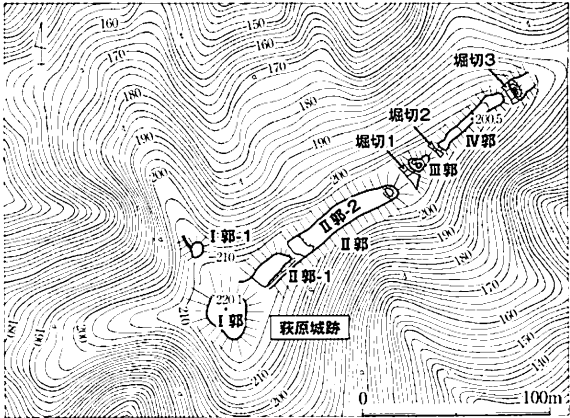


第92図 神尾城跡・F区周辺図

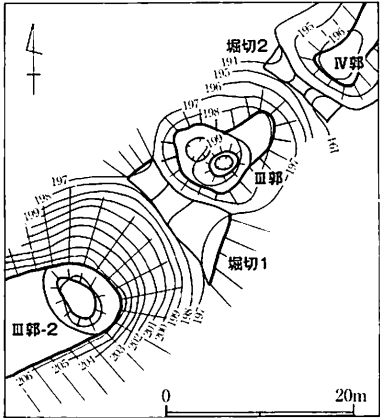


第93図 大津山城跡・堀切 1周辺図

※『藪嶽城跡』掲載図面を一部抜粋し、再トレースした。



第94図 萩原城跡縄張り図



第95図 萩原城跡・Ⅲ郭周辺図

※『萩原城跡』掲載図面を一部抜粋し、再トレースした。

神 尾 城

阿蘇品 保夫

(元・八代市立博物館・未来の森ミュージアム館長)

神尾城は、城が機能してした中世末期では「神野尾ノ城」と呼ばれていたと推測できる。

『国郡一統志』（1706）の国郡寺社総録の大田黒村の項では「大津山居城」、同書の名蹟志では「大田黒城、大津山某守之」とあり、『南関紀聞』（1706）では「神尾ノ城合戦事」、「大津山家稜籠神尾城」と記すが、編者の北島雪山も井沢蟠竜もその地の住民から当時の呼称を採取したとみてよい。

「神尾城」・「神尾ノ城」という表現は、『肥後地志略』（1709）、『肥後国誌』（1772）、『古城考』（1788）、『新撰事蹟通考』（1831）と継承されて定着したといえる。

ところが、『肥後古記集覧』所収の『中原雑記』では「大田黒神野尾ノ城」とあり、本文中にも「右之使者五人神野尾ニ被召寄御対面ニて」と場所を示す言葉として用いられている。また、同書所収の同系本『昔噺聞書』でも「大田黒神ノ尾ノ城」と記されている。

両記録は、肥後北部の国人内古閑氏と大津山氏の家臣であり、縁者関係にもあった子孫たちを中心に、何回かの増補・整理により、形成されたと推定されるもので、その時期は18世紀初頭成立の『国郡一統志』や『南関紀聞』より早く、17世紀中期を下らぬと推測される。特に『中原雑記』では、証言者の氏名も挙げて原初の形を残しているが、その一人・佐藤小次郎兵衛は父と共に天正十年（1582）、神尾城に籠城して竜造寺勢を撃退し、手柄をたて賞せられた人物である。その後の天正国人一揆後は帰農するも、朝鮮出兵で七年間従軍後は、筑後で浪人していたが、加藤氏改易（1632）の後帰国、山鹿郡西牧村において「我母の母方伯父佐藤小次郎兵衛、折々物語被申候を爰に記」と甥が記しているように、神尾城での竜造寺との合戦を語っている。これは籠城した当事者の生存中の証言聞書であるから「神野尾」という当時の呼称は確かであり、ただ後世変化した呼称の方が定着して現在に到っているというべきであろう。

『昔噺聞書』は「大津山氏ハ代々南ノ関大津山（藪嶽・筆者注）ニ居住也、資冬ノ代ニ大田黒神ノ尾城ニ移り住、大津山ニハ嫡子家稜居住也」とあり、『国郡一統志』も南関古城は大津山河内守（家稜・筆者注）、大田黒城は「大津山某守之」と記しており、両城とも大津山氏格護の城であったことは間違いない。天正十年頃の神尾城は、家督を家稜に譲り、後兄の立場にあった資冬の居城であり、本城と相呼応する役割を持っていたといえよう。国境の要衝の地を領する小国人領主である大津山氏にとって、内外の政治動向に左右されながら生き延びる選択肢をより多く用意しておくことは常に心懸けておかねばならぬ命題であり、領内二城が戦略上の選択肢として生かされた例が、天正十年の肥前竜造寺勢の侵攻であった。

この時、大津山父子は国境の要地を抑える藪嶽の本城を捨て、約10kmほど東の神尾城で防戦している。肥前竜造寺勢にとって、国境本道沿いの藪嶽城より奥に入り込んだ神尾城攻めは、兵の動員や補給に苦しむとみての判断であったといえよう。神尾城をあなどった竜造寺勢は、三百騎ほどで城にせまり、何の謀りごともなく、笠の手の攻め口に攻めたが破れず、攻め口を変えようと少し後退したところを城兵につけ込まれた。更に、本丸下の北谷より切って出た大津山勢によって、水原を追われた竜造寺方は高岩の戸鼻より呉竹山に飛落ち、悉く死んだという。一方、佐藤親子は勝手知った笠の手口より廻り、敵を追って首を取っただけでなく、傷付いた名ある二人の武者を討ち取らず国境まで送り返したので竜造寺隆信の礼状・礼物が届き、主君よりも恩賞を得たことが記されている。

天正十四年（1586）、家稜は肥後に侵攻して来た薩摩の島津氏に従い、その先手となって筑前岩屋城を攻め

ているが、秀吉の九州出兵にはすぐ従い、五十町の地を安堵された。しかし佐々成政は藁嶽城を国境要衝の城として召し上げ、家臣を城代として派遣したので、家稜は東前原に居を移さざるを得なかったが、その翌年の天正国人一揆において、縁者内古閑氏の誘いに応じ、神尾城で挙兵した。藁嶽城は召し上げられても神尾城は残っていたのである。しかし、家稜は成政の甘言に誘い出され、吉地村浄満院で殺害された（墓は西吉地にあり）。従って城主を失った籠城の兵は四散し、神尾城は、天正国人一揆の戦場とはならなかった。神尾城は大津山氏の存亡に関わった城である。

大津山氏については、藤原姓・日野一族の一人が南北朝の末頃に北朝方武家として玉名郡臼間野庄に來住、土着したと系図には記されているが、確かなことは分からない。玉名郡北部に中世後期に存在した和仁氏・辺春氏と同じ小規模国人領主であるが、いずれも天正の国人一揆で滅亡し、伝来の文書も存在しない。ただ末の重経・資冬・家稜については、「鹿子本文書」・「小代文書」・「上井覚兼日記」などにその動向が散見され、後世の記録では、先述の『中原雜記』・『昔噺聞書』・『南関紀聞』の中に伝えられるにとどまる。一方、藤崎八幡宮所蔵の「銘元国太刀」（県指定重文）の所蔵者銘に刻まれている「大津山彈正資宗帶之」の文字から、資宗は実在の人物として確かであるが、この名を系図からは見出せない。

歴史調査の楽しみ方（広報なごみ 令和2年2月号より転載）

「神尾城跡16」

大田 幸博

（元・菊水町史編集委員会副委員長）

神尾城跡の南東隅にある神尾山墓地は、江戸期に大田黒を知行した吉弘^{よしひろ}氏が建立しました。最も古い灯籠は、寛政九年（1797）です。これが墓地の開設時期になります。近くの古川墓地とは、100年遅れになります。

吉弘加左衛門正葉之墓〔左側面解釈文〕

正葉^{よさは}は、祖先は大友氏。能直^{よしなお}の九男・田原泰廣^{やすひろ}の子孫・貞直^{さだなお}は、豊後の吉弘郷に住み、吉弘貞直と名乗った。十一代^{じゅういちだい}の統率^{むねり}は、慶長五年（1600）九月、豊後・石垣原^{いしがきばら}の役で戦死。次男^{まさひさ}の正久は、肥後藩で禄を得た。五代^{ごだい}の正直^{なおまさ}は、隠居して青山^{せいざん}と号した。長男は正葉。正直は寛政九年（1797）に死去。正葉は命で関東に赴き、寛政十年に病死。四十六才。（※墓は正葉の子・正雄が建立）

本覚院青山翁之墓〔裏面の解釈文〕

正直は、禄高三百五十石。三村から年貢米を得た。肥後藩から許可を得て、玉名郡大田黒（和水町）・同郡西照寺^{しやうじ}（玉名市岱明町）・益城郡上郷〔上江とも〕（宇城市豊野町）に居住。享保十七年（1732）に誕生。騎隊^{きたい}となり、隠居して青山と号した。寛政九年（1797）に死去。

吉弘氏にかかる墓碑銘と侍帳からの所見

- ①加藤家・細川家の侍帳によって、関ヶ原の戦いでは西軍に属し、豊後・石垣原合戦で破れた大友氏の旧臣（大友一族で、同じ紋章を用いています）・吉弘氏の子孫には、合戦後、小西領を併せ、肥後の大名加藤家に仕えた吉弘氏と、すでに丹後（京都）時代から豊前の大名となった細川氏に仕えた吉弘氏がいたことが分かります。
- ②豊前で細川氏に仕えた吉弘助五郎が、肥後に随従して来た時の知行は百五十石。それを継承した子孫の名は見出せません。

加藤家に仕えた吉弘加兵衛^{かへえ}（正行）は一千石余の知行でしたが、加藤家の改易^{かいえき}で浪人となり、代って肥後の大名として入国した細川氏に召し抱えられました。その子の藤左衛門は侍帳で三百石とありますので、親

の加左衛門正行も同じ三百石の知行であったとみられます。

以後、吉弘氏の知行は五百石の時期もありましたが、分家を立てて二百石を譲りましたので、それ以降は、本知（本来の知行）三百石と新知（新知行地）五十石の計三百五十石で推移しました。

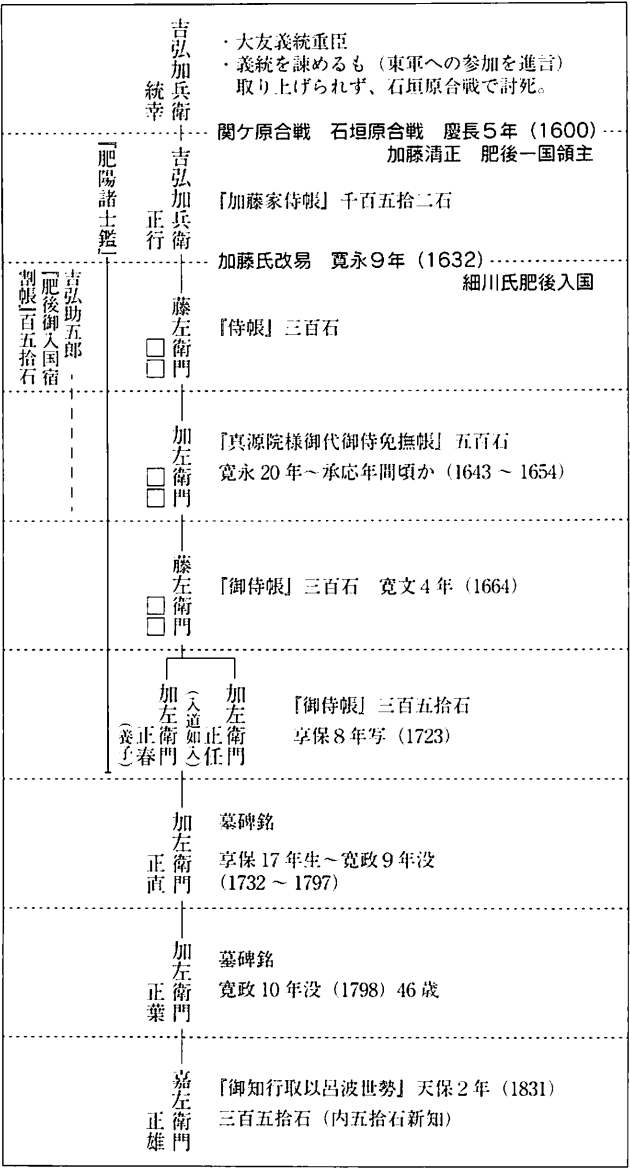
③この家は、通称を「加（嘉）左衛門」または「藤左衛門」と称し、実名（個人の名前）は「正」を通字として代々名乗っています。鉄砲頭脇役や馬廻衆などの役についていた例が推定されます。

吉弘統幸は、石垣原合戦で主君を諫めるも聞き入れられぬまま、合戦の主力となって討死したことで、後世まで評価の高かった人物です（地元に吉弘神社があります）。加藤家に仕えた吉弘加兵衛（正行）は、実名読みも「マサユキ」と「ムネユキ」と共通しており、統幸と正行は親子の関係にあったとみられます。

④侍帳も墓碑銘も、吉弘氏の知行地は玉名郡では西照寺村・大田黒村と歴代変化が無く、同氏はこの地に格別の愛着を持っていたと思われ、遺言もあって神尾山に墓碑を建立したのでしょう。多くの場合、熊本在住の藩士は、熊本所在の菩提寺に墓所を定めていますので、異例です。

⑤加左衛門正春は、享保八年（1723）の侍帳の当主ですが、養子でありながら正任と正春は兄弟であると解釈されます。正任に後嗣なく、弟が養子となって次代を継承したとみられます。

第96図は、肥後藩における家系を、前半は『肥陽諸士鑑』、後半は墓碑銘で繋ぎました。正春までは明らかですが、墓碑の正直は不明で〔銘から生没年（1732～1797年）は明らかです〕、侍帳では空白期にあたります。おそらく、享保八年（1723）の正春より後で、天保二年（1831）の侍帳の嘉左衛門より前の時期の当主であると推定されます。そして、正葉の子・正雄は、その天保の嘉左衛門と見てもよいと思われます。



第96図 吉弘氏略系図（案）

写 真 图 版

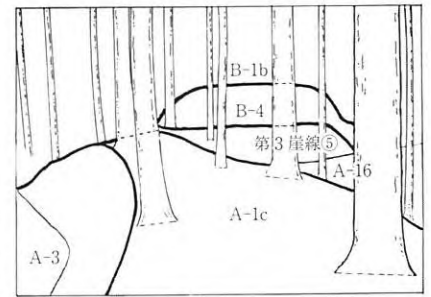


写真 1
A区上面 (A-1c→南側)

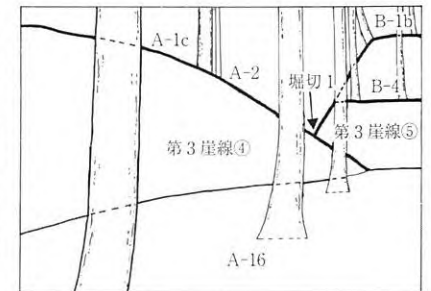


写真 2
堀切1と第3崖線④

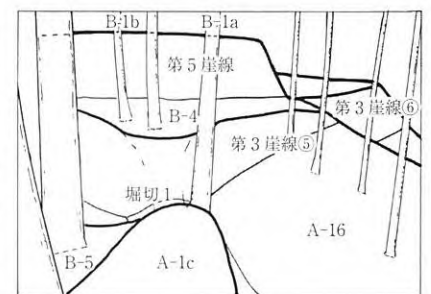


写真 3
A-1c → 堀切1 → B-4

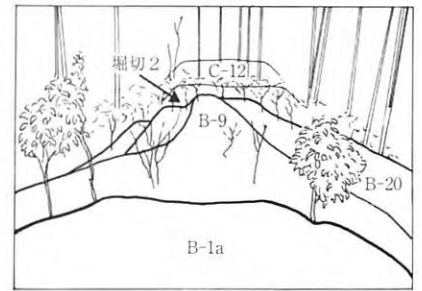


写真 4

〔高城〕 (B-1 a) → B-9 → 堀切 2

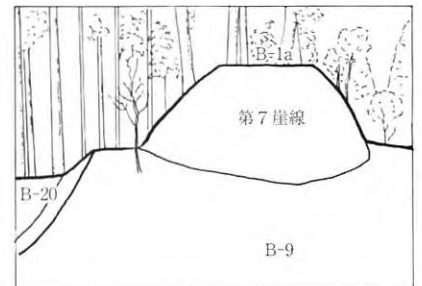


写真 5

B-9 → 〔高城〕 (B-1 a) の第 7 崖線

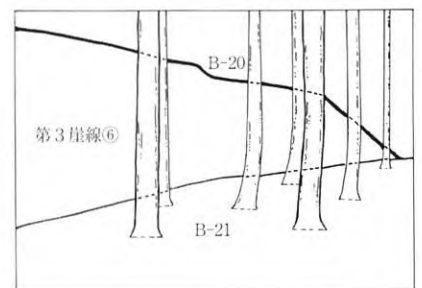


写真 6

B-21と第 3 崖線⑥

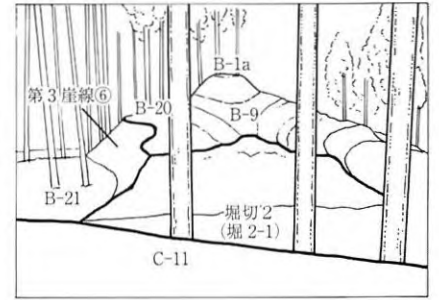


写真7
C-11 → 堀2-1 → B-9

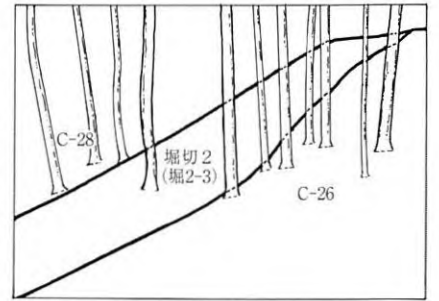


写真8
C-26 → 堀2-3

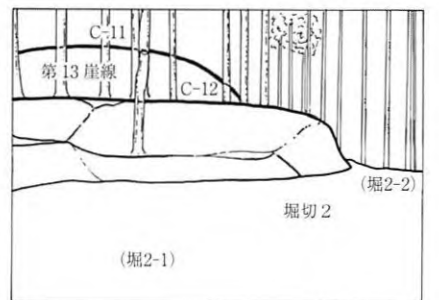


写真9
堀2-1 → C-12

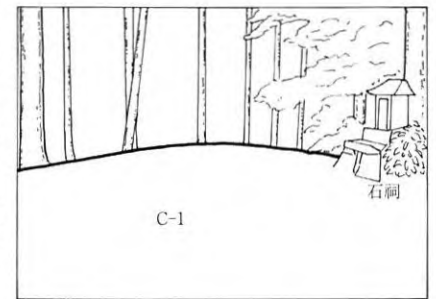


写真10
C区頂上 (C-1) 南→北

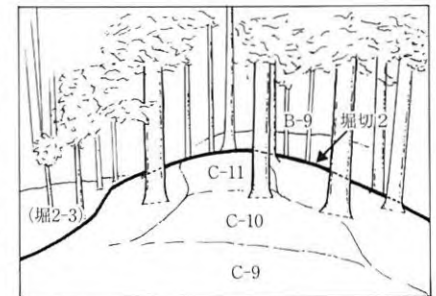


写真11
C区主軸尾根筋 (C-9 ~C11)
南西→北東

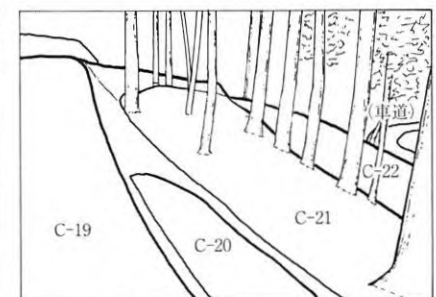


写真12
東凹地斜面段状地形 (C-19) 南→北

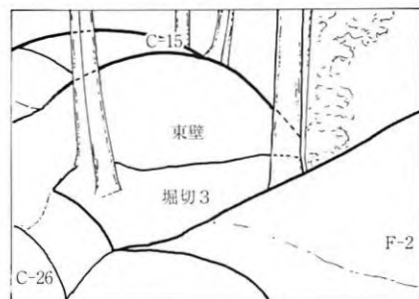


写真13
堀切3 (F-2 → C-15)

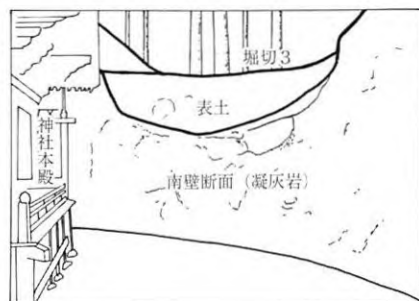


写真14
堀切3 南壁 (大田黒神社) 断面

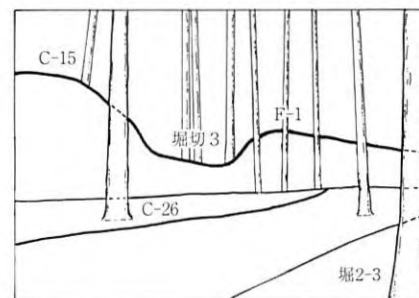


写真15
C-26 → 堀切3

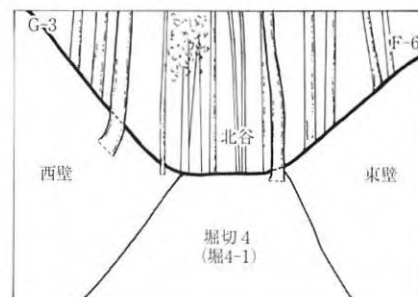


写真16
掘切 4 (南→北)

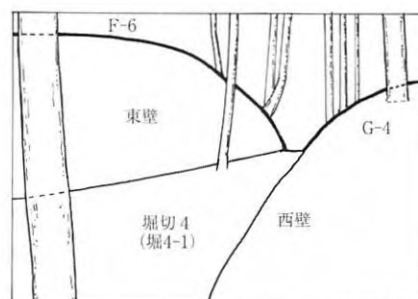


写真17
掘切 4 (北→南)

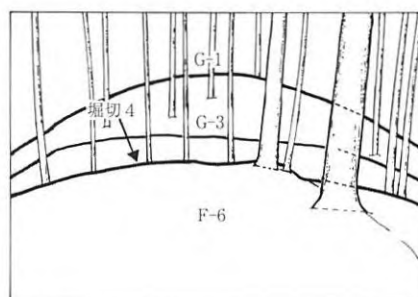


写真18
F-6 → 掘切 4 → G-3

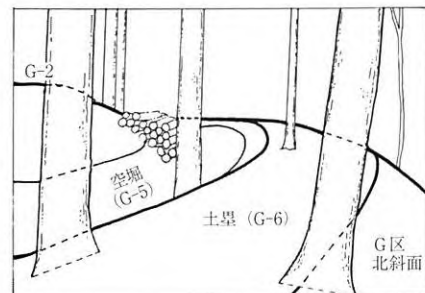


写真19
G区 空堀 (G-5) と土塁 (G-6)
東→西

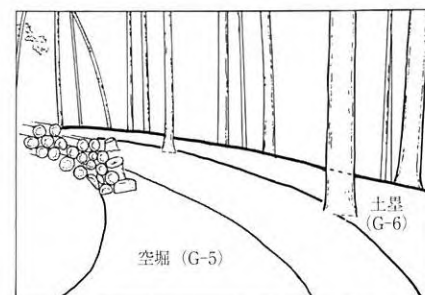


写真20
G区 空堀 (G-5) と土塁 (G-6)
(屈曲部)

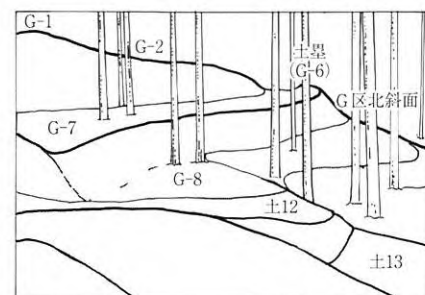


写真21
G区北斜面 東→西

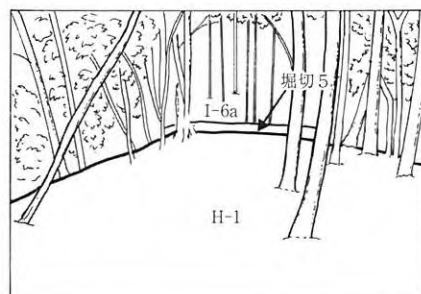


写真22

H区主軸尾根筋平坦部 (H-1) 東→西

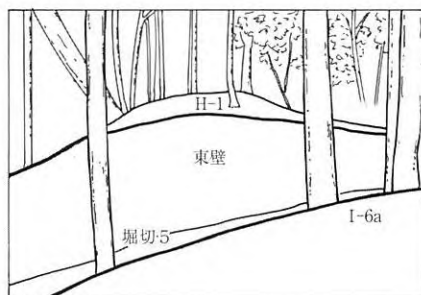


写真23

I-6a → 堀切 5 → H-1

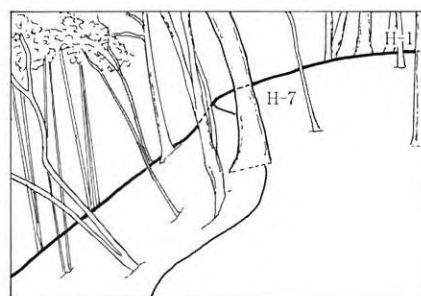


写真24

H区南斜面 (H-7) 東→西

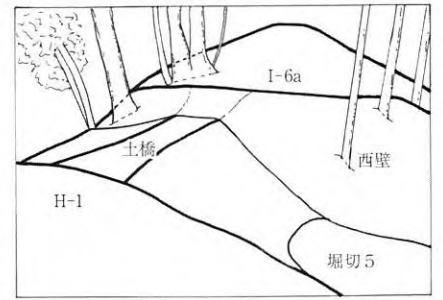


写真25
堀切 5 ・土橋

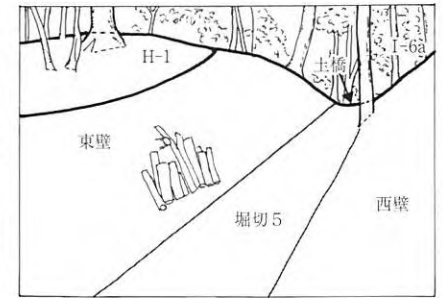


写真26
堀切 5 ・東側土壁 北→南

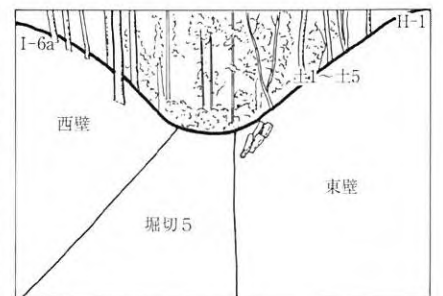


写真27
堀切 5 (南→北)

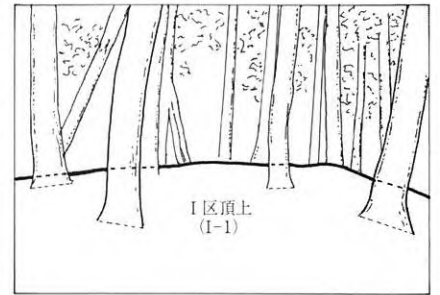


写真28
I 区頂上 (I - 1) 東→西

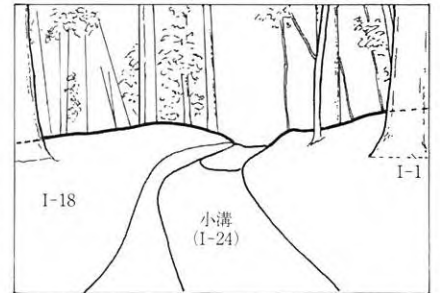


写真29
I - 24 (小溝) 南→北

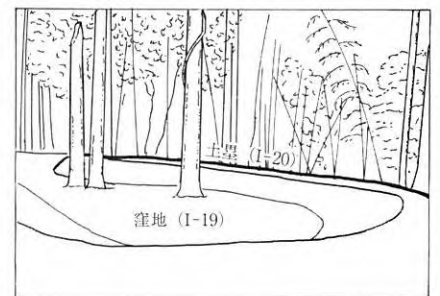


写真30
窪地 (I - 19) と土塁 (I - 20)

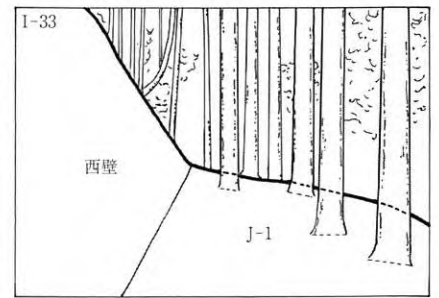


写真31
J区・J-1とI-33の西壁

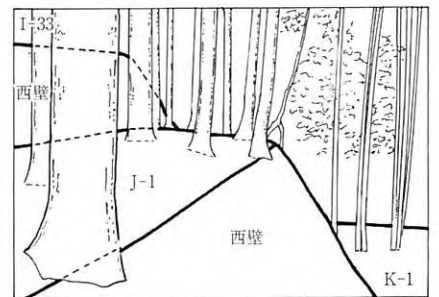


写真32
J区・J-1の西壁

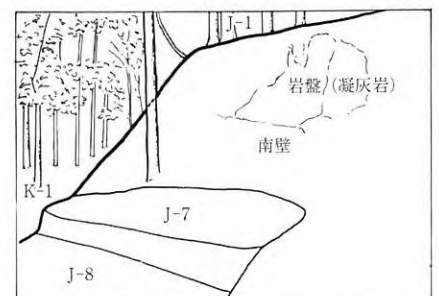


写真33
J-7と南側崖面

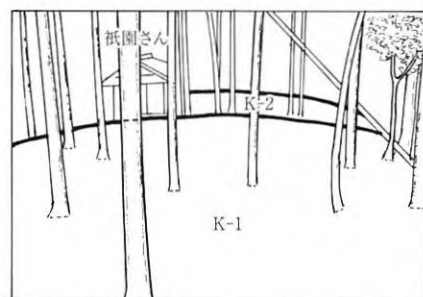


写真34
K-1 (東→西)

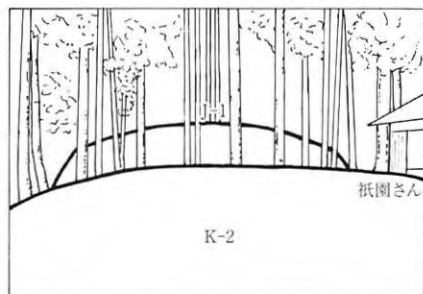


写真35
K-2 (西→東)

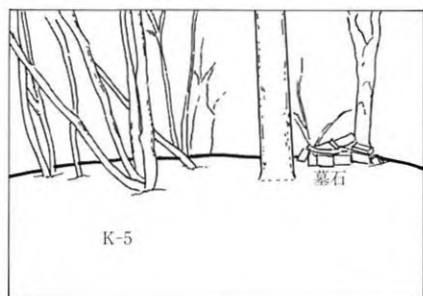


写真36
墓地跡 (K-5) 南→北



写真39
D区北鞍部 (D-1 → D-32)

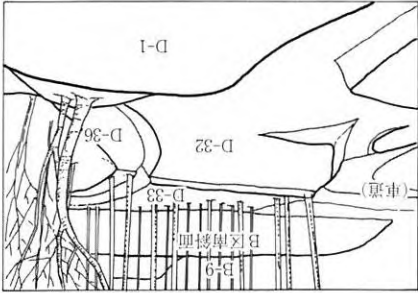


写真38
D-11と第17崖線 (北→南)

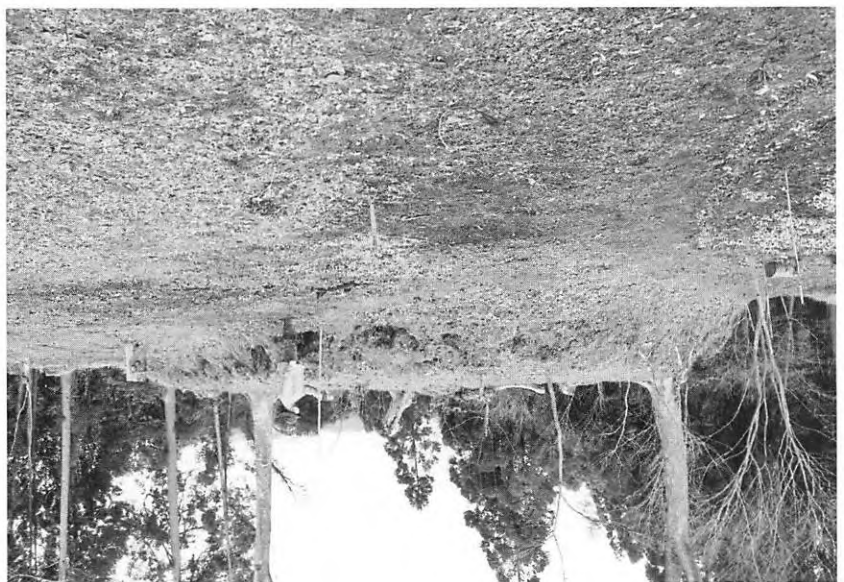
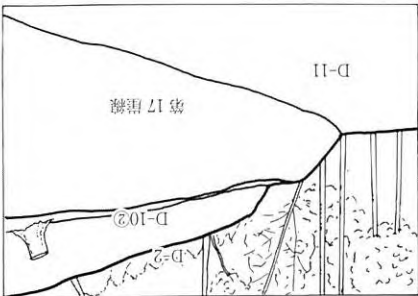
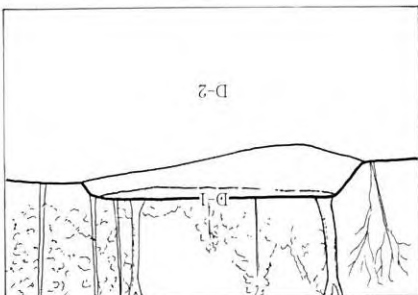


写真37
D-2 → D-1



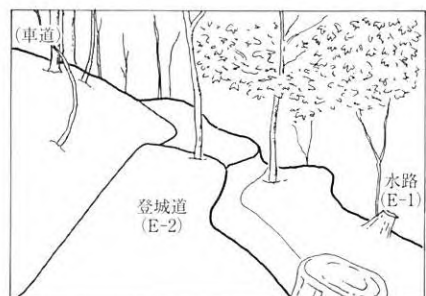


写真40
E区・登城道（E-2）南→北

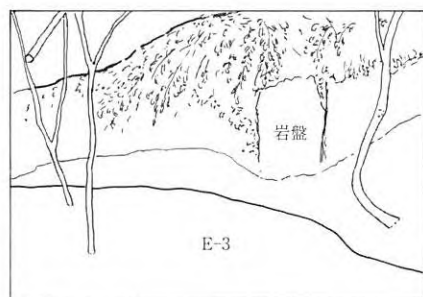


写真41
E-3 南→北

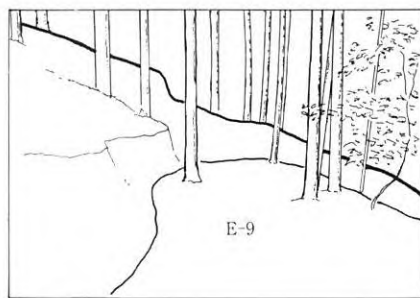
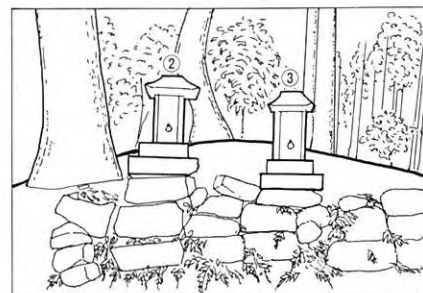
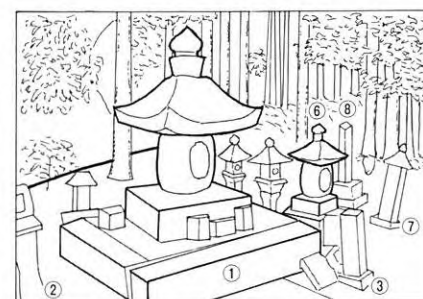


写真42
E区・带状削平地（E-9）南→北



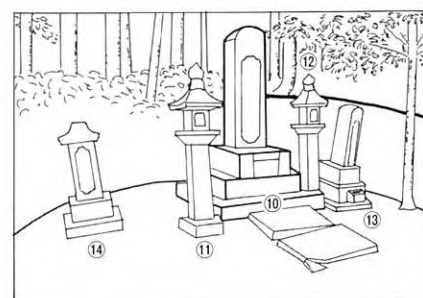
(→53頁)

写真43
B-1a〔高城〕石祠②・③



(→55～57頁)

写真44
神尾山墓地 (D-8)



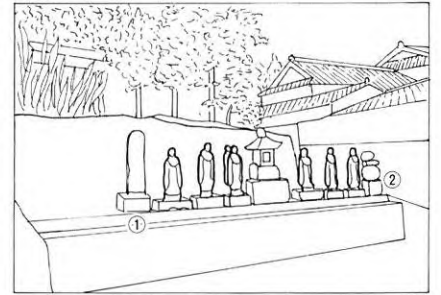
(→57・58頁)

写真45
神尾山墓地 (D-9)



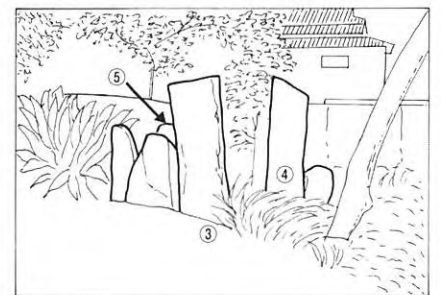
(→52頁)

写真46
大田黒熊野座神社



(→67頁)

写真47
高畑の六地藏



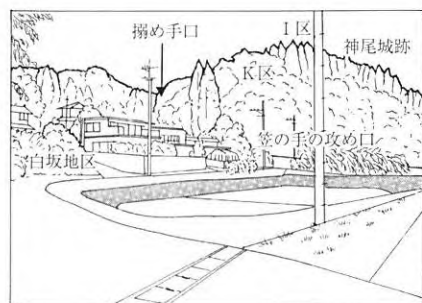
(→67頁)

写真48
高畑地区の墓碑 (和仁川沿岸の畑地)



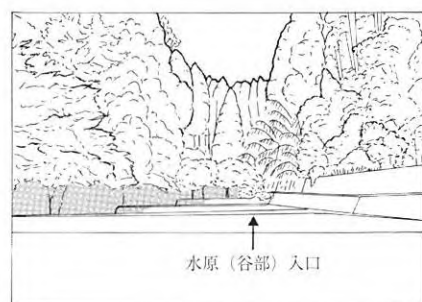
(→72・73頁)

写真49
小次郎丸地区



(→72・73頁)

写真50
笠の手の攻め口（推定）
城跡西端部（白坂地区）



(→72・73頁)

写真51
水原（谷部）への入り口

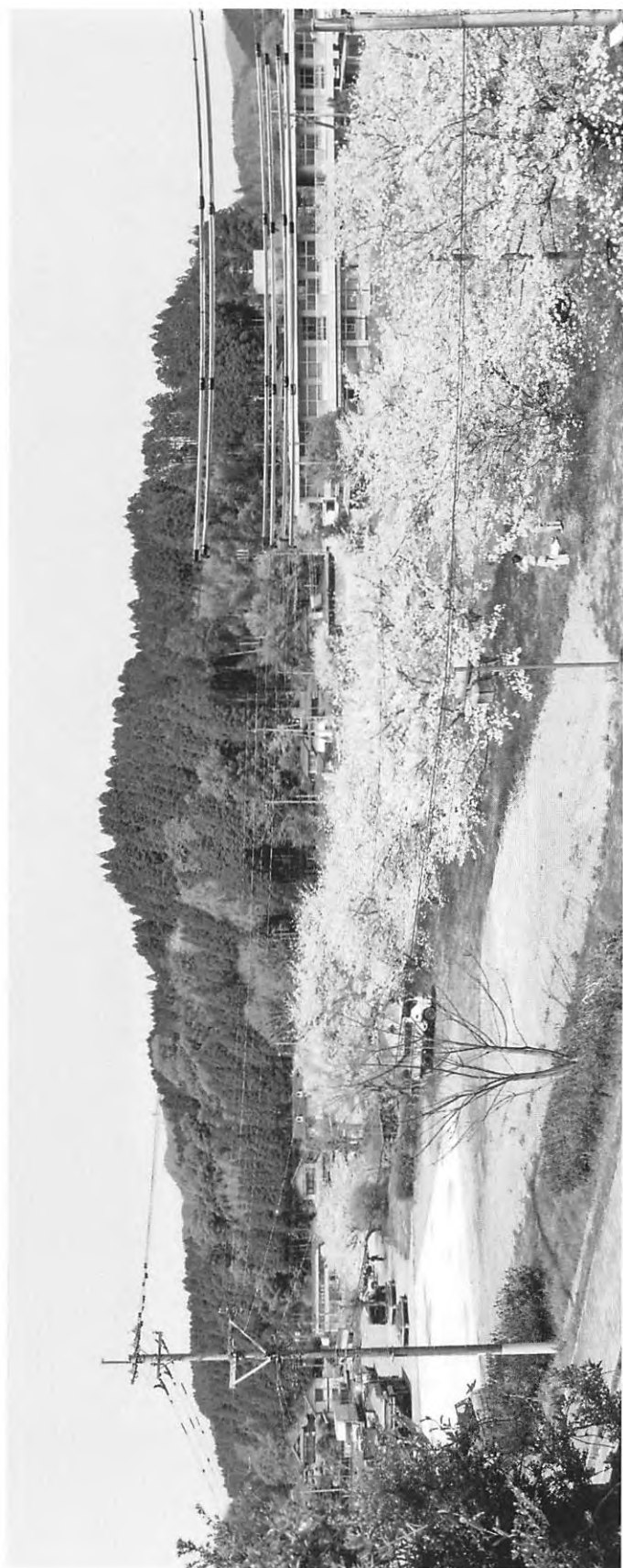


写真52 神尾城跡 遠景 (南東側より)

(→13頁)



報 告 書 抄 録

書 名	神尾城跡
シリーズ名	和水町文化財調査報告 第11集
編 著 者 名	益永浩仁 大田幸博
編 集 機 関	和水町教育委員会
所 在 地	熊本県玉名郡和水町江田3886
発 行 年 月	2021年11月 1 日

所収遺跡名	所 在 地	調 査 期 間	調査原因
神尾城跡	熊本県玉名郡和水町 大字 大田黒 字 東川	平成29年（2017年）5 月 ～令和 2 年（2020年）3 月	学術調査

遺 跡 名	主 な 時 代	主 な 遺 構
神尾城跡	・ 16世紀	平場・堀切（1～5）・空堀・土塁・崖線

和水町文化財調査報告 第11集

神尾城跡

令和 3 年11月 1 日

〔編集発行〕

和水町教育委員会

〒865-0192 熊本県玉名郡和水町江田3886

☎0968-86-3131

〔印 刷〕

西本印刷

〒861-2241 熊本県上益城郡益城町宮園564- 2

☎096-286-4151

